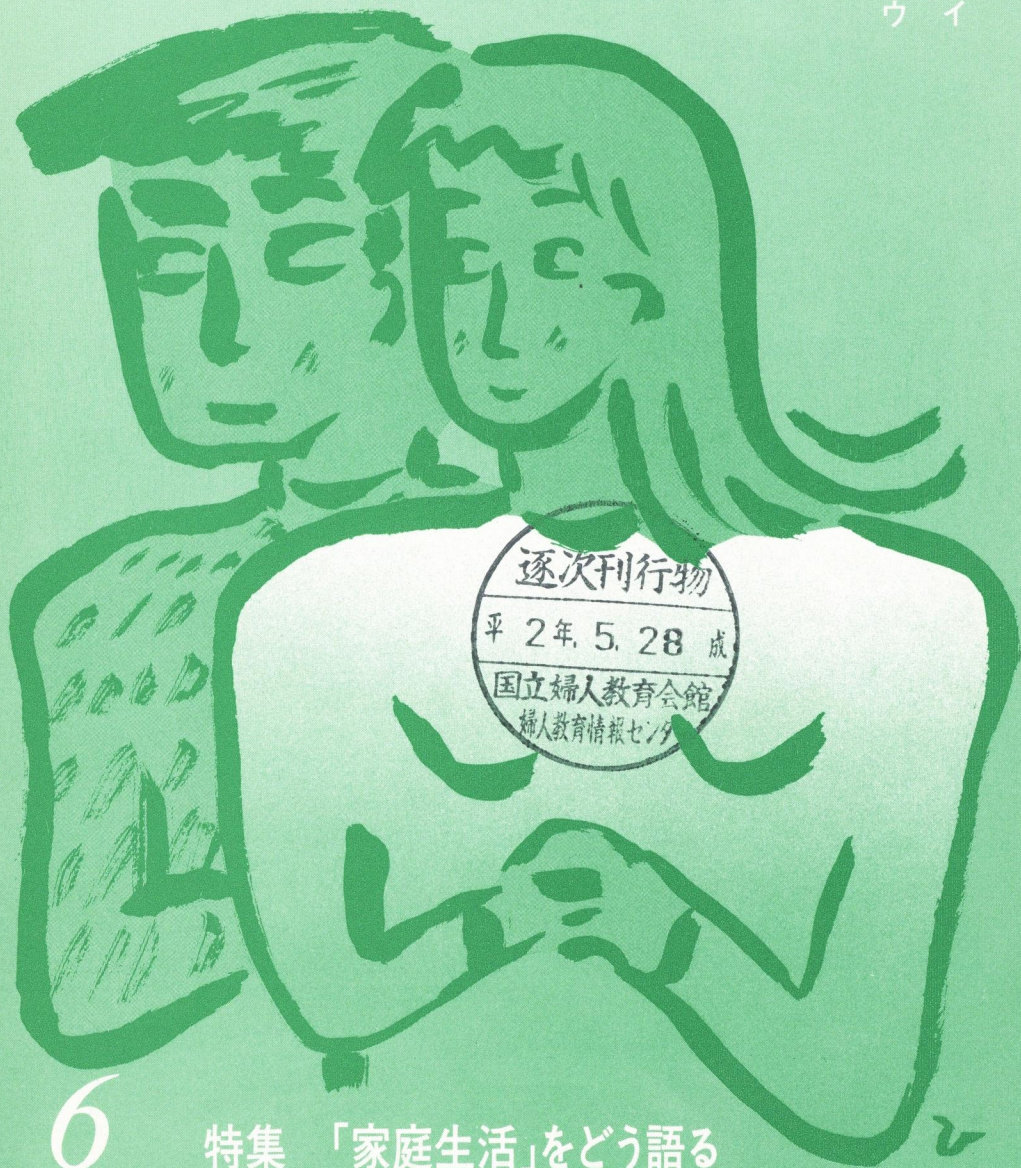


自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

We

ウイ

新しい家庭科



逐次刊行物

平成2年5月28日 成

国立婦人教育会館

婦人教育情報センター

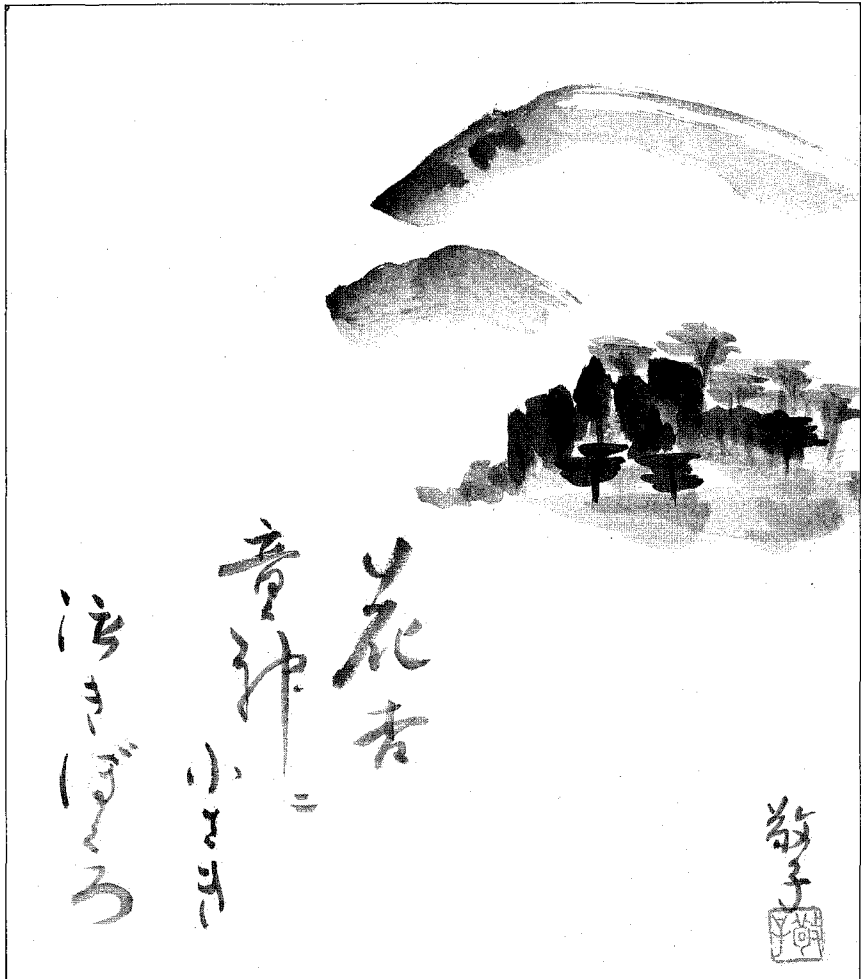
6

1990

特集 「家庭生活」をどう語る

季節のうた

仙田 敬子



花杏
童神に小さき
泣きぼくろ

「家庭生活」をどう語る

特集

- 穏やかに、静かに ・宮下喜代 2
- 子どもが背負う家庭、家族 ・芹沢俊介 6
- 現代食事模様—ある家庭の食卓史— ・石川尚子 10
- 転勤族の作る家庭 ・早川裕子 14
- 変わる夫婦の絆と男性役割
—スウェーデンからの報告— ・善積京子 18
- 広がる家族 ・南野忠晴 22
- 「女と男のいい関係」から「家庭」を語る ・KK 26
- ただ今、単身留学中—アメリカ、そして日本— ・山口里子 30
- 学習の主人公たち ■ どんな「家庭」が理想的？ 三重県立松阪高等学校 36
- 発言 ● 高校生に家族と家庭生活をどう語る ・三田フミ子 40
- 「SOSこどもの村」をたずねて ・青木喜代江 44

新しい家庭科を創るために

- (小学校)「ごはん」とみそ汁」作り 48
- 食生活を見直す・森 妙子
- (高等学校)「家族」を授業で扱って ・分校淑子 53

連載

- 荒野のバラ／あじさい色の風が吹く 田中裕一 58
- 家族と家庭科／民法改正後の中学校教科書 酒井はるみ 62
- 大学生たちと歩く／「障害」をとらえなおして 小沢牧子 64
- 男性学への契機—魔男の宅急便／わが快体 諸橋泰樹 66
- 私の朝鮮史／木綿のはなし 岡百合子 68
- 食べもの文化史／暮らしと食事 その1 石川尚子 69
- KNOW HOW 共学家庭科／指導の工夫 その2 湯沢静江 71
- 19歳の日記／「卒業」という名の 金森土岐 72
- 広がる運動、広がる人の輪／大今さんとの出会い(1) 中村英之 73
- 波／「家族・家庭」 半田たつ子 74

〇ひと 関千恵子さん 77

■We関西春のつどい報告 78

■情報 「高校学習指導要領解説・家庭編」とその問題点 56

- 私のすすめる一冊 35 ● イキイキぐるうぶ 70 ● 泉 76 ● Weになんでも言おう なんでも聞こう 80
- Weの読者会だより 82 ● Weの会通信 83 ● 十字路 84 ● アンテナ 86 ● 編集室からあなたに 29
- 編集後記 88

「家庭生活」を どう語る

穏やかに、 静かに

宮下 喜代



この方がやっぱりよかったな”そうねえ、海と空との対照が活きてきた感じがするわ”

こんな風に一枚の絵にちよつと筆を入れる度に、夫は私に見える所にその絵を持出してくる。もう何回もおなじようなやりとりをこ

の絵の前でくり返している。度重なると、こんなこと思うなんてワルイカミサンだな、と思いながら、心の中にくたびれる感じがあつて舌打ちがしたくなることもある。

私はチラッとヨコメでそっちを見る。夫が両手で50号の大きなキャンバスを持って出てくる。私たちの部屋の壁に立てかける。海辺の岩礁と遠景に燈台が描かれている画面の油絵具がまだ光っている。

”あーあ、またか!”と私はちよつと舌打ちしたい気持ちになる。それなのに私はその絵の前に夫と並んで立つ。

”空のいろ、変えたのね。この前は海の濃いブルーと余り違わなかったから少し重苦しい感じだったけど、ずいぶん明るくなって好いんじゃない”うん、そうなんだよ、この色にする前に思いきつて空にピンクを入れてみたんだ、ちよつと目立ちすぎて気になってね、少うし赤とイエローをまぜてみたんだ、

絵をみる、ことは私も彼も好きでデパートでの展覧会などには気軽につれだつて出かけたけれど、彼自身が絵を描き始めたのはいつ頃からのことだろう。丁度十年前、小さな自転車屋の商いの私たちの店で従業員として十五年もの年月をまじめに働いてくれたK君に経営をまかせた。私たちはそれまでとは逆に従業員になった。経営者でいた時は店の暇な時に処理する事務的な仕事があつたりして却って忙しい思いをしたが従業員になったので暇な時間は自由に使える。そのような時になつて私はあらためて、私たちが一緒に暮らしてきた

年月の間のことを思い返していた。

数えると四十七年、半世紀に近い。日本がアメリカと戦争を始めた翌年の42年に結婚した。彼は特殊な技術を持つ機械工なので召集は免除となっている、と聞いた、その特技のために、大阪や名古屋の方の軍需工場に出張ということが度々あった。姑がいて彼の留守の間、私は姑と二人で暮らした。

そのことを知って私の周りの人たちは「大変だろう」と気使ってくれたりしたけれど、私は家にいた時からの洋裁の内職の仕事に忙しく過ごしていた。姑が九十歳でこの世を去るまで二十五年の間、私は夫と姑と三人の家庭生活をつづけた。私の周りの人が気にするほど、粗野で世間知らずの私と静かにおちついた性格の姑とが、朝夕一緒に暮らして、よく言われるような嫁と姑の破綻がなく終ることができたのは、やはり姑のふところの大きさだった、と私は思う。生家から婚家へ、と私の日常が移った時、双方の家が東京の下町で歩いて十五分位でゆききができる程しか離れていないのに、家のなかのこと、隣近所とのこと、その他の何事にもそれぞれの家のやり方に違いがあるのだ、と私は気づいた。その違いをうまく処理できないこともある。そんな時姑は「あんたは他人様の物を預って仕事をしているんだから、気を使う仕事をしなさい、少し位間違っただけじゃないよ」と言ってくれた。姑と暮らして私は平安にすごせた。今も毎朝微笑ん

でいる写真の姑に、おはようと挨拶をする。姑は狭山茶の産地で生れ育った。狭山は絹織物の産地でもあった。織物の輸出を扱う横浜の商人が常に往来していたそう、そのことは横浜の開けた空気が狭山に運ばれてくることでもあった。姑もその文明開化の広がりを自然のうちにうけて育ったのではないだろうか。姑の明るくこだわらない性格は息子の彼にそのまま連なってきたように思える。

姑と夫と共に暮らした二十五年間は戦争、敗戦、戦後の変革という昭和史の激しい流動の時代と重なっている。

45年三月十日、未明の米空軍の東京大空襲。闇夜の炎の中に私たちの家のすべては焼かれた。ただ三人とも身体だけは無事に生きのびた。しかしその夜の火災は私の生家の父と妹と弟を焼き殺した。同じ区内の隣り町にそれぞれが住んでいて受けた運命は大きく違った。私は焦土のあとを父たちを求めて探し歩いたが一切は空しかった。たしかめることのできなかった肉親の死は今も不明のままである。庶民にとつての戦争の中の事実として私はそのことを忘れない。そして父たちの死から十六日後、彼岸あけの日に、病弱の身を荒川べりの生家に身を寄せていた母は、その家の納屋で自らの手で生命を絶った。

その時から五ヵ月後の八月十五日、戦争は日本の敗戦で終

わった。

その日、私は姑と山形県の山の中の小さな町にいた。何かどうなるのか、全く見当のつかない毎日がつづいた。家族三人、一緒にいたい。強くそのことだけをねがった。東京にもどれた。夫の勤務先の会社の寮の部屋、四帖半だったり、六帖だったり会社の都合のままに何度か移転した。立石の四軒長屋の端の家を九万円で買って引越した時は芯からホッとした気持ちだった。まわりに気兼ねなしに家の中で自分たちのことができる。夫は毎日会社へゆき、私はミシンかけの内職に精を出す、姑は少しばかりの衣類を乾したりたんだりしている。暮らし方は寮にいた時と同じなのにここへ来てからは私たちの間に少し活気が出てきたような感じがした。新聞も隅々までおちついてよくよむようになった。

戦争が終って六年目になっていた。六年もの年月が経つとあの敗戦前後の頃の何もかもが無くてキリキリしていたことなどの記憶がうすらいできている。町の人たちと道で列を組んで米よこせーのデモをしたこと、配給の割当で買ったタバコをもって米や野菜の買出しに行ったこと、くり返すようにそんなことをしていた。それがいつの間にか大抵の物は買えるようになっていた。働いて食べてゆける毎日、それが当たり前のことと私は思うようになっていた。

朝鮮で戦争が始まった。そのニュースは日本に複雑な状況

をもたらした。日本とアメリカの間で講和条約が結ばれ、日米安全保障も調印される。そのことで日本がアメリカの勢力圏内に入ったことは明らかになった。

メーデー事件ということがおこって、皇居前の広場でのメーデーは許されない、ということに私はある不思議さを感じた。日本は民主主義の国になったはずなのに、勤労者の意志表示が許されない聖域があるのだろうか？ そんなことを考えているうちに、警察予備隊が自衛隊、つまり軍隊になる、その変化のきざしが始まっていた。

54年三月、太平洋のビキニ環礁でのアメリカの水爆実験は日本の漁船第五福竜丸に死の灰をかぶせた。船長の久保山愛吉さんは死んだ。すでに日本は敗戦の月の六日に広島、九日に長崎の両市に原爆の惨禍をうけている。ビキニの衝撃は日本中を撃った。原水禁運動を組織したのは普通の市民であり、中心になって活動したのは主婦の人たちだった。

このような世の中の動きを新聞でよみラジオで聞く。私たちは食事をしながら話題になるそのことに自分なりの気持ちを話しあったり、時には怒ったり悲しんだりした。それはいつか私たちの習慣になってしまっていて未だに同じような形で続いている。その頃から夫は時々会社のことを話した。そしてある日、彼は「会社をやめる」意志を私に告げた。一人立ちして商売をする、と言う。私たちが新しい場所と生活

を求めて動く、先に何かが見えていくわけではない、しかし「そうしたいのだ」と彼は言う。私は同意した。55年の年末に私たちは現在の場所に転居した。今までの家を二十五万円で売って転居先の家の代金の丁度半分を払う。あとは月賦払い。自転車屋を始めるための店の造作、工具の整備、商品の仕入れ、お金の要ることばかり、商いのために覚えなければならぬことも沢山ある。心も身体も忙しかった。

丁度その時期と重なって私は朝日新聞の「ひととき」を中心にして生れた草の実会の会員になっていた。グループの集りに出席する。始めて会う人たちはそれぞれの戦争体験を経て戦後の新しい時代の中で自分自身のうちに芽生えたものを培っている、と感じられるものをもっていた。始めたばかりの店では、やらなければならぬことがいくらでもある。その中の一日を私は、草の実の集りへ出かけてしまう。急いで帰って来て、家の中のこと、食事の仕度と、バタバタ動く。そんなふうな私に姑も夫も、殊更に叱言や文句を言わない。拘束を感じないだけに私は自制をこころがけた。

街角でもとりたてて目立つ華やかさはない店だったけれど、自転車そのものは実用に役立つことで着実に売れ、修理の仕事も絶えずあった。夫と私は店の仕事のときも、店を閉めて家事むきの仕事の時もいつもお互いの顔を見、口をきいていた。外から来て下さるお客とは自転車を中において、私た

ちは店先でいろいろと話をする。その話の中には世の中のさまざまな、はやりすたり、好みの変化、物やお金に対する親子や夫婦の間の考え方、対し方のちがひ、そのようなことを通してのひとりひとりの価値観の多様さなどに生（なま）の感じであふれてくるものがある。ガラス戸の外の世間が店の中にひろがり、それは私たちふたりだけの家庭生活の毎日のなかに小さな鼓動をよびおこす。一階が店、二階が私たちの住居、三階にK君一家が住んでいるこの同居二世帯はひどく風通しが好い。

この二世帯はその暮らし方を自分たちの好きずきに行っている。ただ店の仕事に関係して、このことはこうする、こういう時は誰が先立つ、というように自然にきまってきたお互いの間の共通の理解のようなものができていて、私たち一家とK君一家とは別々の日常を暮らしながら、時に同じ食卓をここんだり、休養に出かけると帰りのおみやげがあつたり、うまくだきた、と思うのよ、少し食べてみて……と夕食のおかずをわけあつたりしている。平和な交流を私は喜んでゐる。

夫と私の家庭は四十七年間、続けられてきた。そしてほぼ三分の二の年月は朝から晩まで仕事もその他のことも夫と私は顔をつき合せてやってきた。今、私は七十四歳、夫は七十五歳、残された年月を私たちは知らない。ただ許されるなら、穏やかに静かに、与えられる日々をお互いの心を通わせて生きたい、と思う。

(みやした きよ)

「家庭生活」を
どう語る

子どもが背負う家庭、家族

芹沢 俊介



身体、性、家族、人間は、自分の生んだ人から贈与プレゼントされたものだという考え方である。もうひとつ付け加えれば、このような贈与は否も応もない強引なのなのである。

したがって子どもが子どもであることを離

私たちはこれまで、いつかどこかで、自分の生、身体、性、家族（親を含む）、人間的存在について激しい拒絶の感情を、親に対し抱いたり、浴びせたりしたことがあるはずである。生んでくれと頼んだわけじゃない。こんな顔に生みやがって。どうして男に生んでくれなかった。親の職業や家柄が恥ずかしい。人間に生まれてこなければよかった等々。まったく反対に、親からこうした拒絶の言葉を投げつけられた経験のある人も多いに違いない。

こうした拒絶感情が生じてくる根源にあるものを、私はイノセンスと名づけている。

子どもは自分の生、自分の身体、自分の性、自分の家族、自分の存在を選ぶことができない。言い換えれば自分の生、

脱するためには、強引に贈与されたこれらのプレゼントを、自分で選んだものとして受けとめなくてはならない。そうできないかぎり、これらのプレゼントは子どもにとつていつまでも負荷でありつづけるほかない。受けとめなおし、財産に変えること。これが成熟の過程に不可欠な手続きである。負荷から財産への転換にともなう作業はイノセンスを解体することであるが、このイノセンスの解体は、それを与えたものへの子どもによる返済によつて行なわれよう。

子どもによる返済行為は、暴力的なものである。けれど、生んだものは、この過程を子どもの成長に不可避なものとして肯定する。もし、子どもによるイノセンスの解体作業が拒絶されたり、障害を受けたりして不十分にしか遂行されない

なら、それはさきにみた拒絶の感情表出を超えて、病理的と思われるような暴力現象として表出されざるをえないだろう。

このような意味でイノセンスは、家族が子どもにも贈った本質的な負荷であり、その意味で子どもが背負わざるをえないもつとも根源的な家族と言える。

だが、例外がある。例外においては、イノセンスという観点は不要であるし、成立しない。こうした例外について考えることが現在、子どもが背負っている家族について考えることである。

理論的には三つの方向から、イノセンスという考え方は相対化される。思いつくままに順に述べてみると、まず第一は、子どもが自分の意志でもってこの世に誕生してきたとみなされる場合である。明らかに、生、身体、性、家族、存在は親からの贈与ではなく、したがってそれらに対する受けとめなおしとしてのイノセンスの解体作業も不要である。

芥川龍之介の寓喩的作品「河童」のなかのエピソードを例に引くのが分かりやすい。「河童」は一種のユートピア小説と言えるが、この作品で河童の国に迷い込んだ人間は興味深い場面に遭遇する。妊娠した河童の妻の生殖器に口をつけた夫が、胎児にむかい「この世に生まれてくるかどうか、よく考えた上で返事しろ」と尋ねる。これに対し胎児は「僕は生まれたくありません。第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけ

でも大へんです。その上僕は河童的存在を悪いと信じていますから」と答える。胎児は、こうした胎児の意志に添って消滅させられる。

胎児は、家族がもたらす負荷を拒んでいる。けれどここでもより重要なのは、生まれるか否かを胎児自身が決定するということの方である。もし、生まれる方を選んだなら、胎児は誕生と同時に、イノセンスすなわち家族がもたらす負荷も必然的に引き受けるという意志を表明したことを意味する。この世にあることを、自分の責任において引き受けるということである。それゆえイノセンスはここでは、あらかじめ解体されている。

第二は、輪廻転生という観点を導入することである。鎌田東二は、シャリー・マクレーンの、人は生まれる前にすでに誰と関係を持つかを選択しているのだろうか、さらには生まれる時両親を選ぶのかという問題意識を踏まえながら、輪廻家族という考え方を提案している。ここで、生まれる前とは胎児段階よりもっとずっと以前の、輪廻転生という観点を認めることによつてはじめてリアリティをもつ段階である。転生は、誰と親子としての関係をもつかを選択してから行なわれる。だとするなら、イノセンスはこうした家族に生まれる子どもにとつてもあらかじめ解体していることになる。

私は第一と第二の中間に、現代の超高度化した生命操作技

世代的家族とエロスの家族の原理

	中心	死	世代	老い
世代的家族	親-子	内在的	連続的	包括的
エロスの家族	夫-妻	外在的	非連続的	敵対的
超エロスの家族	単独者	自己内在的	非連続的	自己和解的

術によって生まれる子どもを想定してみたい気がする。この問題についてはここでは省略する。

第三に、これがもっとも現実性が高い例であるが、子どもが子どもとして生まれることを自分で選択し、決定したのではない、生んだもの（親）が子どもに対し、「お前がその生、その身体、その性、その存在、この家族、この親を選択したのだ」という観念を強いる場合である。この例はいささか説明が必要である。

少し前から、「世代的家族」とか「エロスの家族」とか「超エロスの家族」という用語を勝手にこしらえて使っている。エロスの家族というのは、夫婦における男女の一体性（和合）をテーマにして成立する家族をさし、超エロスの家族というのは夫婦における各自の他者性ないし個別性を最優先のテーマとして成立する家族をさしている。

世代的家族は大家族、エロスの家族は核家族というように従来呼びならわされてきたものを、ある程度対応している。けれど、大家族も核家族も現代家族の状況を分析する概念としては有効性を失っていると思われる。そのため、このような用語を新しく作りあげるほかなかったのである。

さてエロスの家族においては、子どもはつねに視野の下にある。したがって、盲点となりやすい。この盲点としての子どもというアプローチは、夫婦のことにかまけてつい子どものことがおろそかになるということではない。もっと本質的に、夫婦が男女として現れ、それ以外の現れ方を本質としていないことを意味している。

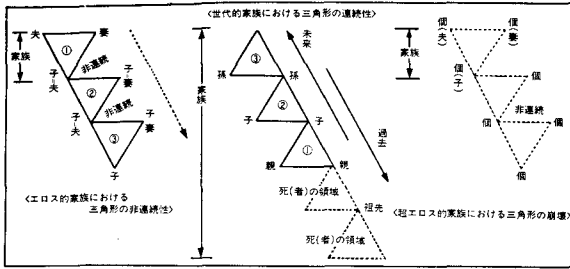
超エロスの家族になると、盲点としての子どもという観点自体が成立しなくなる。夫婦は男と女である以前に一個の個人であり、子どももまた同様、一個の個人（単独者）として遇される。養育ということを問題にしないのではない。それぞれ家族のなかでの相手（対象）への意識のちち方を問題にしているのである。誤解ないように断っておくが、以上の把握の仕方は、理念的なものである。

黒沢隆（建築家）は、超エロスの家族における家族のあり方を、「集個性」と呼んだ。すなわち、父―母―子という家族の三角形は崩壊したというわけである。

黒沢隆がこのような理解に到達したのは一九六〇年代末である。黒沢は、一夫婦Ⅱ一寝室、子どもⅡ子ども部屋という住居構造をもう時代の普遍的な住居像と言うことはできなにとしりぞけた。そして一夫婦Ⅱ一寝室の考え方を解体し、ふたりの個人Ⅱ二個室、子どもⅡ個室という地平をひらいたのである。こうして「集個性」が見出され、集個性を踏まえた

住居として、「個室群住居」が提案されることになるのである。

超エロスの家族という用語は、こうした黒沢隆の住居論展開に多くのことを負っている。



このことから分かることは、超エロスの家族においては、子どもは従来のように子どもではなく、家族のなかで一個の単独者として対等に扱われるという事態が生まれてきているのである。子どもは生まれながらにして独立した単独者として扱われるということは、家族が与えられた負荷を、家族が認めないということ、言い換えればイノセンスというあり方を本質的に認めないということを語っている。にもかかわらず私が三角形を点線で描いたのは、そこに養育過程を含めたからである。養育過程が終われば、三角形は完全に消滅し、家族という観念はただ、集個性という点にか成しなくなる。

米沢慧は、超エロスのな家族は、友だち家族であり、消費家族であ

る、と述べている。すべて外食にすれば台所のない住居も可能なのだという主張である。食生活という行為にエロスのな営みを認めている点で、重要な指摘である。

けれども超エロスの家族はたんなる消費家族ではない。黒沢隆の集個性、すなわち単独者が寄り合うことという理念は、そのすぐ外側においてコミュニティやネットワークという概念と接しているからである。父―母―子という関係構造は消失し、その後には共生する単独者というイメージがせり上がってきている。このイメージは、いまもつとも子どもを強迫しているもののひとつである。なぜなら、生んで置きながら親は、イノセンスの贈与の事実を認めないからである。この家族の状況は、捨て子と紙一重でありながら、捨て子という意識を解体しているゆえに、子どもたちが今後背負うべき家族像のひとつのあり方を示唆していると思えてならない。

① 芹沢俊介『現代〈子ども〉暴力論』（大和書房）

② 鎌田東二『輪廻家族の誕生』『老いと死のフォークロア』新曜社

③ 黒沢隆「個室群住居とは何か」（『都市住宅』一九六八・五他）

④ 吉本ばなな「キッチン」をはじめとする作品群は超エロスの家族という考え方を導入するとかかなりの程度理解可能になると思う。

⑤ 米沢慧『事件としての住居』（大和書房）

（せりざわ しゅんすけ・文芸評論家）

「家庭生活」を
どう語る

現代食事模様

ある家庭の食卓史

石川
尚子



してよそのことではない。ただそれを認識していないことが多いだけなのだ。郷土食や行事食など伝統食をとりあげる場合も、それが生徒の暮らしそのものに結びついてはいない事実を知りながらあえてということが多い。

中学校の新しい学習指導要領では、「家庭生活」と「食物」が男女とも必修になって、必修の領域が広がった。それはそれで大変うれしいのだけれど、さて、どんなかみをどのようにに教えたらいいいのか、特に「家庭生活」については、今までなかった領域だけに対応のしかたに苦慮している。

確かに昨今の家庭生活が、急激な社会の変化に翻弄されて様々な問題をひきおこしている事実是否めない。家庭が確固とした存在でなくなりつつあるという指摘もあながちまちがいでないであろう。生徒たちの家庭環境も何か問題があるたびにその姿のよろさが浮びあがり、私たち教師の想像をはるかに超えて悲惨である。食物に関して言えば、現代の食生活の問題点はほとんどすべて生徒たちの問題点であって、け

それでも「食物」や「保育」などの領域は、それなりのバックボーンとイメージがあるが、「家庭生活」は、何か漠然としていて、受け取り方によつてはいかようにも解釈できるし、プライバシーを理由に今一歩踏み込めない所もある。「家庭生活」の履修は、現代の家庭の問題を解決する救世主になりうるのだろうか。とはいえ、さいは投げられてしまったのだから、本当の意味で生徒たちに生きる力をつけることができるよう、知恵を出しあい、経験をつみかさねながら、中身と方法を考え出してゆかねばならないだろう。

さて、今回私に与えられたテーマは「現代食事模様」という大きなものだが、しかし内容は、私自身の家庭生活での食事の取り方や食事に関する考え方、食文化の位置づけなどを

まとめることだそうである。具体的には、ずっと共働きを続けてきた中で、子どもたちと食事に關してどんな取りきめをし、心くばりをしたかなどを、自由に書いていいというので氣樂にお引き受けしてしまった。主旨にそっているかどうかはわからないが、ひとつの体験談としてお読みいただきたいと思う。

本年三月、元氣そのものと自他ともに認めていた私が、おもしろいだけでなく入院することになった。高校生の頃手術した後遺症で歯が痛み出し、CTスキャンで原因がようやく判ったからである。そのことを告げると家族の者たちは、「またしばらく悲惨な食生活がはじまるのかー」、「僕たちのレパトリーはカレーライスだけだし、お父さんのは、おでん、やきとり、野菜炒め、それにわけのわからない独身鍋だけなんだから」。「そんなことはない。お父さんは何でもできるけどお母さんの領分に踏みこまないだけなんだ」などと私の病氣はそっちのけで、自分たちの食事の心配だけしている。そうかそうかと聞いていたけれど、さすがに当日近くなると私の方でも心配になって、「家政婦さんに来てもらいましょうか」と提案したところ、夫からも子どもたちからも一斉に反対されてしまった。「ちゃんと自分たちでできますよ」。しばらく家をあけなければならぬ負い目を感じていただけに、その

ことばは何よりも心強かった。

以前Weに書いたことがあるが、共働きを続けるためには、とにかく親も子も丈夫でなければならぬ。誰かが病氣になつたらとても続けられないというような、綱わたりの日々を過ごしているからである。だから、食事はまず第一に健康のためと考えてつくり続けてきた。病氣に負けない丈夫なからだをつくることである。また、共働きの家庭では、子どもたちとのコミュニケーションをはかる時間が極端に少ない。食卓の賑やかさとおやすみタイムのお話(少年になってからは、お茶の時間)は、いくらかその補いをしてくれるように思われて、できるだけ努力をしようとやりくりにつとめた。すなわち、食事に關して氣をつけた第二は、変化をつけることだった。

食卓の賑やかさとは、ただ追いつてられるような慌しい食事ばかりの日々ではなく、季節の行事やお誕生日、祖父母を招いての会食など、できるだけハレ食を取り入れる工夫をした。おむすびだけの簡単なお弁当をもって、おばあちゃんと一緒に、すぐ近くへお花見に行ったり、庭にござをしいて、ほりたてのたけのこ料理に舌づつみをうったり、友人が泊まりがけで来てくれた時の夕食は、子どもたちが川原で釣ってきた魚のてんぷらをたっぷりそえた「うどん」だったこともある。暮の三十日には、何家族もあつまって庭でもちつきす

るのも恒例となった。このように季節の風景と食べものを大事にしてきたが、春には春、秋には秋の自然の食物を賞味できるのは現在では大変ぜいたくなことになってしまった。しかし、まだまだ、子どもたちにそんな喜びを味わわせる道は残っているはずである。青い鳥はすぐ近くにいるのだから。

また、私は子どもたちにはずいぶん小さい頃から、夕食を任せる習慣をつけた。一週間に一度研究会で家を留守にしなればならなかったからである。長男、次男、三男と代々引き継がれて、今は、その日都合のつく人が用意することになっている。買物をはじめとしてすべてひとりでやる。残念ながらあと片づけだけは未だに上手にならないが、味つけなど、けっこう工夫しながら楽しんでいるようだ。小学校時代、長男は元気だけれど成績不振で、この子なりの生き方があるとやや開きなおっていた。五年生の担任の先生が家庭訪問にみえた時、この食事づくりのお話をしたところ、大変感心されてそれをクラスメートの前でほめて下さった。家庭科にとってもいい評価をいただいた。その後成績全体が向上した。子どももうれしかったのだろう。小学校卒業の時、仲よしの友達と先生のためにビスケットを焼き、デコレーションケーキをつくって、それをおみやげに遊びにかけた。上出来とはいいいかねるできばえではあったが、先生からとても喜ばれたという。このように、食事に関して思うことの第三は、家族のひ

とりひとり自分の食事をつくることができ、あわせて、家族のために食卓を用意できること、すなわち、食事の自立である。

以上、我が家の食生活の一端を披露したが、これらは、次のような目的があって行ったことである。

①日々の食生活のバランスに留意し、知らず知らずのうちに、何をどの位食べたらいいか理解できるようにする。どんな手伝わせることで、配膳や盛りつけなどもあわせて身につけるようにする。

②盛りつけや食卓の雰囲気配慮すること、行事食、季節の食べもの、人との共食によって、食事は楽しいものと思わせること。

③自分ひとりの力で家族の食事が用意できるという自信をもたせること。その際、買物、調理、食器の用意、盛りつけ、後片づけすべてひとりでやりとげさせること。その行為については心から感謝する。絶対できばえや結果についてけちをつけない。

家庭教育と学校教育とは、その目的も方法も異なるであろうけれど、家庭科は両者が連動しあい、補いあってはじめて効果をあげることができる教科である。食物に関しては「ど

のように食べるか」を体得させることでまったく同じといえる。故に「家庭生活」領域に包含される内容も、日々の暮らしのなかから拾い出し、再び日常生活にかえさなければならぬと思う。家庭での教育は、子どもひとりひとりの個性や要求にある程度叶ったやり方ができる反面、TPOに対処できる応用力をもちあわせているとは必ずしもいえず、ことによっては、まったく教育力のない場合すらある。教師はこの実態をよく把握して、できるだけたくさんの方の家庭生活に精通して教材のくみだてをしなければならぬと思う。

教師が自分の暮らしのなかからつかんだものを生徒に伝えていくのはもちろん大切なことである。家庭科の教員免許状を取得するために勉強しているある学生は、次のように書いている。「私は中学生の頃、家庭科が大嫌いだった。なぜなら教科の先生が嫌いだったからだ。よくある話である。その私が家庭科の教師になりたいと思ったのは、高校時代の家庭科の先生の影響である。その先生というのは、定年も間近の先生だったのだが、いつも自分の経験を交えながら授業をしてくれた。『昔はこうだった』『私はこうしているの』と話すのだ。その後には必ず『ほかにはどんな方法があるかしら』と私たちに考えさせるのである。もちろん友だちと相談してもよく、意見がたくさん出たりして楽しかった。その先生は少なくとも私には家庭生活において工夫し考える力をつけて

くれ、また、私の家庭科に対する興味をひき出してくれたと今でも感謝している」

この学生の先生は、御自分の経験を話されたあと、生徒に考えさせることによって、授業にふくらみと幅をもたせたわけだが、ともすれば教師自身の狭い経験や自分の家庭生活に基本をおいて、そこから今一步広がれないでいる場合が多い。このことは、私も常に反省しているところである。

家庭生活のなかの食物をとりあげる時、こうした幅と広がりをもたせてくれるのが食文化だと思う。従来ともすれば、「どのように食べるのか」の内容は、栄養であり、食品である事が多かったが、それぞれの地域や人によって栄養素や食品も一律には作用しない。どのように食卓を構成するのか、どんなマナーや歴史や習慣があるのか、親や教師は自信をもって子どもたちに伝え、子どもたちはそれをもとに自分の暮らしを切り開いてゆけたとしたら、現在の食の問題のいく分かは解消されるのではないだろうか。もっとも、社会的背景にも当然目を向けなければならないけれど。

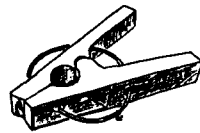
以上、ささやかな我が家の食卓史を交えて思う所を述べたが、青年の域に達した息子たちの食生活は、「美味しんぼ」や「クッキングパパ」を再現する反面、レトルト食品等も豊富にとり入れ、まさに現代食事模様というべき内容である。

(いしかわ なおこ・東京都立立川短期大学)

「家庭生活」を
どう語る

転勤族の作る家庭

早川
裕子



引越し人生の哀歓

わが家は転勤族である。夫は銀行員で、結婚後二十五年の間に、岐阜——名古屋——東京（二カ所）——ロンドン——東京（二カ所）——（香港）——（名古屋）——（シンガポール）と移り住んできた。カッコに入れたのは、単身赴任や夫婦赴任（こんな言葉はなかったカナ？）で、家族の一部は東京に残ったケースである。なんと九回も引越している。

このうち自分たちの意志で引越したのは、二回しかない。結婚後も岐阜の高校に勤めていた私が、子どもができて仕事をやめ、夫の勤務地名古屋に移ったとき（それまでは夫が岐阜から名古屋に通っていた）と、ロンドンから帰って東京の

れ、という無理無体なものであった。

単身赴任といえども荷物をまとめて送り出し、着いたらとり出して新しい家におさめ、引き上げるときはまた荷造りして大掃除して……という作業がいちいちついてまわる。現在は、大学院生と大学生の二人の娘を日本の自宅に残して、夫と二人でシンガポール暮らしをしているのだが、最近帰国の内命が出て、あと二、三カ月で帰国の身となった。これで十回目の引越しとなって、つくづく引越し人生だなあと思う。またしばらくダンボールに囲まれて暮らさねばならないのかと、ウンザリ。こればかりは何回やっても好きになれないが、転勤に伴う煩しさは、こうした物理的な面ばかりではない。

郊外に家を建てたときだけである。それ以外はすべて、企業の命令で引越しをさせられてきたのである。一度などは、二カ月後にロンドン行きが決まっているのに、それまで住んでいた社宅を取りこわすから、別の社宅に移

家族そろって引越しができるのも、子どもが中学前半まで。夫が香港へ転勤したときは、長女が高校入試直前の秋であった。彼女を寮のある高校に入れて、中一の次女だけ連れて香港に行くことも考えたが、私も東京で軌道に乗り始めていた仕事があったし、次女もこれ以上転校はゴメンだと泣いて拒んだ。彼女は、三回小学校を変わっているのだが、その度に、クラスの前に一人立って先生に紹介されるのがイヤで、その朝は食事がのどに通らないという経歴の持主なのだ。やむなく夫は単身赴任。

三年後の長女が大学入試直前の秋、帰国の決まった夫の勤務地が、わが家を通り越して名古屋と知ったときもショックだった。仕事が、学校が、友達が……とグズグズ言う私たち三人に、「わかった。オレ一人で行けばいいんだろう」と、夫の半ばフテクサレ単身赴任。

そして三年半後の任地がシンガポールと決まったときは、夫のガマン度も限界にきていた。幸い子どもたちは二人とも大学生になっていたので、今度は彼らを置いて夫とともに任地へ。私の仕事の方も一段落という感じで、むしろ転機を求めている時期でもあったし、東南アジアの一角をじっくり見てみたいという欲求もあった。海外支店の支店長夫人の生活というものがどんなものか、単身赴任の所へちよくちよく行くなんていうハンパなものではなく、どっぷりつかって知っ

てやろうという好奇心もあった。

そして二年近く経ち、帰国の内命が出て、やりかけていたこと、上達をめざして励んでいたこと、これからのこちらでの抱負などがすべてブツンとチョン切られるという、もう何度も味わった転勤族の悲哀をかみしめながらも、本当に来てよかったと思っている。

引越し人生も悪くない。これまで述べてきたようなマイナス面をすべて差し引いても、なお残るプラス面がある。地球のあちこちに住み変えてみてはじめて知ることの多さ、新鮮な驚きによって、自分の心が広がるうれしさ、そして結局人間はみな同じとわかる安心感。転勤の多い夫を持って、得た収穫はこれであった。

が、一方で、そのときどきで家族の形態を変えて来ざるを得なかったことから、家族のありかたについて考えさせられた人生行脚でもあった。

家族の絆——わが家の場合

「望ましい家庭の第一条件は、家族全員が一つ屋根の下で暮らすこと」というのを、どこかで読んだことがある。となると単身赴任はそれだけで欠陥家庭。なるほど最近特に、単身赴任による問題点が取り上げられている。

夫がいない寂しさ、心細さで自殺した妻の例もあれば、夫

のいない家庭がうまくまとまりすぎて、久しぶりに帰って来た夫の居場所がなかったり、果ては夫のいない自由さを享受するあまり、夫の帰宅が負担になったり、離婚に発展するケースもあるようだ。

わが家の場合はどうかといえば、形の上でバラバラになっている以上、家族の絆とは何か、ということをも、否応なく考えさせられた。共働きの経験もあって、夫は一応身のまわりのことは苦もなくできるのだが、それだけではどうしようもない寂しさがあつたようだ。電話がかかってくるたびに、「別に何にもないけど……」と自分からは何も話そうとしないことがあつた。忙しい最中だったりすると私は、「そこからかけてきておいて何も話さないなんて」とイライラして、あわてて話題を探したりしたものだ。家族が分かれても、常に誰かと一緒だった私は、その時の夫の気持がわからなかったのかもしれない。今になって、もっとゆったりした気持でやさしく話してあげればよかったと思ったりしている。私が、夫と別れたり子どもと別れたりして暮らしてみても、再会したときに何によって最も心を満たされ、別れてからも気持が支えられるかといえ、それは彼らとの会話であることがわかった。

夫は外面ばかり愛想よく、家ではダンマリムツツリという典型的な日本男性の一人なのだが、単身赴任をしていて私と

たまに会ったときは、けっこうおしゃべりだった。私の方も、今しかこの人と話せないと思うから、次々に話題を提供して、社会問題もよく論じ合ったものだ。

子どもたちも、一緒に暮らしていた時は、ツンツンしたり、ろくにものも言わなかったりした時もあったのに、こういう状況になってたまに会うと、本当によくしゃべる。私への報告や相談事も含まれ、世界情勢もよく話し合うが、たいへいは他愛もないおしゃべりをのべつまくなしにして、冗談を言い合い、笑いこころげている。

わが家のように大人四人になつてしまうと、（経済面は別として）誰かが誰かを頼りきって生きていくということはない。私がたまに日本の家に帰ったときも、子どもたちはコレ幸いと私に家事を全部押しつけるなんてことはせず、それまで通りのペースで最少限の家事はやつてのけている。

そんな現在のわが家で家族を結びつけている絆は、お互いに心おきなく何でも話し合える存在であることだろうか。

ゆれうごく家庭像

外国で暮らしてみても、それぞれの国の家庭の状況や家庭観も、垣間見ることができた。

ロンドンにいたころ、子どもの友だちケイトリンの両親は別居中だった。近所の家には父親とその女友達が住み、少し

離れたフラットに、母親とその男友達が暮らしていて、彼女と兄は、その二つの家を行ったり来たりしていた。彼女は、父親のガールフレンドには名前前で呼んでなついていたが、母親のボーイフレンドの方はなぜか嫌っていて、わが家で遊んでいるケイトリンを彼が迎えにくると、「マンが来た」などと言って、ツンとすまして帰ったものである。

イギリスでは、ほとんどの家が老親と別居で、日曜日に会って一緒に昼食をとる家庭が多い。子どもも社会人になれば、当然のように家を出て独立していく。

ここシンガポールでも、最近離婚が増え続けていることや、高学歴女性がなかなか結婚しないことが、人口を増やしたい政府を悩ませ、若者を早く結婚させ、早く沢山子どもを産ませるために、さまざまな政策が打ち出されている。独身者は公団アパートに入れないため、三十歳になっても親と暮らしている。

また、シンガポール国民を形成する三つの民族（中国系・マレー系・インド系）の共通語として、英語を必修にしたせいもあって、西洋の文化や風習がどんどん入りこんできたことが、今度はアジアの伝統や儒教道徳をこわしてしまいはしないかと、政府は心配になってきたようだ。「家庭を社会の基本単位に」を国家目標の一つに挙げて、老人を中心とした家族の団らんの大切さを、ことあるごとに強調している。

世界中で家庭がゆれ動いているいま、私たちはこれからの家庭に、どんな展望が持てるのだろうか？ 私に明確な答は出せないけれど、自分自身は、戸籍は必ずしも必要とは思わないが、家庭はやっぱり欲しいと思う。異性や異世代の者たちといっしょに、一つ屋根の下でこの世を生きたいのだ。

都合八年半も子どもたちと別れて暮らさざるを得なかった夫は、子どもたちの思春期から青春期、薈が徐々にふくらんでくるようなときを、そばで見たいられなくて、ずい分損した気がするという。海外単身赴任が多いのも、一部を除いて、海外に日本の高校がないのが大きな原因の一つと、夫は最近日本の大企業に、海外に日本の高校を作るとは企業の問題とよびかけることに力を入れている。

他の先進国が、駐在員の多い国には大抵高校を持っているのに、日本はこういう面で本当に遅れている。男たちが、家庭よりも仕事を優先してきたこと、これが個人の問題でつまされ、その個人も、のどもと過ぎれば熱さを忘れて、順送りにしてきたことなどが、要因であろう。

自分の作った家庭が理想的とはとても断言できないが、親の世代のあやまち——愛情のもてない相手と見合結婚をしてしまふ——はくり返さなかった。自分なりに築いてきた家庭にも、盲点や欠点はあろう。それは、子どもたちの世代で直していつてくれるに違いない。

（はやかわ ひろこ）

「家庭生活」を
どう語る

変わる夫婦の絆と男性役割

— スウェーデンからの報告 —

善積 京子



ンでの成果を家庭科や女性学などの教材ビデオとして、ようやく完成させた。本稿ではその中でも取り扱っているテーマ「男女平等政策のもとでスウェーデンの夫婦関係や男性役割がどのように変化してきているか」を報告

スウェーデン社会は社会福祉や性教育が進んだ国として日本でもよく紹介されているが、同棲カップルと婚外子出生の増加（Ⅱ婚姻率の低下）にともない（注）、結婚や男女平等に関しても革新的な政策を打ち出している国である。

一九八八年夏、私が前に勤務していた大手前女子短大の講師の小泉直子さんとともに、スウェーデンを訪問し、短期滞在にもかかわらず、多くの所を見学・インタビューすることができた。男女平等はこれまで女性独自の問題とされ、男性の問題として捉える視点は日本ではあまりない。スウェーデン旅行で、「男性の変革」なくして「男女平等」「女性の解放」はないことを実感するとともに、あらためて家庭科における男女共修の重要性を確認する日々であった。スウェーデ

しよう。

1 変わる夫婦の絆

スウェーデンの家族社会学者ヤン・トロストは、夫婦の関係を考える際に発想の転換が必要であると述べている。これまでの家族研究では、結婚の永続性を前提として、離婚を病理と扱い、その原因解明に研究の焦点を向けることが多かった。結婚の永続性が崩れ、離婚も頻発に起こる状況になっている今日、へなげ、人々は離婚するのか、へ何が夫婦関係を保たせているのかを研究する方が有効であると指摘している。

そこで結婚生活を維持させている夫婦の絆を①法的絆 ②経済的絆 ③規範的絆 ④ソーシャル・ネットワークの絆

⑤性的絆 ⑥情緒的絆 ⑦親子の絆に分け、スウェーデンではどの絆が弱まり或いは強まってきているのかを見てみよう。

①法的絆——この絆の変化の第一は、一九七三年の婚姻法改正で破綻主義が導入され、離婚手続きが簡素化され、法律により夫婦の関係性・永続性が保証されなくなったこと。第二に婚姻関係にない男女の共同生活すなわち「同棲」（事実婚）と法律婚が限りなく近づき、法律婚の法的効果が薄れてきている点。同棲カップルの増加の事態に対し、法務大臣クリングは一九六九年に家族法改正の指針を発表し、「新しい立法は可能な限り、それぞれの男女の結合形態と道徳に対して中立でなければならぬ。未婚の母や事実婚の当事者に対して不当な苦痛や不便を与えるような規定があつてはならない」と述べ、この中立性の指針が今日のスウェーデンでの家族法の原点となる。第三に、父母の婚姻関係の有無が、子どもの法的・社会的地位にもはや影響を与えなくなった。非嫡出子にも嫡出子と同等の相続分が認められ、父の姓を継ぐことが可能になり、一九七六年には嫡出・非嫡出子の用語そのものが差別を生むとして法律上から排除された。以上のような変化で結婚の法的効果は薄れ、夫婦の法的絆は極めて弱くなる。

②経済的絆——スウェーデンでの女性の職場進出はめざましく、一九八七年の統計では七歳未満の子どものある女性の八五・〇％、七歳から十六歳の子どものある女性ではなんと九

二・三％が就労し、専業主婦は歴史的的存在になる。だが、地方自治体などで公共部門に働く女性が多く、その分野も家事・育児の延長線上の仕事に集中し、しかもパート労働が半数である（スウェーデンのパート労働は、すべての労働者は労災・失業保険の対象になり、一週十六時間以上のパート労働ならば社会保障の対象になる）ため、男女の収入格差はまだあり、総体的にみると、女性の経済力はまだまだ男性と互角のレベルに達してはいないが、児童手当、住宅手当、教育費の無料化など社会保障が充実し、個々の家庭の子どもへの経済負担は軽くなる。その結果、妻の夫への経済的依存度は小さくなり、夫婦の経済的絆は弱まり、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業にもとづく夫婦の相補性に揺らぎがみられる。

③規範的絆——規範的絆の強さは間接的にはその社会の宗教や文化的伝統に左右されるが、この絆はさらに（１）自己の結婚・離婚観と（２）結婚生活維持への社会的圧力という二つのレベルに分けることができる。前者は「離婚すべきでない」という規範を自己がどれだけ内面化しているかであり、後者は親族、友人、同僚、知人といった自己を取り巻く人々からの結婚維持への期待・要請に基づく。現在では不幸な結婚生活を送っているよりも離婚することの方が、ベターだと人々は考え、離婚や離別に対する世間の干渉・偏見もなくな

り、この絆も弱まる。

④ソーシャル・ネットワークの絆——この絆は、離婚により配偶者以外の人々との交流も切れるのではないかというヘンリー・ソーシャル・ネットワークの喪失の不安に基づくものである。個人主義の発達したスウェーデンでは、職場の仲間同志ですらお互いの家族状況をあまり知らないままで過ごし、企業自体も従業員の家族状況には無関心である。以前は結婚すると、妻の生活圏は夫の生活圏内に吸収され、夫婦の生活は一体化し、交際する人々は共通の友人とされていた。しかし今日では、結婚あるいは同棲しても、双方の生活圏が部分的に融合するに留まる。それぞれが独自の活動領域、ネットワークを持ち、特に女性は男性に比べて、近隣や親族との付き合いも密であり、離別に際しての「ネットワークの喪失の不安」は弱い。

⑤性的絆——一九六〇年代の「性革命」以来、結婚関係になくても愛し合っていれば性関係をもつのが自然なことと考えられ、気が合えば性関係をもち、一緒に住み出すのが、一般的な「配偶者選択パターン」になる。しかし性関係は独占的で排他性が強く、婚外の性関係には否定的である。婚外ないしは同棲外に性関係をもつことが、カップル解消の直接的原因になる場合が多い。このように性的絆は、同棲から結婚への移行の直接的動因にはならないが、結婚生活維持にとって不可欠な要素となっている。

⑥情緒的絆——スウェーデン社会はヨーロッパの中でも個人主義がきわだたて強く、人々は相互依存よりも自立を好む。気軽に声をかけて人と親密な関係が得られにくい社会状況下で、夫婦の精神的つながりの重要性が増している。人々は結婚になによりも精神的オアシスを求める。これは反面、感情的な潤いのなくなった家庭にもはや存在の意義がないことを意味している。精神的な連帯が両者をつなぎとめる究極の絆となると、夫婦の感情的もつれはそのまま共同生活の破綻につながる。スウェーデン社会では夫婦の情緒的絆＝精神的連帯なくして結婚あるいは同棲生活はありえず、夫婦の絆の中で、情緒的絆がもっとも大切なものになる。

⑦親子の絆——結婚生活あるいは家族を維持させるものとして、夫婦の絆のほかに親子の絆が考えられる。情緒的潤いとしての子どもの存在意義は大きいが、しかし子どものためにと無理に離婚を思いとどまることはない。感情的に対立し愛情の冷めた夫婦のもとで育つことは、子どもにとっても精神上よくないと考えられており、スウェーデンでは親子の絆が離婚の抑止力として殆ど作用していないといえる。

2 男性役割の変化

スウェーデンでも、以前は家庭における男性の夫としての役割は、家族のために働き、妻子を養うことであり、これは性のあり方の違いに基づいた自然な役割だと信じられてき

た。今日の男女平等政策はこうした性別役割分業を完全に否定する理念から出発している。おとなが経済的に自立することとは、婚姻の有無にかかわらず必要であり、妻も働くかわりに夫も家事するのが当然、公平とされる。税制をはじめ国の行政も夫婦共働きを前提として行われ、婚姻法でも、個人の経済的自立と夫婦の共同の家事・育児の義務が唱われ、「一家の主人の扶養の義務」という觀念も廃止される。

一方、父親の育児について、親としての義務であるとともに権利であるという発想の転換が起こり、政府は両親保険制度をもうけ、父親として子どもの養育に関われるように、積極的に保障し出している。

3 男性問題が社会的課題に

以上のように、これまで多くの社会では性道德と婚姻制度で女性を縛りつけることによって男性に優位を与えてきたが、スウェーデン社会ではこの優位性を取り除き、夫婦の絆で情緒的絆がもっとも重要なものになり、経済力と家事・育児能力が男女双方に問われるようになってきた。

ところが、調査によると、成人男性の家事にかける時間は一週間で平均七〜八時間で女性の約五分の一の時間を家事に使っているにすぎない（日本の男性の五十分に比べるとかなりやっているのであるが）。家庭科は男女共修で、男子生徒にも家事・育児能力を育てるように図られ、若い世代では変

化は見られる。しかし古い世代では、意識の上では「男の家事・育児の参加」に賛成していても、実際の行動力となるとまだまだである。

経済力をつけた女性たちにとって、家事・育児をしない夫、自分の身の回りのこともしない夫と暮らすことは、重荷。女性たちはこうした家事・育児役割を果たさない男性を捨てだした。家庭生活にあまり熱心でなかった男たちは、パートナ―に離別され、養育権を失い、住む家も妻と子に譲って出ていかねばならない。これまで仕事をこなし、環境にうまく適応していた男性でも離別でかなりの挫折を味わい、自殺やアルコール依存症に陥る場合も少なくない。現在、政府は「男の役割を考える会」委員会を設置し（注2）、また男のための救援センターを開設するなど男性問題に本腰を入れて取り組んでいる。

今日のスウェーデン社会の課題は、へ男女平等を促進させるために、男性をいかに変えるか¹にあると言える。

注1 同棲の増加の背景については、拙著「非婚の母と婚姻制度」『脱・結婚』共著、世界思想社一九八五年を参照された。
注2 この委員会の『変わる男の役割』の英語版の概要報告書を、

善積が「スウェーデンの男たち―変わる男の役割」『女性学年報』第一〇号（一九八九年）に抄訳している。

「家庭生活」を
どう語る

拡がる家族

南野 忠晴



けれど。

僕たちは「自分たち
でできることは、でき
るだけ自分たちでし
た」と思っていて、散
髪なんかはそのわか
りやすい例になるんじ
やないかな。

思い返してみると、
あまりにも模範的な夫
と妻であつた僕たち

つれあいが子どもの髪を切るようになって、確か一年ぐら
いたったころ、「僕のも切ってくれ」となった。学生時代、
長い髪で、母親に切ってもらっていたから、さほど抵抗はな
い。ただし、敵の腕前を子どもの頭でたしかめてから、とい
う冷静さは失っていない。

つれあいの髪を僕が切るようになるには、それから二年ぐ
らいかかった。「切ったるゾ」という僕の言葉を尻目に、彼
女はなかなかウンと言わない。なんせ、僕には散髪の経験が
なかったからだ。最近はお互いにそれほど後悔をせずに髪
を切りあえるようになった。ただし、髪がのびてくると、言
いたいことも我慢しなくちゃなくなるといふことはある

が、生協にはいたり、石けんを使いだしたり、玄米を食べ
るようになったり、僕が掃除や洗濯をするようになったり、
家庭科の教員免許を取るための勉強をはじめたり、「住まい
塾」という住宅運動につながってゆけたり、Weを定期購読す
るようになったことのきっかけは、子どもの誕生にあつたと
思う。「命ってなあんだ」という質問への一番わかりやすい
答が「赤ん坊」だったんだね、きつと。

ラマーズ法って言うのかな、一般に言うところの産院では
同伴分娩って言うていたし、ラマーズ法っていうのはお産の
時の呼吸法のことだと思ってるんだけど、違ふのかな。
とにかく、つれあいが「よかったら産む時に一緒にいてほし

い」って言うから、「時間が合えばかまわないよ」ということで、一人目のときは特別の意識もなく出産に立ち会うことになった。

僕は理屈っぽいから、よくガンコだと思われるけど、思想的なバックボーンなんてないし、直感的なものごとをとらえる力に欠けているから、説明されてはじめてわかるというところがある。だから、納得さえできたら、朝の自分と夕方の自分の言っていることが全然違うなんてこともおこる。自分ではあたり前のことなんだけど、回りにいる人は面喰ってしまふらしい。

この時もそうだった。僕は出産に立ち会うようなタイプ、やなかったからだ。今なら、出産に立ち会うなんて当然のことだと思えるのだけど、この時も、説明され、立ち会ってみて、それがあたり前のことなんだとはじめてわかったというわけだ。

赤ん坊は逆児で、危険もあったのか、分娩室ではなく手術室での出産となった。取り上げるのも、助産婦ではなく医師だった。それで通常分娩をさせてくれた産院側には本当に感謝している。でも、それが危険なことであり、医師の立場としては勇気のいる決断だということはあるようになって知ったことだ。とにかく娘は足から生まれてきた。

「ゼンソクイ」

何のことかわからなかったけど、わかっていたら冷や汗ものだっただろう。無知っていうのは幸せだ、ホントに。

こういう丸裸の命、つまり、いつ死んじやってもおかしくない存在を家族の中に迎え入れて、僕たちは考えた。さて、何を食べさせ、何を着させ、どう育てたらいいんだろう。娘はベビーフードも食べちゃったし、化学繊維も着ちゃったし、合成洗剤でおむつかぶれにもなっちゃった。すこしずつ、すこしずつだった。いろんなことに気がついて生活が変わってきたのは。僕は基本的に子どもと大人を区別できないから、子どもに悪いものは大人にも悪いと素直に思ってしまった、それで自分の暮らしも変わってきたんだと思う。

いわゆる「家族」というのは共同生活者のことだと思っただけど、共同生活には共同生活のルールがあって、各自の能力に応じて仕事を分担しなくちゃいけないだろうし、できる範囲で自分のことは自分でしなくちゃならない。してはいけないこともあるだろうと思う。これを夫婦という単位だけで考えると「何もかも同じように分担するのが理想」ということになりやすいかもしれない。けれど、子どもや老人、病人などが家族の中にいて、その誰もが家族の生活を作り上げているのだと考えれば、数字で「何分の一」と割り切る暮らしは僕にはなじめない。

赤ン坊も、ただ親の労働を増やすだけの存在とみなしがちだけど、その発想は赤ン坊に対して大変失礼なものだと思ふ。共同生活者としての赤ン坊が僕に与えてくれたものは限りなく大きい。それを、目に見える洗濯、掃除、料理、かたづけなどの分担具合だけで、平等であるかどうかと決めつけたくない。ましてや、収入なんていうお金の分担度でそれをはかるなんてまづびらだ。赤ン坊や寝たきりの人たちも、前向きのイミで家族を作り上げている存在なのだ。どの人間、どの生き物をも肯定的にとらえて、はじめて平等とは何かを語り始めることができると思う。

これは、いわゆる「やさしさ」や「思いやり」ではない。自分という人間を基準に物事を判断するという自己中心的発想からの脱皮が必要だと言っているだけだ。自分が大事だと思ふことは他人も大事だと思ふはずだし、自分が大事じゃないと思ふことは他人も大事じゃないと思ふはずだ、という思い込みを捨て去ろうということだ。人間は様々だ。考え方も能力も置かれている状況も人によってみんな違う。それを、「みんな同じ人間だ」と言ってしまったら、一番大切なことが見えなくなってしまう。「男も女も同じだ」ではなくて、「あなたと私は確かに違う」と考えることが大切なんじゃないのか。

僕とつれあいの出発点は、この「あなたと私は確かに違う」

ではなかった。僕たちは「価値観を共有すべき運命共同体」であり、「共通の人生観を持つべきパートナー」だった。僕たちには幸せな家庭を築くという目標があり、日々の暮らしはそのための手段となることさえあった。僕たちは夫を演じ、妻を演じることで、幸せな家庭を創り上げようとしていたのだ。自分らしくあることを否定し、夫らしくあること、妻らしくあることをお互いに要求していたんだと思う。こういうのを「ママゴトのような生活」って言うんだろうナア。だって、ママゴトっていうのは家族を演じる遊びのことだもの。

赤ン坊は「赤ン坊」を演じたりしない。そのまんま、ただ在るだけだ。「それでいい。それでいい」と僕は思うのだ。なのに、つれあいに対しては「今のままじゃだめだ」「そんなことじゃだめだ」と考えていたし、言っていた。もちろん、自分にも満足なんてしていなかった。そして、やがて赤ン坊が大きくなって子供になると、やつぱり「そのままじゃだめだ」と考えるようになっていったんだ。

今でも「何でもいい、そのままでもいい」と考えているわけじゃない。でも、相手の状況がどれだけ見えているのだろうかと自問できるようにはなった。以前は、自分のことも相手のことも全然見えていなかったくせに、わかったような気になっていたんだナアと思う。

よく言われるように、「木は自分の背の高さと同じだけ深

く地中に根を下ろし、枝を広げるには、根も同じだけ広げなければならぬ」のだとすれば、僕たちはその複雑きわまりない根に深く思いを致すことなくしては、相手を理解することとはできない。僕はつれあいに、余分な根を切ることを強要し、枝ぶりが良くなるように鋏を入れさせ、いびつにゆがんた僕好みの盆栽になれと言ってきたのだと思う。それが僕にとっては「進歩」であり、「成長」だったのだ。彼女は言われたとおりに鋏を入れようとして、幾度血の涙を流していたことだろう。今になって、やっとそれがわかるようになってきた。

「人間はコミュニケーションの生き物である」という言葉を聞いたことがある。人間の中には、ひとつながり合っていないという強烈な思いがあるというのだ。「そんなことはない」という人もいるかもしれないけれど、僕はこの言葉が好きだ。

僕は自分自身の根と枝をどんどん伸ばし、地中で、地上で、色んな人と根や枝を複雑にからませてゆきたいと思う。根や枝をしつかりと張ることで自立度が高まり、根や枝をからませ合うことで一人では生きてゆけない自分自身を確認するのだ。相手の自由とこちらの自由のぶつかり合うところで、結局は自分たちが複雑にからみあった大きな「命」の一部だと実感したいのだ。その時、「ガイア（地球生命体）」という言葉

葉の持つ力は僕の中でとても大きい。

僕の今のテーマは「拡がる家族」だ。家族という箱庭の中でいびつにからまりあった根や枝を、外に向けてどれだけ拡げてゆけるかだ。ひとり、ふたりと関係が拡がって、そこに新しい家族観を持ち込めれば、その分だけ、つれあいや子どもを見る目も真っすぐになってゆくだろう。そうすれば、家族はさらに拡がるだろう。そうは言っても、この「拡がる家族」はそれほど大きくはならない。本当にからみあえる数なんて限度があるに決まっているからだ。

僕はまた、そろそろ髪を切らなくちゃならない。プロではないつれあいに散髪をまかせ、運命をゆだねるのは、実は大変勇気のいることだ。散髪が終わったあとで、素直にニコツと笑ってありがとうと言うのは本当にむづかしい。でも、その緊張感が大切なんだと思う。僕は五年くらい先には、つれあいじゃない「誰か」に髪を切ってもらうのもイイナアと思う。僕も誰かの髪を切ってあげたいナアと思う。そんなふうにして、僕の家族が拡がっていて欲しいと考えている。

(みなみの ただはる・大阪府立高等学校教諭)

「家庭生活」を
どう語る

「女と男のいい関係」から 「家庭」を語る

県立高等学校 K・K



人も多い。果たしてそのなか、そうであったとしても、それだけの問題なのか、どう解釈すればよいのか、会議の度に考え込んでしまうのだ。ただ家庭環境が子どもと密接な関係があることだけは確かである。

自由な世の中だから、

生き方も自由、家庭も色々な形があつてよいと思う。しかし大人にとつての「自由」の結果、屈折し、傷ついて暮らし、育つ子どもがいる。

1 少女たちの家庭
学校の生徒指導の会議で、いつも考え込んでしまうことがある。生徒が何か問題を起こし、その指導を検討する時には必ずその生徒の家庭環境が報告される。万引きや喫煙などいわゆる「非行」を起こす子は、近年は「フツウの家庭」の子が多いと言われ、事実そういう傾向もあった。

ところが、ここ何年か生徒指導の会議にのぼる生徒は、いわゆる「フツウの家庭」でない子が多くを占めるようになって。両親の不和、別居、離婚、母子・父子家庭、等々。

家庭に問題があるから子どもが悪くなる——と単純に言う

A子。幼い時父親が交通事故で死亡。A子が小学生の頃、母親が蒸発。現在高校二年の彼女の保護者は、七十歳を越す年金生活者の祖父である。祖父と二人暮らしだが、祖父にはA子の面倒は見きれず、近所に住む伯父の家でみてもらっている。けれども細かな生活習慣やしつけがどうしても行き届かず、遊びグセがついて、学校をサボったりルーズなところが多い。

E子。両親が離婚調停中。中学の時両親の離婚騒動で家出

をしたこともある。二歳上の姉と母の三人暮らしだが、姉も夜遊び回る。E子は自分は姉のようになりたくない、と友人に語っていたが、高校入学後、無断外泊や授業を怠けることなどが頻繁になった。母親に対する不信任が強い。

I子。両親はすでに離婚していて母子家庭。母親と二人で離婚時に父親から譲り受けたマンションに住んでいる。学校で授業を怠けたり、おかしい服装をするなど問題が多いので、担任がよく電話をする。ところが母親はいつも家にも勤務先にもいない。I子は母親から放任されていて、近くに住む祖父母が食事の面倒をみている。

H子。母親は長期の入院生活で不在。父親は別な女性とアパート住まいだが、時々家に来てH子に口うるさく言う。H子は学校にも行きたくなくて休みがち。父親と口論になると、真夜中に家出をしてしまう。

F子。弟と母親の三人暮らし。冬休みが明けて間もなく、十日位休みが続く。連絡をとるとF子は学校をやめるつもりと言う。F子は、一年近く、土・日だけ喫茶店で働いていたが、冬休み頃から毎日終日働くようになっていた。

F子の働く喫茶店に行くと、街道沿いの小ぎれいな店でF子は長い髪を束ね、白いブラウス、茶のミニスカート、黒のストッキング姿で働いていた。時給六百円だという。制服姿の学校でみる彼女とは、別世界の人間のように、おしぼりを

サツとさし出す手つきも板についていた。

学校はどうするのか、と聞いた私に「明日行きます。でも学校はやめます」ときっぱり言う。

翌日、F子は母親と登校したが、自分の「決定」した通りに、泣き出す母親の隣りで「退学願」を書き、母親はそれに印を押した。

2「家庭生活」で何を語ればよいのか

このような少女たちの家庭は、もはや例外ではない。分別臭い大人が、そういう家庭を「崩壊」と呼ぼうと、問題は一向に解決しない。家庭科の教科書にある「家庭生活と家族関係」という切り口で、この単元に臨むのは、もうかなりシンDOI時代になったのだ、とつくづく思う。

それからもうひとつ、女子高生の保守化傾向がある。

「五年たったら、一番目に大好きな彼のことを思いながら二番目に好きな人のために、ごはんを作っていると思う」

「優しくて素敵な女性になって、『あなた、お帰りなさい』といえるかわいい奥さんで、明るい家庭を築く……」

卒業文集には、かわいい女性になって、男性から求愛され結婚し、幸せな家庭の妻になるという思いが異口同音に書かれている。女子高生のかわいいお嫁さん志向は、自分が「生まれた家庭」では果たせなかったものを、「生む家庭」で果

たしたい、という切なる願望でもあると思う。

もつとも、女性の自立と逆行する現象が、女子高生の周囲にあふれている。「均等法」が成立した今日も、相変わらず女の賃金は平均して男の半分。結婚したら男が経済の主軸で、女がそれを補うというパターンは、性別分業にしっかりとつながる。税制の配偶者控除などが、一層この現象をおおる。やっぱり何のかの言っても、女は専業主婦が幸せなのだ、と。

そして女性週刊誌などが、オシャレとボーイフレンドと車にしか関心を持たない女の子を作るのに一役買う。政治や社会のしくみに関心を持ち、敏感に反応する女の子は恐ろしく少ない。

「世の中がこういう時代なのだから、フツの女子高生に女の自立を説いてもムダだ。自立や自由はワガママや気ままに解釈されてしまう。そしてすぐに離婚し、家庭崩壊がますます進む。それよりも保守化でもよいから、家を守ってしっかり子育てできる子を教育した方がよほどよい」と言う人もいる。もちろんこんな言葉に従うわけにはいかない。

ただ少女たちの家庭には、家族同士わずらわしい人間関係を断ち切り、批判や干渉や忠告をされたくないという大人の姿が見えるのだ。わずらわしいから、不自由だからと、人間

関係を断ち切った家庭で暮らす少女たちに、身近かで親密な大人のアドバイザーがいない。ことに女の子の生き方のモデルになる母親がそれをしていない。むしろ母親を見て、ああはなりたくないという思いと、結局自分の人生もそれしかないのだ、という思いが混ざっている。離婚であれ、再婚であれ、それが大人としての生き方を追求した結果だというのが、子どもに伝わっていないからだと思う。

3 「女と男のいい関係」を授業する

以上のような状況から、家庭をつくる最も根源的なものは女と男の関係であると考え、女の子の生き方にも迫る授業をと試みた。少女たちの多くの家庭も、女と男、妻と夫、母と父の關係に問題がある。女と男が対等・平等に向き合った性としてとらえられるようにしたい。女と男の關係とというのが、単なる愛や恋という形だけでなく、社会のしくみと密接につながっている、ということをはからせたい。

本校では保育分野のサブテキストとして「たしかな青春の日々を」(実教出版)を使っているのだが、私はあえて自作の教材を作ってそれを授業で使ってみた。自作教材といっても、実は担任するクラスに出していた「ブロッサム」という新聞の延長である。

「ブロッサム」では、消費税の問題や宇野元首相の女性問題

などを取りあげたのだが、反応はさっぱりなかった。そこで教材用には、生徒に密着した女と男の関係を話題にしようと工夫し、第20話から数回分を「セクシャリティ」にして、この単元の導入にした。「男と女の関係ってアレじゃないの?」「プリンと結婚の歴史」「女は男に犯されるもの?」「男と女のいい関係って?」というようなタイトルをつけて、生徒が興味をもって読めるよう、彼女たちの日常の話題に近づけて平易な言葉で書いたものである。私自身の問題もさらけ出したので、生徒は確かに関心を持った。

「女と男のいい関係」の授業は五時間配当し、その流れは次のようである。

(1) 導入。「女と男のいい関係」を、資料を読んで考える

(2) 展開。冬休みの課題「さらば悲しみの性」を読んでの感想文の中から、女と男の関係について書いたものを読む

。社会の中の問題としての性

表現の自由とポルノグラフィ、セックス産業

。売春と売春の歴史

からゆきさんとジャパゆきさん

(3) まとめ。売春防止法と女性の人権

性を社会科学のにとらえる向きが強くなったことと時間を感じて、生徒の感想を聞かず、私が言いたいこと・やりた

いことの一方的なおしつけに傾いてしまった点が大いに反省される。

資料を読んだ時、生徒の反応があったのだから、生徒の関心事をじっくり話し合わせることに時間をさくべきだったと思う。こちらの意図的な指導が中心だったので生徒は十分納得できなかったと思う。「女と男がいい関係である」ということが生徒の言う「幸せな家庭」につながる、という実感が持てるようにすることが今後の課題である。

編集室からあなたに

◆今夏のパフォーラムは、今号にはさんだチラシで詳しくご案内していますが、豪華メンバーによるシンポジウムはもとより、各分科会が、大変充実した内容になりそうです。家庭科の分科会は、例年人数が多いため、ひと通り発言するだけでも時間をとりましたが、今年は一日目夜のホンネでの発言を、二日目のテーマ別分科会で掘り下げ、全体でまとめるというプラン。

「今こそ、家庭科」の今、家庭科の先生方は、たくさん語りたいこと、知りたいことがおありのはず。フォーラムで充電して、これからの実質的な取り組みに生かして下さい。伊豆長岡の富士見ハイツは、施設設備もよく温泉付、快適に二泊三日を過ごせます。お仲間をぜひ大勢お誘い下さい。

ただ今、 単身留学中

—アメリカ、そして日本—

山口 里子

Weの読者で、日本キリスト教団まぶね教会の教会員であられる山口里子さんが、'88年度はWTC(女性神学センター)、'89年度はエビスコパル神学校の留学生として、ケンブリッジに滞在されています。'88年6月、もなみさん(十二歳)を伴って渡米、暄史君(三歳)が父親の雅弘さんと日本に残りました。

山口さんが「教会の皆様」へ宛てたおたよりの中から、アメリカの現状をつたえる部分をこの号のために、紹介させていただきます。

——88年7月4日——
六月十五日に日本を發つて、ケンブリッジに來ました。もう半月経ったのですね。
今は、エビスコパル神学校の寮にいます。
ここはまさにハーバード大学の町です。エビスコパル神学校のキャンパスも、ハーバード大学関係の建物に大きくとり囲まれた所にあります。

ハーバード大学のサマー・スクール(英語の特訓二カ月コース)は一週間前から始まりました。一クラス十五人で私のクラスは日本

人が四人。フランス語を話す国の人々が半数以上です。彼等はすごいフランス流の発音ですが、どんな英文を読んで意味が取れるので、私は知らない単語が多くてついていくのが大変です。

クラス分けをする時の初めのテストの時、あまり必死にやらないで、もう少し下のクラスにはいつていれば良かったと後悔しています。今となつてはなんとかしがみついています。他にありません。ちなみに年齢は十七・三十三歳。私だけ飛びぬけて四十二歳! 頭は固くなっているし、もなみのことで手続その他、

時間をとられることも多いし、体力も乏しいし、ハンディキャップが多いですけど、自分で決心したことだから泣きことも言ってもらえませんね。

——88年10月20日

もなみはケンブリッジの公立校ピーボディ・スクールの六年生にいつて、新学期が始まりました。授業は朝八時四十五分午後二時半まで。担任のMs. Danielsに初めの日に挨拶に行くと、「英語ができなくても心配はいりません。私は最善を尽くします。生徒たちが助け合えば、それはもなみだけでなく他の生徒にとつても良い経験です」と快く話して下さいました。そして毎日四十五分、英語が話せない子供たちのための英語のレッスンを、ごく少人数で受ける時間を与えられました(授業時間中に別の教室で受けます)。

もなみは、うちで週二回家庭教師についての英語の勉強と、学校のこのレッスンと、あとは友人たちとジェスチャーまじりで遊ぶ中で、少しずつ英語が文章として出てくるようになってきました。もちろん、まだまだほんの少しですが。

こちらでは Big Brothers & Big Sisters

というシステムがあります。ピーボディ・スクールでは、ハーバード大学の学生がボランティアとして希望者の「大きなお姉さん」(またはお兄さん)になってくれます。これに申し込んだところノラという歴史を学んでいる大学二年生が、「ほんの少し日本語が話せます」と言ってもなみの「大きなお姉さん」になってくれました。週末に数時間、もなみを連れ出して、お姉さん役をしてくれます。先日は彼女の寮で、二人で、チョコレート・クッキー作りをしました。今度の土曜はどこかの学園祭に連れていってくれるそうです。

もしも日本に、日本語が話せない子供が来て、日本の公立校にはいりたいと言った場合どうなるだろうか……などと考えると、こちらのシステムは本当にスバラシイ配慮に溢れていると感激するほどです。こういう恵まれた環境の中で、もなみも少しずつフラストレーションが減って楽しさがふえてきているようです。

—— 88年12月3日

こちらでは、様々な集会に体力の許す範囲で参加していますが、本当に思いがけないよ

うな企画・発想に出会うことが多く、日々が刺激に溢れています。

刺激と言えば、女のかけこみ寺シエルター(shelter)でのボランティア活動もその一つです。

身の安全について確認したり、臨機応変な指示を与えたり、麻薬経験の有無を、うまくごまかされずに聞き出す等といったことは、能力に余ることだからと、クライシス・ライン(緊急電話)に出ることだけは辞退して、シエルターに通い出しました。

ところが、忙しい時にはクライシス・ラインを受け取れるのは私だけというような事態も、起きてきました。また、シエルターに受け入れることが決まった人と、近くの駅で待ち合わせをして、後をつけられてないか気をつけてシエルターに案内したり、そういう人の話を色々聞き出して調査作りをしたり、というようなことも、私一人でやらなければならぬ場合が、なんだかもう当然のようになってきたしまいました。おかげさまで、麻薬中毒・アルコール中毒の人の背景や、社会福祉の形等、少しずつ個々人の家庭事情の話を通して、学ばせてもらっています。

しかし、ここに来る女性たちと話してい

て、いつも驚かされるのですが、みんな本当にタフです。調査作りをしている最中など、相当シンドイ身の上話をしてくれているのに、途中でこちらの肩をポンポンたたきながら大笑いしたり、ウインクしたり。彼女たちの明かるさに圧倒されてしまいました。

でも、シエルターの帰路はいつもドツと疲れを感じます。小さい子供たちを抱えてのこれからの日々はやっぱり大変だろうなと思うのです。子供たちも、精神面でカウンセリングが必要ではないかと思うことがしばしばあります。でも、それでも、あの明かるさのある彼女たちは、シエルターやトランディショナル・ハウス(完全に自立する前段階ではいる共同住宅)等で出会う女たちのつながり、シスター・フッドで支え合いながら、きつと道を拓いていけるだろうと予感できる場合がほとんどです。

それに対して、妻と子供とに家出をされてしまった男たちの明日は、どんなことになるでしょう。そういう暴力亭主(?)たちの多くは、普段は優しい夫・父であり、たまに暴力を振って、そのあとひたすら謝まって良い夫にもどってはまた……ということを繰り返

返し、むしろ周期が短くなり、暴力の度合いがエスカレートしていくので、女が自分と子供の将来を考えて逃げ出すという事例が多いようです。謝まりつつ、暴力に走るのを止められない弱さを持った男たちは、その弱さを抱えてどこに落ちていくのでしょうか？アルコール？ 麻薬？ ホーム・レス（宿無し）？ レイプ？……男たちの明日を考える方が、私は気が滅入ります。「私は男に甘すぎるのかなあ」と反省（？）しつつ、シエルターから帰宅することが度々です。

ちなみに、一度そういう暴力行為に走った夫は、99%、謝まったり誓ったりしつつも、完全にそれを止めることができないというデータがあります。そして、マサチューセッツ州内だけで15秒に一回、女が男に（レズビアンの場合は女に）なぐられており、22日に一人の割合で、女が暴力で死亡しています。

更に、全米の女性の三人に一人は、一生の内一度以上レイプされています（祖父、父、前夫、男友達によってということが大半）。四人に一人の割合で、女の子は性的乱暴を受けており、その内九割が身内からです。

さらに、子供の側から見ても、再婚の親であ

ろうと何であらうと、ともかく「両親がそろっている家庭」は27%！ 自由と民主主義の理想をかげ、移民、難民を受け入れたつつ、性差別、人種差別、階級差別と苦闘中のアメリカを痛感させられます。

「父が働き、母は家にいる」という家庭は、全米の7%なのに、いまだにそれが「標準的家庭」とされているのです。

—— 89年2月17日

一月には夫と喧嘩が来て、半年余りぶりの家族再会。待望の二週間は楽しく、あつと言う間に過ぎ去った感じです。

こちらに来てから友人たちには完全筆不精を決めこんで、夫一人だけにせつせと手紙を書き、経験を共有する努力をしてきました。その上、すごい電話代を払って長電話もしているのですが、それでもたつた半年で、なんだか物の受けとめ方にズレができてきているような感じがしました。環境の大きく異なる所での別居はコワイものだなと実感。一応、半年のところでお互いそれをチェックしあえただけでも再会の意味があったと思います。

ただ、もなみは、その後ホーム・シックがひどくなってしまう、慰めたり励ましたりし

てますが、少々しんどい時をすごしています。

—— 89年4月9日

私は去年九月からシエルターで働いて、様々な女性に接してきましたが、アジア女性に接することは全くありませんでした。この三月になって初めて一人の中国系アメリカ人をゲストとしてシエルターに迎えました。

彼女は今三十代。九年前に家族と共に中国から来て、こちらで同じ中国系アメリカ人と結婚、子供が二人。ところが彼女はほとんど英語が話せません。この先も一生アメリカで生活する彼女が、九年間一体何をしていたのか？ 夫が彼女の外出を許さず、家の中だけで生活していたのです。食料品についてすら、夫が買ってきたものを食べる、買ってこなかったら食べないという生活をしていたということがわかりました。夫と共にチャイナ・タウンで買物をするということはあったようですが、それ以外の場所は何も知りません。

シエルター職員や、難民救援センター職員と話してわかったことは、彼女ほど極端でなくとも、似かよった状況の人は沢山いるし、十年もアメリカに住んでいてアメリカ国籍で

も、英語を話せないし、友人もいないというアジア系女性に珍しくないということです。

「アジアの男は女が家にいることを強制するし、女も男に服従する、まわりもそれを黙認する」という文化がもととあるでしょう。だからこういう女性が沢山いるのは言わば当然のなりゆきなのです。だからこそ、私たちは今アジア系の人々のコミュニティに各国語で女性の権利・救援情報を伝えていかなければならない、職員にもアジア系の人をふやしたいと、様々な企画を開始したわけなんです」と言われました。

ちなみに私もこの企画に参加し、権利・救援情報の小冊子の日本語への翻訳をしました。

こちらに来て以来、「暴力」というものの色々の面から考えさせられてきました。アジアの男は女に対して横暴・傲慢で、女はそれを甘受・黙従している、というステレオ・タイプがこちらの人々の意識の中に強固にできあがっていて、それがかなりの部分、レイシズム・人種差別的意識を支えているというもの、肌で感じてきました。私はそれに反感を持ち、こちらの暴力状況は日本なんかとは比較にならないほどササマジじゃないか、と

思ってきました。

けれど最近、「やっぱり日本・アジアへの『偏見』は基本的にあたっている。日本女性が受けている『暴力』の問題の方がはるかに道遠しだ」というふうに感じさせられることが多くなってきました。

つい先日、フランクからこんなことを言われました。彼は四十歳のコンピュータ・スペシャリスト、もなみの英語の家庭教師で、私が彼に日本語の家庭教師をしています。そして現在私は彼から、コンピュータ使用の特訓（？）というご好意をシブシブ受けつつあります。

彼によると、「アメリカ人は大体そうだけど、僕はパーティが大好きだから、たいがい週末にはどこかのパーティに行く。友人同士パーティに誘い合うから、知らない人の家のパーティにも行って、様々な分野の人と友人になつていく。だからパーティは楽しい。だけど日本のパーティはほとんど食べ物を楽しむだけ。その上、たいがい女の人が食べ物と給仕のことにひどく気を使って、男だけが会話を続けている。こんなじゃ居心地が悪くてちっとも楽しくない。本当にヒドイ。日本

人はどうしてあんなパーティを楽しめるのか、全く信じられない」と。

そして、「ディスカッションをする」と里子はいつも僕をセクシスト（性差別者）だと言う。確かにそうだと今は認める。だけどそれでも、日本のパーティには耐えられない。あれは考えられないほどヒドイ、セクシスト（性差別的）じゃないか」と。

彼と私は、いつもお互いに容易に相手の意見に賛同せず、ぶつかりあいながら様々なディスカッションをしているのですが、これについては全く返す言葉ナシでした。本当に日本の男女が、妻と夫、女と男の関係をもっと対等で成熟したものにしていかなければ、これもある意味で、日本人への偏見、レイシズムを持続させていくだけだと実感することしばしばです。

時々、むしろように日本に帰りたくなりまです。でも、あの言葉の上下感のわずらわしさと、女の給仕を当然のようにして、居心地悪いとさえ感じない日本男性たちとの男女関係の雰囲気の中に帰って行くのかと思うと、「ゲート」という気もしてしまいます。複雑な思いで、ケンブリッジの、ちよっと淋しい春を

むかえています。

今日は四月九日。ワシントンDCで、女性の中絶選択権のための大規模デモが行なわれた日です。この辺の学生たちは、片道十時間のバス・ツアーを企画し、男性にも参加を呼びかけ、大挙してワシントンDCデモ参加に行きました。

さあ、私も元気を出して、私のやれることを楽しみながら続けていく知恵と体力をもたなくちゃ！

——89年9月6日

もなみは一年間のアメリカ生活を終えて、旅行で来た「おばあちゃん」と一緒に帰国しましたが、アメリカ人の日本に対するあまりの無知・偏見にさらされて、憤慨し、すっかり日本びいきになって喜々として帰国したという感があります。

実際、街には日本車と日本の電気製品が溢れ、人気があるにもかかわらず、こちらの人は日本ⅡアジアⅡ第三世界以上の知識を持っていないのが普通です。

そこで子供たちの質問は、「日本に自転車

ある？」「アイスクリームある？」、大人の質問は「レンジの使い方がわかりますか？」「チーズは栄養があって良い食物だけど、食べられますか？」という具合い。

日本についてもう少し知っている人の質問は、「日本の女性はいつも男の後を歩いて、男性とは違う女性用の言葉を使うって本当ですか？」「日本の夫は男だけで外出して、売春婦を買って遊び歩き、妻はいつも子供と留守番、でも文句も言わないというのは、それが文化だからですか？ 男が女に対して横暴で暴力をふるうからですか？」などなど。

確かに、あたっている面もあるけれど、差別的な固定観念をひとまずこわしてからでなければ、とても卒直に話しあう気にはなれないような雰囲気があります。アメリカ中南部よりはるかにリベラルなマサチューセッツ、その大学町ケンブリッジにいてさえです。

まあそういうわけですから、私が既婚で子供持ちで留学してきており、夫が子供の世話をしながら日本で生活していると話すと、確実にものすごく驚かれます。

「あなたのような夫妻関係をもっている人が日本に多いとは思わない。でも、日本の男女

にも、そういう妻と夫の関係が在り得るということは、日本にも、傲慢な夫と隷従の妻というのではない夫妻関係が実際にある、ということでしょう。正直言って、日本といったら、仕事だけが人生のような企業戦士の男と、子供だけと密着した黙従の主婦というイメージしか持てなかったのです。あなたと会ったおかげで、日本の女性と男性に親近感を持てるようになりました。なんだか、日本という得体の知れない国が、急に近くなったみたい」というようなことを、わりと教養のあるずいぶん多くの人々から言われてきました。

こんな中で、最近の日本女性の政治参加の動きは注目されています。「里子、日本の女たちも確かに変わってきたよね！」と声をかけられることがしばしばあります。「そうですとも！」と答えています。が、「そうですよに!!」と心から願っています。

▼私のすすめる一冊▲

児玉澄子著（ウイ書房刊）

『教室のミニ舞台から——こぼれ話20』

金山明子

私は一九七四年より約十年に亘って著者と同じ高校の同僚であった。新任であり授業が思うに任せなかったが、著者の夢とユーモアに溢れるカットの入ったプリント、さまざまな揭示物・道具立てなど、教材のアトラクティブなことを知り驚き、こちらにも創造力をかきたてられた。

また、生徒の心に添えるようにとカウセリングの研究も続けておられた。「生徒は異星人、心も言葉も通じない」「月給をもらっているのだから苦行のホームルームも仕方ない」と思うことがままあったが、著者の授業、HRの様子を見、話に聞き入るうちに、事態は一八〇度転換した。

いつも生徒とともに潑刺と過ごし、尊敬され慕われてきた著者と生徒の心の繋りは、どのようにしてできてきたか。若い教師のエネルギーとベテランの熟練した教育技法を合わせもつ著者の具体的実践の一つが、これらの

「教室のミニ舞台での語り」である。

たとえば「I英語の話」——

日本人には苦手の「r」と「l」の発音の区別は、留学時代の体験を通して語られる。アルゼンチン出身の留学生「Lola」を日・本・英語で「ローラ」と呼んで友情が危くなっていた頃、さまざまな国の留学生と一緒に「ララララ」と歌う機会があった。彼らの口元と舌の様子から、^{ジャパニーズ・イングリッシュ}「l」の発音のコツを悟った話だ。以後生徒から「ローラ先生」と呼ばれるようになる。

高校生にとっては、海外旅行の話は最高である。「Ⅲ世界の友人の話」、「Ⅳ一人旅こぼれ話」に、「私もきつと行くんだ」と心に誓い、英語の授業に精を出す。

「先生の話を聞くと元気が出るんです」と多くの生徒は言った。一方、著者は「聞いてくれる者がいて初めて『話』は語りかけられる。目が輝き笑い声が起こり心配そうな表情が浮かび、好奇心を体にみなぎらせて聞いてくれる者がいて、話し手の『話』にいのちが生じる。その結果、教室の中で『生きる』ことが双方の間で共有され、味わうことができるのだと思う」と書いている。

これは、われわれ教師がはつきり意識して

いるかどうかは別として、日々体験していることだ。この教職の醍醐味を著者は明確にし、代弁し、普遍化してくれる。

スシ詰めの教室での受験指導で疲れ果てて虚しくなるとき、ふと脳裏に浮かぶ生徒の輝く顔や張りのある声に励まされ、明日への気力が湧く。困難が多くとも、十分にわが人生に報いてくれる仕事であることを、改めて知らされる。「V学校を創ったころの話」で、読者は、生徒指導のヒントとエネルギーを得るだろう。

文化祭・合唱祭等で、初めは無関心で投げやりな生徒たちと、どのようにかわってやる気を引き出したか。生徒たちが幾重の障害にも挫けず、行事に花を咲かせていったか。その陰の教師の指導・心配りが、正直に赤裸々に、具体的に述べられていて、生徒はもちろん、親たちにも、随筆として心に響く読み物である。

時を経て変化する生徒に、教師の対応も変えなくてはならない。また、問題をかかえた生徒に接するのはむずかしい。こういった生徒との具体的な対話例は、前著『若いいのちの像——私のカウセリング入門』（ウイ書房）に生き生きと描かれている。

★学習の主人公たち

喜田 稔男

どんな「家庭」が理想的？

〈一年〉

片岡 愛

◆「家庭」——今までこの意味をよく考えたことがあったでしょうか。あるにしろないにしろこれはいちばん大事なものだと思います。

まず仕事、勉強などで疲れた体や不安な心をやわらげ、ほかのどんなところよりもリラックスできるところだと思います。

しかし最近の家庭の形態を見ると、核家族化が進み、俗にいう鍵っ子が増えていきます。そのうえ、両親とも働いているためにいつも一人で夕食をとるという子も少なくありません。このようなことでは本当の家庭の機能を果たしているとは思えません。

「だんらん」という言葉を時々耳にしますが、最低一日に一度はこの時間をとるべきだと思います。口に出さずにはいられないくらい楽しかったこと、うれしかったこと、感動

●三重県立松阪高等学校

したことを自分自身の中にとめておくのはあまりにも淋しいことであるし、そのようなことを家族の人に言うことによって、みんな喜び合えるでしょう。また、くやしいこと、不満に思っていることも、家族だから思うままに言えるし、それで気分も落ちつくかもしれません。家庭とは唯一気がねせずにいられる所であり、いちばん信頼できるものだと思います。だからといって言いたい放題わがままを言うというのではなく、一人一人がそれなりに自覚をもつべきだと思います。

そのほかに日本では、戦後廃止されたにもかかわらず、今でも家族制度の風習が残っているように思えます。最近では女性も働きにかけ、男性なみに疲れもあるはずですが、効率よくそれぞれが仕事を分担したりしてお互いに助け合ってはじめて、理想の家庭ができ上がると思います。

◆私たちは、いっしょに生活する、親子、夫婦、兄弟姉妹などの集団のことを家庭と呼んでいる。それについて、私の考える理想的な家庭生活とはどういったものであろうか。

大部分の人は、この「家庭」という集団に属している。これらの中で、理想的な集団とは、皆無に近いだろう。それだけ理想的な家庭を築き上げることが、困難なのである。

一見、理想的に見える家庭でもどこかに欠点があるはずである。経済面での困難や、また裕福な家庭については、家族間の結びつきが弱いなどという欠陥などがあったりする。

私は、家族間の結びつきが強ければ強いほど、それは理想的な家庭というものに近づくのではないかと思う。これは、いつもいっしょに生活しているがゆえに、得られる結びつきではなく、心の中での結びつきのことである。

私は現在、親元を離れて生活しているが、家庭間の結びつきというものが、弱くなるどころかますます強固なものになったのではないかと思う。つまり心の結びつきが、強くなったということである。

私の家は、経済面ではそれほど楽ではない

が、限りなく理想的な家庭に近いと思う。親子間の信頼というものが確立されているからである。この親子間の信頼というのも、理想的な家庭を築き上げるために必要不可欠な要素である。

親は子を養い、子は親に従う。これではためなのである。それぞれの意見を尊重し合うことが大切なのである。そこで初めて、親子間の信頼が生まれ、愛情が育まれていく。

以上の条件を満たしている家庭が、私の考える理想的な家庭である。私は、将来、限りなく理想に近い、家庭を築き上げたいと思っている。それと同時に理想的な社会を築き上げるために、より一層の努力をしていくべきであると思う。

〈三年〉

荒木 知秋

◆私が自由に育ってきたこともあって、なるべく自由な家庭を作りたいです。あくまでも家族一人一人の意見を尊重するつもりです。雰囲気はとにかく明るい、笑いのたえないものにしたいです。たとえ貧しい生活であっても、家族の心が豊かであるようになればいい

なあと思っています。そして、嘘がないというのも理想です。子供は経済的に余裕があればたくさん欲しいです。その前に結婚できればの話ですが……。これぐらいです。今のところは……。あくまでも理想です。でも、なるべく近づくようにしたいです。それから、このような家庭を作る為に絶対にしたいのは、あいさつです。家庭の中からあいさつを失いたくはないです。

北出 真美

◆私と夫との関係は、いつまでも恋人のようでありたい。結婚したから、もう夫は、自分のものだからといって、急に態度を変えたりしたくない。専業主婦になるのもいいけれど、ただの主婦では終わりがたくないし、この先、どんなことがあるのかわからないから、仕事は続けたい。でも、昔からの私の夢である、素敵なお母さんになることを実現させたから、独身の頃のように、バリバリ、仕事はできないだろう。

私と子供との関係は、友達のようにでありたい。しつけなどの教育は、母親としては当然のことだから、子供が小さい時は、厳しいかもしれないけれど、遊んでいる時や、子供が

成長してきたら、母親ということを忘れてしまいたい。そして子供が、自分の母親を、自慢できるような母親になりたい。

現在、両親の「子供」だけの私が、結婚をすれば、妻であり母親となる。どちらも、家庭の中で、頼りにされるだろう。その重要な責任を果たすことができるように、自分を、磨いていきたい。

家族がみんな健康で、仲良く暮らし、笑顔が絶えることがない家庭こそ、私の理想です。

大鏡 兼吾

◆まず相手は、第一によく気が付いてやさしい人がよい。料理が上手ということもポイントが高い。容姿は美しいのにこしたことはないがそれほど気にならない。あと、いっしょにいてリラックスできる人なら最高。

次に子供は、多にこしたことはないが、そもいかなないので四、五人がよい。さらに、その中に女の子の双子がいれば最高に幸せである。

共働きについては、相手の意思にまかせたい。子供が生まれるまでがええような気もする。結局、帰宅した時にゆっくりと落ちつける家庭が最高だと思う。

村田 有加

◆私は、木暮武彦氏と結婚してアメリカで生活したい。と言っても絶対ムリ。だって彼はゲイノール人ですもん。だから木暮さんのような人と結婚したい。年は私より五〜六歳上でもいい。私が二十四〜六歳の間に結婚したい。三十歳までに二人子供を生んで三十二〜三ぐらいで家計にゆとりがあったら三人目を生みたい。子供は二男一女、先ず男の子を二人生んで一番末に女の子。名前は長男「武彦」、次男「飛馬」、長女「かんがえてない」。

結婚しても、子供を生んでも、仕事は一生して行きたいので、長男と生活したい。姑と同居してもいいけど、若い時は別居したい。同居しようとしても、仕事の関係もあるからできないと思う。年収は二人で五百〜六百万あれば充分です。贅沢は言いません。好きな人と暮らせたらずらでも私はいい。

子供には何か楽器を教えてあげたい。ギターとかピアノとか教育ママだけにはなりたくない！子供が悪い事したら、びしっと一発、人目を気にせずひっぱたきます。そして後でどうして怒ったのか、やさしく話してあげたい。小さい時にびしっとしつけて自分で善悪が区別できるようになったら、子供の意

志にまかせざるが、悪い事はやっぱりびしっと怒る。家事、食事の用意も男の子に手伝わせる。上手に言えないけど、日本式じゃなくてアメリカ式の教育をしたい。子供に英会話は必ず教える。勉強はできた方がいいけど、バカでもいいから常識のある人間になってほしい。

夫婦関係では「フーカークの仲」になりた。お互いズケズケと言いつ合つても次の日にはすっかり元どおりになっているように「友達夫婦」かな？夫・妻というよりパートナーとしてあつさりした関係、んー、うまく言え

ない。会話とか少なくて一見、冷めたように見えても、深く愛し合つてるとか、理解し合つてみたいなの。大人の愛が、ってやつかな。やっぱり趣味を通して将来の夫とは知り合いたいと思つてます。見合いはイヤ、絶対、恋愛がいい。

住居は、屋根とカベがあつたらいい。でも「ふつーの生活」はあんまりしたくない。海外生活とか、人とはちよつと違った生活がしたい。でも本心は木暮さんと結婚したい。悲しいけどこればかりわねえ……。

● 高校生の

意識調査

三重県高教組、松阪支部が松阪地区七校（普通科四校、職業科三校）で行なつた二年生男女生徒の意識調査の結果です（89年九月実施）。「性別役割分業」や将来の「家庭生活」など五年前の調査との比較、男女の比較で興味深い点がたくさんみられます。一部を紹介します（普、職―各百名、無作為抽出、カッコ内は84年三月実施の二年女子のもの）。

●あなたのお母さんは仕事を持っていますか

イ正式採用
ロパート
ハ自営業（農業も含む）

ニ専業主婦

女(26%) ↓ 25% 男(21%)
女(18%) ↓ 17% 男(19%)

●あなたのお父さんは、どの程度、家事をしますか（掃除・洗濯・食事の用意など）

イ大変よくする
ロふつう
ハ少しする
ニ全然しない

女(5%) ↓ 7% 男(10%)
女(11%) ↓ 16% 男(20%)
女(25%) ↓ 26% 男(29%)
女(57%) ↓ 49% 男(39%)

●男が家事・育児をすることについて、どう
 思いますか

イ家庭は男女が協力して作りあげるもの
 から、当然すべきである

女(22%)↓26% 男23%

ロ家事・育児は、女の仕事だから男はす
 べきでない

女(13%)↓5% 男12%

ハ共働き家庭も増えているのだから、少
 しは男も手伝うべきだ

女(52%)↓60% 男48%

ニわからない

女(14%)↓9% 男17%

●「男は社会・女は家庭」と、男女が役割を
 分担する考え方があり、今までの社会はこ
 のような形で動いてきたと思いますが、あ
 なたはどう思いますか

イこれからも、それでいいと思う

女(22%)↓14% 男35%

ロ社会も家庭も、男女が共に分担するよう
 に変えていった方がよい

女(46%)↓64% 男33%

ハよくわからない

女(32%)↓22% 男30%

●結婚生活は、経済面ではどのような形が望

ましいと考えますか

イ夫の収入のみで、家計をまかなう

女26%↓17% 男28%

ロ共働きで、夫が収入の多くを占め、妻は
 補う程度

女58%↓60% 男44%

ハ共働きで、夫と妻の収入がどちらが多く
 てもかまわない

女16%↓21% 男24%

●あなたの理想の家庭に、もっとも近いの
 は、次のどれですか

イ父親は一家の主人として、威厳を持ち、
 母親は何事も父親の意見に従って心から
 つくしている(夫唱婦随型)

女6%↓2% 男11%

ロ父親は仕事に力を注ぎ、出世の道を歩み、
 母親は家事に専念している(役割分担型)

女3%↓6% 男10%

ハ父親と母親は、互いに協力し合いながら、
 それぞれ自分の仕事や趣味を持ち、家庭
 と両立させながら、いきいきと生活して
 いる(夫婦自立型)

女57%↓51% 男43%

ニ父親は仕事をしながらも、家庭のことにも
 なにくれと気を使い、母親も父親とい

っしよにあたにかい家庭づくりに専念し
 ている(家庭中心型)

女34%↓34% 男33%

●老後の生活について、どのようにしたいで
 すか

イ子供達と同居し、経済的には独立して生
 活する

女31%↓18% 男22%

ロ子供達と同居し、経済的にも面倒を見て
 もらう

女18%↓16% 男23%

ハ子供達と別居し、経済的にも独立したい

女41%↓46% 男34%

ニ子供達と別居し、経済的には面倒を見て
 もらう

女8%↓17% 男17%

●現在高校の家庭一般は女子だけが必修にな
 っていますが、あなたはど思いますか

イ現状のとおり女子だけでよい

女52%↓33% 男59%

ロ男子も学習した方がよい

女40%↓56% 男32%

ハ男子も学習しないと、教育の平等に反す
 る

女7%↓11% 男8%

発

言

高校生に

家族と家庭生活をどう語る

三 田 フ ミ 子

一、はじめに

いま思春期の子供たちを健やかに育てていくことは一大事業ですという声を、いろいろな所で聞くことが多くなりました。昨年起きた「女子高生監禁殺害事件」など、比類ない残酷性と合わせ、事件が両親と住んでいた家庭の中で起きたということの衝撃……これは特異なケースであったとしても、私たちの周囲にも子供の行動に悩んだり胸を痛めている人が多く見受けられます。かく言う私も高校生の担任として、また高校生を持つ親の立場で、思春期対思秋期の格闘の日々を過ごしています。子育ての土壌である家族と家庭生活、この切り離せない関係を、人間として成長途中にある高校生と身近な問題として考えてみたいと思います。

二、家族と家庭生活をどんな切り口で授業に取り扱ったか
国の農業政策が教育に影響を及ぼした結果、農業高校は人

気がなく、生徒たちは中学校で輪切りにされ、入学してきます。

私の担任する生活科学科は昨年度、生活科から名称変更した科で、公立であること、生活に関係した教育内容が学べること、寮があることから、生活者としての自立を求めて非農家の生徒が三分の二入学しています。家庭環境も複雑で恵まれない生徒が多いのです。昨年度、盛岡農業高校、生活科学科第一回生四十人に聞きました。

「家庭生活からイメージする言葉は？」という問いに対して、家族、人間関係、絆、夫婦、親子など人のつながりに関係した言葉が多く、次に食べる、寝る、台所、居間など生活に関した言葉、愛、しつけ、人格形成、保育、くつろぎ等人間を育てることに関係した言葉が返ってきました。

一人では何もできない状態で生まれてくる赤ん坊が人間と

して自立して生きていく上で、家庭生活を抜きに考えられないこと、家庭が人間を育てる場になっていることは、生徒たちも気づいています。自分が育てられた家庭生活を客観的に見つめるようになった生徒たちに、「育てられた家庭生活」とこれから「創りたい家庭生活」を現在の目で見、問題点や大切なことについて考えさせたいと願いました。

「私の家庭・家族を語る」として自分史をふり返り、それを分折して書いてもらいました。口で発表することはいやがりますが、書くことには抵抗を示さないで、かなりプライベートルな部分まで触れてくれました。

四十人で構成している小さなクラス集団も社会の縮図を思わせます。五人の親が離婚しており、そのケースも様々です。

A子―父親が事業に失敗、借金トラブルをめぐってAが中二のとき離婚、三姉妹の末っ子、姉一人は県外就職、一人が同居して母親代わりをつとめている。母は昼は店員、夜は飲食業で必死で働いているが、授業料・寮費は一年間未払いであった。親子で触れ合う時間がなく、Aは自由、気ままに過ごしている。

B子―会社員の母親の浮気が原因で小学生のとき離婚、再婚し又離婚した母と二人暮らし。母と姓が異なる。姉は父親と、弟は母の再婚相手と暮らし、三人姉弟バラバラで生活して

いる。授業料免除で生活費を補うためBはアルバイト申請中。

C子―父親の酒乱と家庭内暴力が原因で中三の時離婚、社会人の兄、高校生の兄、日雇いの母の四人暮らし、授業料免除、生活は貧しいが、家族はまとまって仲が良い。

D子―年若い母とそれより年下の父親、性格不一致から離婚、会社員の母と二人暮らし、母娘一緒に過ごす時間がなく、心のよりどころを求めて父と会うことを望んでいるが、母がいやがるので父と母の板ばさみに悩んでいる。

E子―父親の顔を知らないうちに、父親の浮気が原因で離婚。四人姉妹を母一人の生計で支えている。

三年サイクルで担任になりますが、クラスを持つたびに家庭の状況が深刻になっていることを実感しています。

三、生徒の自分史から

H子の家庭は、岩手の県北に住み酪農を中心にした専業農家、牛90頭、水田100a、畑1200a、両親(30代)祖母(50代)三姉妹の長女。

「我が家の親は仕事中心で、子供の成長を知らなすぎる。

牛の世話や農業は大変であるが、仕事仕事と言って子供の成長を知らなすぎ、理解できず、親の思いどおりにならなくて、ただおこってばかりいる。子供に関心を向け、良い所も見つけ子供が良く成長するように励まし見守って欲しい。

○我が家は家庭らしさに欠け、母親は料理ができないで祖母

まかせである。インスタント食品を良く利用して手間をかけず、手作りのもので家庭らしさを味わいたいといつも思っている。

○家族としてのコミュニケーションが少ない。

家族と言っても皆でいる時間が少なく、大人から教えられる機会がない。また子供の持っている悩みなどわかってもらえず、不満がたまり、親にも他人にも反抗したくなる。自分でも悪いと思うが、それを愛情で見守るなり注意してくれれば、悪い点を反省して良く成長するのではないかと感じている。

○私の将来作りたい家庭

いつまでも友達でいられるような人と結婚したい。そして二人で協力して子育てをしたい。子供には信頼される親になりたい。子供が悪いことをしたらわかるまでその場に置いて考えさせるなど、厳しい時にはとことん厳しくしたいと思う。友達のような親子関係を築きたいと願っている」

牛肉の自由化など酪農も大変な状況にあり、生計を支えることで精一杯な親の下で育っている生徒の家庭生活である。

H子は、男まさりの口調で言いたいことをはっきり言い、批判力があり、生きるたくましさを備えている。他人には厳しく、担任のウィークポイントにもぐさりと突き込んできて、いい面でも悪い面でも気になる生徒であったが、この文

を読むことで理解ができたように感じた。自分は親の労働の手助けをしようとせず、親にだけ子どもへの理解を求めていることについて、高校生に共通する問題がないかと指摘し、話を発展させた。

次のI子は、学習・クラブにも意欲的で、優しく思いやりのある生徒である。

岩手の県北、スキーヤー相手の民宿（五十人位収容可能）経営、夏は農業（りんどう、葉タバコ）、畜産、家族は両親・祖父母、祖々母・三姉妹の二番目、八人家族である。

「母は我が家の太陽であり、父は台風です。

私の母は心が広く、がみがみ怒ったりしません。つらいことがあっても、自分の心の中にしまいこんで人に当たったりしません。今も民宿の仕事が大変なのに、一週間ぶりに寮から帰った時などやさしい言葉をかけてくれたり、一週間の出来事などみんな聞いてくれます。言葉づかいとかが悪い時などは注意してくれ、曲がったことが大嫌いな人です。

忙しい家なのに『つかれたー』と弱気を見せません。そんな母を見ていると、私は何を言われなくても母を助けようと思うのです。だから私は日曜日でも早く起きて家の手伝いをして、母を少しでも休ませたい気持ちになります。

今、母がいなくなったら生きていけないと思う位、母はいろんなことを教えてくれます。言葉だけでなく体や態度を通

して教えてくれます。働きものの母は子供心にスゴイ！と思わせるものを沢山持っています。いつもやさしく笑顔美人です。

私は少し素直な面を持っていると思うのですが、これも父や母から教えてもらいました。私は両親に素直にものが言えます。笑いが絶えない家ですが二カ月に一回位、父と母はトラブルを起こします。父は母に対して沢山自分の胸にたまっていることを全部言い尽くした上に母をたたきます。でも母は歯をくいしばって何も言わず、冷静に物事を考え、父には何も言いません。そんな母が私にはあわれに見えます。普通なら『こんな家にはいたくない』と言って出て行ってしまいかもしれませんが、母は負けたくないと言って歯をくいしばって頑張っていました。

一度心臓がぶれそうなる大変な場面を目撃しました。その夜母は私と寝ました。いつもは泣いたことのない母が泣きました。私は氣持を打たれ、一緒に泣きました。その後、父と母の仲をもどすために必死でした。父は恥ずかしがり屋で素直ではありません。短気ですが、ふだんは優しく何かと母を頼っているかわい面もあります。いつもは仲がいいです。そんな二人を見てみると、素直になれて頑張ろうという氣持が湧いてきます」

この生徒の母親は三十代の後半。大変性格のきつい姑と二

十年生活を共にし、大家族の中で複雑な人間関係を学び、子供と共に成長して、なにより子供の心に深く入りこんで家族のきずなを強めている。「好きな人といつでも一緒にいられたらそれだけで幸せである」と安易に結婚生活を考える生徒が多い中、家族・家庭生活を維持していくことは大変なエネルギーがいるだけでなく、自分が身につけてきた人間性、やさしさか思いやり、教養、大人としての言動や行動が本物であるかどうか日々問われるということを考えて欲しい。

人の心は、時間や環境によって変化する。自分だけは幸福な家庭が築かれると楽天的に思っている生徒が多い中、身近な自分の家庭、隣人であるクラスメートの現実を直視して、家族・家庭生活を具体的に考えて欲しいと願っています。

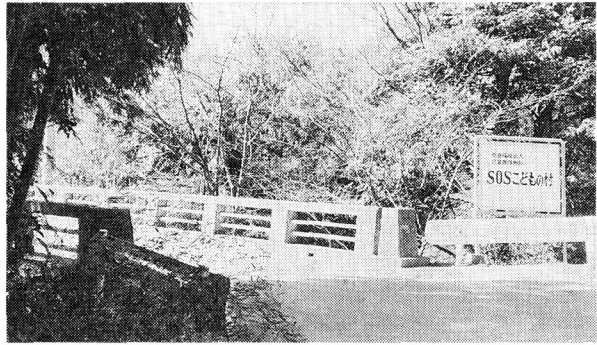
人間が生きていく上で一つの知恵として、家族を生み出し、法律も作ったけれど、それがうまくいかなくなる時、なつた時、どうするか、どう生きるかを考えられなくてはならないということも。対応策を知っていればよいのではなく、なぜそうなったのかを考え、同じ失敗をしなくてすむような生き方をさぐる力が要だということです。

自分の世界を持ちながら、社会の最小の単位である家族・家庭のきずなを大切にすること、日本の家庭は過渡期にあり、今、学んでいるあなた方はこれから創っていく当事者なのです、と。

(盛岡農業高校)

「SOS こどもの村」を たずねて

■青木喜代江



東京の西、八王子市の高尾山には、まだまだ豊かな自然が息づいています。その北麓に、東京都の児童養護施設「SOS こどもの村」があります。SOSはSave Our Soulsの頭文字で、魂を救うという意味。ここではさまざまな理由から親と別れた子どもたちが、どこにでもある二階建ての家に、保母さんと、年齢の異なる子ども数人と、兄弟姉妹としてい

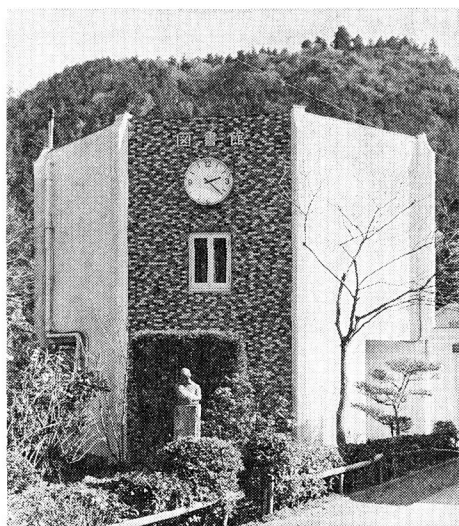
つしよに生活しています。子どもたちをあたたかい「家庭生活」の中で育み、社会人として自立できる精神を養うことを願って、十九年になる「SOSこどもの村」をたずねました。

子どもの村の入口は、前を流れる小仏川に架かるこどもの村の橋（写真―上）―ここに村づくりをするために架けた私設の橋―をわたります。三月中旬の小春日和の午後、子どもたちが学校に行ったあとの村は、ひっそりと静かでした。

「SOSこどもの村」は、'60年代の初め、交通事故が激増し始めた頃に、その遺児たちに手をさしのべようと、佐々木三十郎氏が、六十歳で全私財を投じて開設されたものと聞いておりました。その佐々木さんは今も、現役の村長さんとして先頭に立たれる毎日をおくっております。

おいそがしい中、快く迎えてくださり、お話をうかがいました。

村の敷地は、約四千平方メートルに及び、背後には、明治の森高尾国定公園、前には小仏川が流れるという自然の景観の中に、「大地の家」「月の家」「太陽の家」「星の家」「ふるさとの家」の名まえのついた家々。それぞれに、野菜や花をつくる庭がついた3DKぐらいの二階家が並び建っています。他に職員宿舎や体育館、事務所などと、シンボルの存在の鉄筋コンクリート建ての八角形の立派な図書館。



’76年設立の図書館 館前の母子像は東京造形大学田村史郎作。こどもの村第一号の交通遣児ひろみちゃんがモデルという

昨年四月、村の外に新しい家「光の家」ができました。高尾駅よりの分譲地内の一軒で年長の女子ばかり数人がこちらに移りました。住宅設備も今様で、シャワーが使えるので、「朝シャンができる」とみな大喜びと、後で案内して下さった保母さんからうかがいました。

村の家も、一般の家庭と同じく居間・ダイニングキッチン・風呂があり二階は二、三人ずつの子ども部屋になっていきます。キッチンのテーブルが大きい他はまったく一般の家と変わりません。

図書館は、村に入るとすぐ目を引く、立派なたてもの。一階には、黒板と机が並び、帰宅後はここで学習するように学習室があります。ここで指導員が子どもたちの勉強も見てくれるそうです。

最近、子どもの方から、やはり家に勉強机がほしいという要望が多く、それぞれの部屋に自分の机を置くようになったとかで、ここで勉強する子は少なくなったよう。

二階は、八千冊の蔵書が周囲のかべをうめています。地域の人々にも貸し出しをしていて、町の図書館になっています。

現在「こどもの村」には、二歳から十八歳までの男女三十五名の子どもたちと、十六名の職員が生活しています。

一軒の家に、お母さん役とお姉さん役の二人の保母さんと年齢に応じて五、六人ずつがいつしよに住み「家庭」をつくっています（兄弟、姉妹はなるべく同じ家にして、いつしよに生活できるようにしているとのこと）。それぞれの家で、お母さん、お姉さんの作るあたたかい料理を味わい、家庭の躰を身につける。寝食を共にし、お母さんたちの「人生を真剣に生きる姿勢を身近に見、聞き、話し、教えを受けて成長していく」ことを基本的な理念にしています。

お母さん役には、独身の婦人か実子のない未亡人で子どもの養育に専念できる人。お姉さん役には、大学で福祉関係の



村長でありSOSこどもの村協
会理事長の佐々木三十郎さん

勉強をした人や保姆の資格をもつ人があっていますが、「住み込み」が原則なので、生半可な意識では続けられない気がしました。

それぞれの「家庭」には、食費の他、子どもたちの下着などの小ものにかかる家計費を月々手渡し、独自に運営されているそうで、他にあまり例をみない方式だということです。

東京都の場合、養護施設では高校卒業まで養育しますが、進路の相談も、お母さんや村長さんが親身になって、それぞれに適した方向をいっしょに考えてきめる。かつて、大学まで村長の私費で卒業させた例もあったとうかがいました。

もう一つは、地域社会との交流をはかり、社会生活の基礎を養うこと。

村では、子どもたちは地域の学校に通い、近隣の子どもた

ちや、その家庭の人々とも親しみ、更に運動会、バスハイク、もちつき大会などを通じて、地域社会との交流をはかっています。

村長の佐々木三十郎氏は、戦前は、旧宮内官や教官を勤め上げた方で、原水爆禁止第一回大会の議長団の一人として参加されたこともあったとうかがいました。

ついだうめこ

村のおとうさんはもうお年だから、いろいろなおしごとがあつて、たいへんですねー。てつだつてあげますから、なにをしたらいいかおしえてください。

わたしがおとなになったら、おとしよりをだいにします。およめさんになって、一人こどもをうみたいです。こどもがうまれたら、だいにそだてます。村のおとうさんも元気でまっいてくださいね。

村のおとうさん、わたしとあそんでください。つかれているときは、かたもみをしてあげますから、いつでもいってください。

*うめこのお母さんは死亡。お父さんと姉が一緒にくらしており、二年のうめこ弟が、こどもの村にいます。姉弟が別れ別れになっていることを悲しんで、このような作文になったのでしょうか。

新しい 家庭科を 創るために

小学校では

「ごはんのみそ汁」作り — 食生活を見直す —

●東京都世田谷区立赤堤小学校

森 妙 子

(1) とうふ作りを通して

一、はじめに

私が勤務する小学校では、高学年になると受験のために塾通いする子どもたちが増えていくようです。勤務を終えて帰宅途中のバスや電車で、塾へ向かう子どもたちと乗り合わせることが多く、この子どもたちの生活が気にかかり聞いてみると、塾へ出かける前に軽食（パン・カップ麺、スナック菓（子類）を食べ、夕食は塾で母親の作った弁当や、塾まで注文を取りにきて配達してくれるハンバーガーなどですましてい

るようです。

帰宅は九時半過ぎ、入浴・学校の準備や宿題、塾の復習や宿題と続き、就寝は十二時前後。翌朝は空腹でないこともあって、登校時刻ギリギリまで寝ている。家族との触れ合いも少なく、健康も気がかりです。

このような生活をしている子どもたちに、食べることの大切さや喜びを伝え、みずから食物を選び、健康を考えた食事を作る力をつけさせたい。また、子どもが学校や家庭での実践を通して、家族のコミュニケーションを取りもどす一助としたいと考えました。

ここでは、「大豆を知る」「みそ作り」は省略させていただきました。「とうふ作り」について、詳しく書くことにしました。

二、学習の計画

米を知る		みそ・とうふ作り	大豆を知る	題材
2	2	4	2	時間数
(2)グループ研究発表会		<ul style="list-style-type: none"> ・みそ・とうふの実態調査のまとめから： ： 原材料・添加物について ・国産大豆・天然にがりを使ったみそ・とうふ作り 	<ul style="list-style-type: none"> ・大豆の加工法とその食品 ・大豆の歴史 ・大豆の栄養 ・大豆の使用量と使いみち ・国内生産高と輸入高 ・輸入大豆・農薬 	内 容

はんとみそ汁		だしを知る
2	2	2
・ごはんとみそ汁調理実習	・ごはんとみそ汁実習計画	<ul style="list-style-type: none"> ・だしの種類とだしの取り方 ・煮干し・かつおぶし・風味だしの栄養 ・かつおぶしができるまで

三、天然にがりを求めて

「にがり」という名称は知っていても、実物を見たことのない私は、にがりを入手するのに苦労しました。何軒か回ったとうふ屋で分けてもらったのは、にがりと称した白い粉（塩化マグネシウム）でした。

それ以後、スーパー等でとうふの表示を調べてみても、にがり（塩化マグネシウム）という表示ばかりでした。充填とうふに至っては、薄い豆乳でも固めることができる凝固剤、グルコノデルタラクトンという化学薬品が使われていることを知りました。そしてついに、職場近くのとうふ屋さんで天然のにがり（この店でも高級品にしか使用していない）を、特別に分けてもらうことができ、とうふ作りの夢の実現へと前進できました。

生協	近　　くの店	スーパー	よく買う店	原　　材　　料
輸入半々 (a)国内産と (b)国内産と	輸入半々 国内産と	丸大豆と だけ表示	大豆	
輸入半々 (a)にがり (b)にがり (c)にがり (d)にがり (e)にがり (f)にがり (g)にがり (h)にがり (i)にがり (j)にがり (k)にがり (l)にがり (m)にがり (n)にがり (o)にがり (p)にがり (q)にがり (r)にがり (s)にがり (t)にがり (u)にがり (v)にがり (w)にがり (x)にがり (y)にがり (z)にがり	輸入半々 国内産と	丸大豆と だけ表示	大豆	

表 1

ダイズのつかいみち

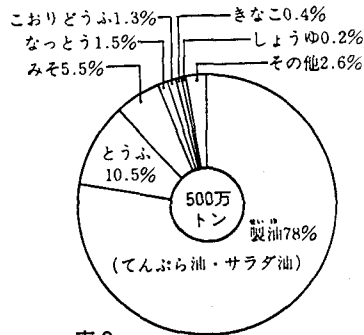


表 2

ダイズの消費量と国産高、輸入高

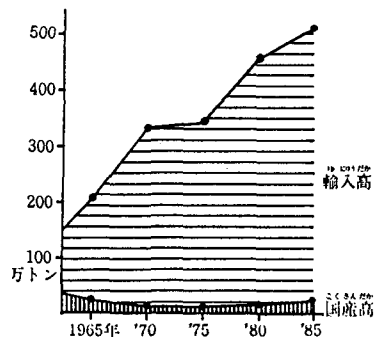


表 3

四、国内産大豆をなぜ求める

子どもたちは、大豆が枝豆を乾燥させたものであることも知りませんし、大豆を見たことのない子が多いのです。そこで、初夏に根つきの枝豆を家庭科室に準備しておき、大豆へと変わる様子を見せました。とうふ作りをする前に、日頃、家で食べているとうふについて調べさせました。表1から凝固剤・消泡剤など化学薬品が多く使われていることがわかったようです。

「なぜ、大豆に国内、輸入大豆、丸大豆と表示してあるの」という疑問が出、表2や3を使い、大豆消費量の四分の三は輸入大豆であることを知らせ、なぜ大豆を作らないのかなども考えさせました。子どもが書いたために「外国の大豆の方が安い。日本は兼業農家の増加で、食糧自給率も低い(H君)」「輸入大豆には、輸送中の病害虫から守るために、ポストハーベスト農薬が使われていると知らずに、大豆製品を食べていて恐しくなった」(Yさん)と、私たちが食べている食物の実態が明らかにできなかったのではないかと考えます。そこで、みそ作りのために山梨県の地場で採れた大豆を、とうふにも使いました。

五、国内産大豆と

天然にがりを使ったとうふ作り

とうふ作りの道具は、ミキサー、水切り用ざるや簾の弁当箱、こし袋(晒で作る)、ボール、温度計です。前日に、班で代表の子どもたちが大豆を洗い、たっぷりの水に漬けておきました。実習は、大豆をミキサーにかけ、細かく砕く作業から始まります。ミキサーを使わせてもらったことがないのか、「やらせて!」と皆が集まってきました。砕いた豆汁に水を足し、なべを強火にかけます。この時、そのままにしておくと、沈んだ豆が底でこげてしまうので、へらで静かにかきまぜるよう指導します。ふつとふつとくると、あつという間に泡がふきこぼれますので、急いで火を弱め、泡をすくわせます。「すごい泡だね。消泡剤を入れると、この泡を取る手間が省けるんだ」と、実際にやってみて納得したようでした。煮た豆汁を豆乳とおからに分けるため、こし袋に流し込みます。豆乳をためるボールを下に準備せず、半分くらい流してから気づいたグループもあり、大笑いです。この後、しぼり袋にたまったおからしぼりはとても熱く、やけどに細心の注意を払います。豆乳はなべにもどし、湯でとかしたにがりを少しずつふり入れます。「先生、にがりなめてもいい?」と、おいしいものと思ったらしく、なめて悲鳴を上げる男の

子たちです。へらで静かに十文字を書くようにまぜてみると、ヨーグルト状に変わる様子を、皆がなべの上に顔を並べて見守っています。「おもしろい、かたまってきた」「すごい! 昔の人って頭がいい、どうやって考えついたのかな?」と感動していました。

ざるや簾の弁当箱に晒をしき、かたまりかけた豆乳を静かに流し込み、しばらく水切りをすると、待ちに待った手作りとうふのでき上がりです。ふだん見慣れた形と違いうふに不可解な顔をしながら、大豆の香りがするとうふを一口食べて、本物のとうふのおいしさに、晒についたくずまではおぼる子どもたちです。そしてひとかけらになったとうふと少しのおからを、大切に家に持ち帰るのです。

みそ汁に入れる具について調べると、とうふが一番多く使われていました。市販とうふの原材料や、製造中の薬品について知ると、日本の代表食品も工業食品であることが、私をはじめ子どもや親もわかりました。とうふ作りの実習後、国内産大豆や天然にがりの入手方法の問い合わせがあり、家庭でも作ったようでした。今、日本の代表とされる食品も工業食品と変貌し、食品添加物に侵されています。私たち大人が素材を大切にし、食品を選ぶ力を子どもたちに伝えなければいけないと考えます。今回は、みそ汁の「だし」にこだわってみる予定です。

新しい 家庭科を 創るために

高等学校では

「家族」を授業で扱って

・金沢大学教育学部附属高等学校

分校 淑子

昨年度後半は、「家族」をテーマに、初めて取り組んでみました。「家族」を授業でどのように扱えばよいのか。ずっと尻込みしていました。一番大切な要…と思いつつ、だからこそ大きすぎて、どうしても中途半端には扱えなかったテーマです。もちろん、今でもまだまだ…とは思いますが。結局やりたい…授業を通して、少しでも分かるかも…という気持ちで、ゴールの定まらぬまま、走ってしまいました。やりおわった後も、まだまだスタートを切ったばかりだな…という思いしかありませんが、簡単にまとめてみました。

一、はじめに

家庭・家族の崩壊、家族愛の欠如など、家族の危機が近年

叫ばれている。大都会ほどではないにせよ、ここ金沢でも、その波は、確実に押し寄せてきている。善し悪し抜きに、今、日本の家族は、一つの大きな転換期を迎え、人々は、いくつかの選択を強いられることになるだろう。

しかし、私がこの教材に取り組み始めたのは、そのような危機感や義務感からではない。ただ、漠然と「このように騒がれる『家族』とは果たして何なのか。『家族』とはいったい何なのだろう」という単純な問いからであった。

また近年の生殖革命の急発展から「血のつながり」に少々こだわりを感じたこと。さらに個性の時代といわれる現代、最も身近で、最も個性的なものの一つに「家族のあり方」があるのではないかと思うこと、などがからみあい、「家族」

というテーマに結びついたのである。

つまり教師自身の漠然とした疑問をいきなり授業を通して、生徒にぶつけてみたのである。その中から、どのようなものを、教師・生徒が見付け出するか、私自身、大きな期待と魅力を感じていた。

最終的な目標や方向性のない授業に幾分戸惑いはあったものの「家族」については、どうしてもやりたいと思い、今の私には、このような形でしかできなかった、という現実から、この「家族」の授業をはじめてみた。尚対象は二年女子で、二学期後半から三学期の前半の約十〜十二時間を当てた。以下に授業の流れを簡略に示したい。

二、授業の流れ

1 一般的「家族の定義」の検証

家族のキーワード・同居・婚姻・血縁

つまり、「家族」とは、恋愛感情を基盤とした婚姻関係を持つ夫婦を横軸とし、さらに血縁を縦軸とした人間が、居住を共にすることにより成り立つものである」という定義がある。これら三つの観点を検証してみた。

(同居) …近年、単身赴任や、大学時代の下宿など、日常茶飯事である。しかし、これ等の居住を共にしない者も、

もちろん家族であろう。さらに「同居」という言葉には、複数の概念が含まれているが、「シングル志向」の高まる今日、一人でも家族、もしくは家庭として成立つのではないか。

(婚姻) …法的な意味のみでなく、カップルという感覚でとらえてみたい。DINKSについての意見交換も行う。多くは、カップルはもちろん家族としてせいりつするという意見ではあるが、中には「子なし」では家族とはいえない、との意見もある。

(血縁) …ここでは特に、最新の生殖技術を紹介することから、「血」の意味について、改めて考えてみた。さらに母性愛、父性愛などについても、動物の例も踏まえ考えてみた。生徒の反応は、特に生殖技術について多くあり、少々横道にはそれたものの、バイオエシックス等の観念も含め、「血」についての考えがやや深まっていたようである。

最後に、ではこれらの3ポイントにそれほどこだわりがないとすれば、いったい家族の意義とは何なのか話し合ってみた。多くの生徒が、心の休まり、家族愛、安心感等の情緒面を上げた。この情緒について特にクローズアップしながら、次に移る。

2 家族の歴史と未来

本来、歴史を遠くさかのぼって学習すべきであったが、教師の勉強不足から、近代中心となつてしまった。この点は深く反省すると共に、次回までの学習課題としたい。

(近代)現代：落合恵美子氏の近代家族の分析を紹介することにより、情緒面、つまり愛情を家庭内に集中させたのは、近代家族の一つの特徴でもあることを認識させる。従つて、前段で生徒たちが第一に掲げた「家族愛」についても検証の余地がある。

テストの際、小此木啓吾氏の「ホテル家族」を紹介し、それについて論述させる。「思い込みによる家族」について多くの生徒が再発見したようである。

(現代)未来：近未来としての90年代を考えてみた。参考として、博報堂の出した『利系家族』、自民党のうちだす家族像、ますのきよし氏の説く家族の新しい在り方を示す。

3 家族とは(「おわりに」も含めて)

家族にとって不可欠なものは、一体何だろう。様々なものが、この授業を通して疑問視されていった。私自身は、個人的ではあるが、家族を何と定義するかによって、現状の家族

を崩壊と見なすか、変化と見なすかは、変わってくると思う。

現在は、家族の転換期であり、ある意味で、もうすでに家族は崩壊しているとも思う。家族にとっての私のキーワードは、生と死ではないかと思うからである。これは生殖技術の部分で学習するうちに芽生えた思いであるが、生と死を担うのが、家族の本来の意味ではないかと思う。その意味から、生と死は、既に家族から切り離されており、その時点で、家族の歴史は一旦おわっているのではないかと思う。しかしながら、これからのゆりもどしに因つて、家族は再生する……という期待を込めての転換期と考えるのである。私の意見を紹介した後、生徒にも意見を聞いてみた。

生徒の意見を一言でまとめてみれば「家族って何だろう。ますます分からなくなつた」であつた。はじめの問いが、授業を終えて、はじめて意味をなしてきたのである。しかし、この問いは、これから一人一人が人生を歩み、新しく家族をつくつてゆく上で、最も大切なことなのではないかと思う。もちろん私自身にとつてもである。

(参考文献) 『家族』金井淑子 『家族』ますのきよし
『アブナイ生殖革命』グループ女の人権と性
『家庭のない家族の時代』小此木啓吾

情報

「高校学習指導要領解説・家庭編」とその問題点

待ちわびていた「高等学校学習指導要領解説・家庭編」がやっと出た。昨秋から延びに延びていたもので、三月二十日入手して驚いた。平成元年十二月発行とある。何故三カ月も陽の目を見なかったのだろうか？ 先ずそれが疑問だった。

差別撤廃条約はどこへ？

改訂の趣旨に「女子差別撤廃条約の批准に対応する観点から」と書いてはあるが「男女同一の取り扱い」というのみで、固定的な男女の役割を教育によって変えていく必要にについては、知らぬふりをした。

女子必修の家庭一般を改めた理由は、「男女が協力して家庭を築いていく」ためで、生活技術・生活一般を新設した理由は「生徒の多様な特性等に応じることができるよう」である。「特性」という言葉が聞き逃しできないものであることは御承知の通り。指導要領

ではふつう「生徒の能力・適性・進路などに応じて」という言葉を使う。「特性」は、例えば中・高校保健体育の内容の取扱いで「男女の特性を考慮する」とあるように「男女の」を含んだ言葉なのだ。

そんなこと存じませんと、男女共学「家庭一般」を履修させればよいのだが、文部省の意図は、男女の特性に応じられるよう、生活技術・生活一般を新設したことがはっきりした。だから三科目の目標に、敢えて立場の違いを際立たせている。

家庭一般—家庭経営の立場

生活技術—生活を合理的に管理する立場
生活一般—家族の健康な生活を管理する立場

場

家庭一般は、女子必修の科目として登場して以来、常に「家庭経営の立場から」の目標を掲げてきた。この言葉がスナリ新家庭一般に納まっているのも、文部省が女子用教科と考えていることを示す。更に「家庭に関する学科」の専門科目は、すべて家庭一般の上に積みこみになっている。

女は家庭を経営し、男は管理する、というわけだ。同じ管理でも、生活一般が「家族の健康な生活を管理する」となっているのは、

代替科目に体育を入れた辻妻合わせか？

何を家庭科の中核としているか？

三科目に共通する内容が、文部省の考える家庭科の中核だ。家庭一般を例にとると、次の四項目である。

- (1) 家族と家庭生活
- (2) 家庭経済と消費
- (6) 乳幼児の保育と親の役割
- (7) ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ

ラプ

(6)は、生活技術・生活一般では、(2)子供の成長と親の役割、となっている。家庭一般のみ「母性の健康と生命の誕生」「乳幼児の保育」があり、妊娠・分娩・産褥、新生児も扱う。生活技術・生活一般ではここが抜け、乳幼児については、理解し、健康を維持するための世話ができればいいことになっている。ここにも家庭一般は女子向き、との意図がミエミエだ。三科目に共通するのは、「親の役割の重要性の認識」で、臨教審答申の精神が貫かれている。

「家族と家庭生活」は、各科目とも筆頭に挙げられた。この項が家庭科にとって重要であることは論をまたない。内容も三科目全く同じ。「家族が社会制度として存在することの

意味」(家庭の機能と家族関係)、「家庭の自助努力も大切」「ボランティア活動への参加」(高齢者の生活と福祉)等、ほうらね、って言いたいのが顔を出した。

同じく「家庭経済と消費」では、「消費者としての自覚」「家庭経済の在り方が国民経済に影響を及ぼすことを理解させ」「家計簿やコンピュータ等による家計管理の方法を理解させ」「消費者としての権利を行使するとともに、責任を果たすことが重要であることを理解させ」とある。また「生活情報の活用」の項で、コンピュータ利用を述べている。

不思議な教科観

男女共に学ばせる家庭科のミニマムを文部省が右のように考えていることは、十分予想されることであつた。不思議なのは「ホームプロジェクトの実践と学校家庭クラブ活動」だ。前回の改訂時から、学習手段であるホームプロジェクトや、家庭クラブが、指導内容の柱になり、今回日本中の男女高校生が必修で学ぶ内容になつた。

内容の取扱いで「細部にわたる事柄や程度の高い理論に深入りすることのないように……」「いわゆる座学を中心に」ではなく、「具体的な事例や、実験・実習などの体験的な学

習を通して理解させるよう配慮する」こととある。わざわざ程度が高くてはいけない、と述べるのは、他教科・科目には例がない。

新設された「家庭情報処理」「課題研究」は、家庭に関する学科で履修させることになっているが、どんな内容だろう。

家庭情報処理―(1)産業社会とコンピュータ
(2)コンピュータの活用 (3)ハードウェア (4)ソフトウェア (5)コンピュータと通信 (6)家庭生活に関する各分野の職業とコンピュータの利用、以上だが、特に(2)(4)(6)に重点を置きコンピュータの操作が円滑にできるようにする、ということだ。

課題研究―(1)調査、実験、研究 (2)物品製作 (3)産業現場における実習 (4)職業資格の取得、だ。そして(4)に「家庭に関する専門分野の資格取得や家庭科の技術検定を目指して取り組ませ、生徒に明確な目的意識を持たせるようにする。例えば全国高校家庭科技術検定において、食物、和裁、洋裁の合格を目指す」とある。

家庭クラブや技術検定は、家庭科の教科論のどこに位置づくというのだらう！あまりにも特定の組織と密着した学習指導要領である。

解説の中で利用できるのは

第三章「教育課程の編成と指導計画の作成」では、生活一般の代替に關して「当分の間」とは、条件整備ができるまで、「特別の事情がある場合」とは、施設・設備の整備や担当教員の確保等、やむを得ない場合に限定している。

また今回の改訂では、従前に比べて多様な教科・科目を設定したが、「真に生徒の実態に応じ、その多様なニーズに応えるためには、生徒自身によって科目を選択するようにすることが大切であり、いわゆる学校選択という形で教育課程を編成するのではなく(略)生徒選択という形で教育課程を編成する必要」を述べている。この精神でいくと「わが校は生活技術で」とか、「家政科は家庭一般、普通科は生活一般」と学校で決めることは、好ましくないことになる。

「解説」通り、三科目を同時開講して、生徒に自由に選択させることは、実際問題として教師定員、施設設備の上で難しい。けれども「学校選択という形で教育課程を編成するのではなく」の文言は、大いに利用・活用したらいい。「解説」を読みこなし、その問題点を熟知した上で、利用できるところは活用しよう。

荒野のバラ

—あじさい色の 風が吹く—

●元熊本市立中学校社会科教諭

田 中 裕 一

1 無傷な心がどこにある

巷に雨の降るごとく

われの心に涙ふる

かくも心ににじみ入る

この悲しみは何やらん

(ヴェルレーヌ「無言の恋歌」堀口大学訳)

人はここでアルチュール・ランボーを思い浮かべるだろう。

季節よ 城よ

無傷な心がどこにある

(ランボー「地獄の季節」小林秀雄訳)

いかなる名訳を以てしても、彼らの詩の背後にある狂気を

映すことは困難だろう。私たち人間の、一人ひとりには弱いから、その挫折の淵に沈んで、そこから開き直るしかないのかもしれない。「人は努力している間迷うものだ」というのも、「ファウスト」冒頭に出る名言だ。だが昔流行った「心にや夜はない、いつも夜明けだ」なんて歌詞を聞くと、もう青少年健全育成讃歌を聞く思いでやりきれない。悩みのない所が嘘っぱいのである。テロリスト風の「青白きインテリ」も私の好みではないが、ファシスト風「赤黒きインチキ」はもっと確信的で有害である。だがそれは、日本の既成組織・政界・財界・官界・労働界・スポーツ界から警察・軍隊、一つまちがえば暴力団、もう一つまちがえば管理体制下の学校に至るまで潜在する気質なのかもしれない。

私は、もつと心ふるえる感性を大切にしたいし、真実の悩みや感動の中からの自立や連帯を大切にしたいのである。

それとも花は 凋落のかなしみを知らさぬために

あえてばらいろを放ち捨てるのか？

詩人リルケは、形相の底に本質を覗ようとした。この「ばらいろのあじさい」(生野訳にしても、「緑の前で 心うつ青の存在が嬉々とするのが見える」と歌う「青いあじさい」にしても、移ろう色の底に移ろわぬものを覗ようとしたのだろう。

リルケの死は、急性白血病の、苦痛にみちた形で訪れた。きっかけは、彼が愛する友に切ってあげようとしたバラの

刺で指を傷つけたからであった。人の命ははかないものだ。

パスカルは、水蒸気の一滴でも人は殺せる―だが人間は「考える葦」だとたとえ、「ここにこそ道徳の原理がある」(「パンセ」)とも言った。人間ひとりが、バラのトゲ一つで、水蒸気の一滴で消え去るはかないものであっても、考える力でその偉大さを証明することはできるのである。この傷つきやすい魂や肉体が、どのように雄々しい自立を迫り、手垢にまみれぬ清新な集団を組むことができるのか。この霽れぬ梅雨空の下で考えてみよう。その時、足元のアジサイの花が、われわれに啓示の如く道を開くとすれば、それはまさに心ふるえる感動というものだろう。

2 なぜ、今「あじさい」か

アジサイの語は、「集」「真」「藍」から出たと言われる。

「紫陽花」の字は、源順の「和名類聚抄」(九三一年)が最初で、唐の白楽天の詩から採ったと言われるが、白楽天のものは別物という説もある。アジサイ (*Hydrangea macrophylla* var. *Okusa Makino*) は、房総・伊豆・足摺などに自生する純然たる日本産のガクアジサイを親とする植物でありながら、色の変化を「移り気」と疎まれてきたらしい。万葉の時代には、大伴家持や橘諸兄に歌われたが、平城での彼らの政治力の衰滅とともに永く日本の花の主流となりえなかった。このアジサイが世界の脚光を浴びるには、これもシーボルトの

手を経ねばならなかった。その学名に、楠本澹なるシーボルトの日本人妻の名 *Okusa* (お滝さん) が付けられたのはその為であった。シーボルトの紹介で外国に知られたアジサイは、日本と違い、その変化や多様性こそが喜ばれ、改良が進んだ。今日花屋の店頭を飾るセイヨウアジサイ(ハイドランジア)は、かくて日本の写楽の浮世絵のような命運を迎った。歌麿好みの日本人に、个性的写楽が敬遠され、今慌しくオークションで高額入札されるのも、パターン化された日本社会の姿がほの見える。

日本の梅雨といえば、アジサイが浮かぶが、私の学校では以前生徒の投票で校花をアジサイに決めていた。在校生が大量にその挿し木苗を作り、卒業記念樹として苗木を全員に贈る。庭のない熊本最大の目抜き通りを校区に抱える本校では、結構コンパクトだし、丈夫だし、校花だしで喜ばれる。市内の小中学や市民からも苗木の頒布希望がくる。さて、この足許のあじさいを、もっと役に立てられないかという私の日頃の想いと、文化祭での生徒たちの思案が重なって、意外な展開を見たのである。アジサイは、学校を蘇生させるだろうか。

3 壁画「藤園の詩」の生まれるまで

文化祭での学級参加をどうするか、私の受持つ藤園中学校二年二組で討議されたのは、一九八九年六月であった。結局は、壁画で展示発表とは決まったが、テーマは検討課題とな

った。迫力のある候補は、ピカソの「ゲルニカ」だが、これには話題になった先例がありすぎた。シケイロスの「自画像」も迫力ものだが、私たちはもつと私たちの課題を取り上げるべきではないのか。考えあぐねていた夏休み、私が参加した県の民教研の集会場となった人吉市で、私はすばらしいアイデアを学んだ。人吉のサークルの先生たちが、生徒たちに制作させたアジサイによるステージ幕のデザインであった。早速関係の先生方に直接当たって、そのプロセスを学んだ。その会場で撮った写真を生徒たちに見せ、話がすぐにまとまったのは九月であった。だが、困った。アジサイの花はすでない。幸い私は校内の環境部の責任者であったから、校内の植物の写真は、毎年アルバムにしているし、校内には多種多様のアジサイがあり、私も四・五十枚は本年撮りためていた。花は、アジサイ・ガクアジサイ・ヤマアジサイ・ベニガク・セイヨウアジサイ・アマチャ・石化^{セカキ}八重と様々なので、それを焼増して好きなものを生徒に取らせて描かせることにした。黒画用紙に水彩絵具で描く時は、白を多く混色に使わないと、黒の下地に色が乗らない。こうして黒画用紙に、様々な色・形・大きさのアジサイの花と葉ができ上がった。制作に当たっては、なるたけ「よく写真を見て描くこと」「人と違った自分のアジサイ」を描くことだけを指示し、それぞれ黒画用紙二枚にアジサイを描くことにしたのである。

もちろん私も、画面につながりと広がりや明るさを出すために小ぶりの花房を五個描いた。集まった作品を見ると青・紫・紅・白・明るい色・暗い色・多彩多様なアジサイというより個性がそこにあった。この段階まで、生徒たちはこの先きどうなることや不安気であった。手抜きのものには、さらに描きこみを命じて「作品」とすることを要求した。

次の段階は切り抜きである。黒の地紙を幅1cmほどつけて、輪郭の外側から切り抜くことになる。

これらをはりつける台紙は、輪転機用の丈夫な印刷用巻紙が入手できたのでこれをはり合わせ、縦3m×横5mの台紙を生徒たちの共同作業で作り上げた。これを丈夫にするために、保健室から古いほう帯を貰い、縦・横・格子・ふち取りに裏打ちをした。また、この壁画を吊り下げられるように、上下に横木を取り付け、吊り具を付けた。後は貼り付け作業で、これが大変なのである。

美術科の先生にも登場願って、生徒と共にあってもない、こうでもない、全体のバランスと動きを考えながら配置する。空間に青い蝶を飛ばす。配置のできた所で貼りつけになるのだが、これも大変だ。裏にノリ付けする間に天地や位置がわからなくなるので、台紙に小さく見当を、花の裏に矢印をつけてノリ付けする。遠くから見てもらってはめ込むといった具合で、一切が共同作業で進む。それを校舎内の壁



2年2組の制作による作品「校花による藤園の詩」(3m×5m)

面に吊した瞬間から、今までの苦労は驚きと感動に変わった。

4 あじさい色の風が吹く

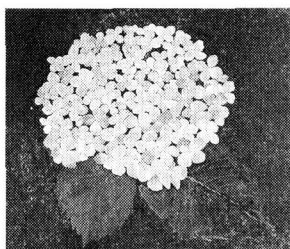
一番驚き、感動し、満足し、反省し、誇りに思ったのは、外ならぬ制作に当たった生徒自身であった。それは手短かな感想で語りつくされている。一人ひとりがかけがえのない個性を発揮した集団となった。だから良いのだ。この作品に

(生徒の感想)

一人一人の個性がでていて、きれいですばらしい壁画になったと思う。みんなで協力すればあんなにすばらしくてみごとな作業ができるんだということがわかった。
(柳辺佳与子)

かん成に大分時間がかかったけど、それ以上のでき具合だった。おわって、とても気持ちよかった。
(村元亮介)

一人一人が一生懸命書いたものをあわせたものだったから、とてもすばらしい絵ができたと思う。一人でも手ぬきした絵があったら、あんな絵はできなかった。一人一人がちがう形、色のあじさいを書いたので、それによかったと思う。(太田はるか)



Yさんが自分に開眼した作品

「制服」の画一発想も、異端排除も、切り捨てもなかった。だからみんなが生きたのだ。みんながステレオタイプの絵を持ち寄ったら、異様で不様なものになったろう。私自身も、あじさいがこんなに魅力に満ちた、みんなの力をひき出す潜在的な力をもつ花だということを初めて子供たちから学んだ。

一人の子供のことを特筆しよう。「どうせ下手だから」と三十分で描いて、再度の描きこみを命じられたYさんのことだ。彼女は、それから四時間かけて、とびきりすばらしいあじさいを描いてきた。その作品にみんなが感動の声を挙げた時、彼女自身も感動し、その時から彼女の自己変革が始まった。テストにも二百五十点満点に、二百三十点を軽く越すようになった。自分であきらめていた自分の能力にめざめ、生き方を変えたのだ。彼女を見て、その友達も生き方を変えた。彼女たちは今生いきとして生きている。生徒たちは、今誇らしげにその壁画の前に立ち、羨ましがる仲間たちに語っている。彼らの喜びに満ちた笑顔の中を、きょうもあじさい色の風がさわやかに吹きぬけていく。私たちはあじさいの花が、もともと好きになりそうだ。

家族と家庭科

民法改正後の

中学校教科書

酒井はるみ

十一月号で中学校初の家庭科教科書、文部省著作『家庭』を紹介したが、そこでは権力や権威の集中した父をもたず、活動的な女性を登場させ、楽しい家庭、家族の和を強調して、家制度を否定していた。しかし、憲法24条が謳う男女の本質的平等という家族観はみられず、民法改正（47年、S22年）後を期待したのであった。

この民法改正から「検閲」が廃止される50年（S25年）七月までに発行された教科書は、昭和二十四年度二、（うち修正増補一）二十五年度三、二十六年二種類であった。これらの教科書は、民法改正を受けて新たな家族像を提示したのであるうか。結論をさきにいえばノーである。七種類の教科書のうち、入手できた五種類をみてみよう。

戦後の家族は核家族・小家族という近代家族であったが、

家族構成に祖父母が加わり、「直系」（三世代）家族が登場したものが二種類あったのは特筆に値するだろう。

さて、文部省著作『家庭』中学校第一学年用は47年『家庭』の修正増補版である。この二つを比べると、いくつかの相違点に気づく。

まず、47年版の主語は、よくて、家庭科は男子も女子も学ぶことを促す表現がとられていたが、49年版では私で女子である。父とぼくは皿洗いや靴下のつくろいをしていたが、49年版では父の家事参加には触れず、七歳の弟は自分の片付けとうさぎの世話、私は母の手伝いである。母の余暇活動は手芸と読書で、47年版では自転車に乗り、散歩、読書、映画、展覧会を楽しむことになっていた。ここから、活動的な女性像は後退し、伝統的性別分業と女らしさが強化され、女子の家庭科が主張されているといえる。ただ話しあいについては、よりにいいいに書きこまれたが、それはもっと楽しい家庭をめざすものであった。

夕食のまどいは、ほんとうに楽しいひと時です。一日の出来事や自分自分の考えを話し合い、父母の注意も受けます。よい家庭にしようとするといろいろな不満が起りますが、それをそのままにしておかないで、それをなくする方法をみんなで考え合うことにしてあります。（3頁）

教育文化研究会『家庭』では、家庭建設の仕事には子ども

も責任をもって手伝い、従来強調された性別分業を反省して、男にもできることは男もするなど、共同と助け合いが家庭生活を築くことになる、また全家族の和は家庭の幸福の中心であり、この幸福を拡げて社会に分かち、よい社会の形成に役立てたいと記述している。

家族で畑仕事に精を出し働く喜びを知る、家事の分担、団欒など家庭の和樂、などをもりこんだ中等学校教科書株式会社編集向『明るい家庭』中学校第一年用。

中等教育研究会『中学家庭』第一年では、家族のものが健康で一心同体となつて暮らすことが、あかるい家庭のもとであると、家庭を乗り合い船にたとえて強調した。

これらの教科書をみていると、民法が改正されたからといって、家族関係のとらえ方にそれなりの変化があつたとは認めがたい。家庭科の二本柱であつた家庭の仕事と家族関係のうち、家事は分担、協力、主婦への偏在の是正などという形で具体的な改善の方向が記述されているのに対し、家族関係については、家族の「今日的」あり方をフィーリングでとらえているにすぎないといえそうだ。改正民法の男女平等、夫婦の協力、個人としての夫・妻などと、楽しい家庭、明るい家族とはどのような関係にあるのかというポイントがおさえられていないからである。それを明確にできなかったのは家庭科にたずさわった人々の限界だったのだろうか、社会

全体の限界だったのだろうか。あるいは占領政策の「逆コース」に歩調をあわせたのであろうか。

ただ、北信教科用図書研究会編『中学家庭』では、つぎのような文を認めることができ、唯一特異である。

これからの日本は、家族全体が責任を持ち、積極的に協力して明かるい家庭を作るようにつとめねばならない。本当の民主主義日本の建設は家庭生活の民主化から……。毎土曜日には家族会議を開いて……家の仕事が進められている。また（父）も掃除、まきわり等何でも家庭内の仕事に協力して……。 （二学年用1頁）

家族会議を開いて家庭の仕事の分担を決めているのは他の教科書でも同様だが、その要点は家事の主婦偏在の是正と協力による楽しい家庭づくりだった。が、本書は家庭生活の民主化の一方法と位置づけている点が類例をみないのである。

憲法が変わったから、わたくしたちは新しい責任や家族の間がらについて研究したいと思う。……女子が社会的に働く機会を多くする事とあいまって、男子も家庭生活に対してより協力し、……新日本の家庭をたのしく建設していきたいものである。 （三学年用75頁）

民主主義、新憲法をふまえた男女の新しいあり方、家族のあり方をとらえようとしていることがわかる。この時代のキイ・チームを使って家族を描いた点で、社会科など他教科と共通の土俵に立ち、しかも、しつけ的な内容とはならない教科書があつたことを深く記憶にとどめたいものである。

「障害」を とらえなおして



(カット 井田裕子)

大学生たちと歩く 小沢牧子

難聴のYさん、盲のKさん、Yさん、重い脳性まひのAくん、車椅子を使う人びと……。W大学は、他大学に比べて「障害学生」が多く学んでいるところだ。小さなこの大学には、障害者用の特別な設備が、ほとんどといっていいほどない。エレベーターも特設されているわけではなく、手助けが必要な人があれば、たまたま周りにいる人たちが手を貸して階段をあがるという具合だ。なぜなら、「障害者用」に用意された空間は、人の居場所を分けることにつながってゆくからだ。障害者用設備について、大学のなかでは、その設置の是否をめぐる常に議論がある。しかし教員・学生ともどもの活

発な議論をかかえながら、「できるだけ人を分けない」という方針がずっと貫かれてきた。その姿勢に、私は全く共感している。「障害」をもつ彼女たちからいかに多くのことを学んだか、言いつくすことができない。

非常勤講師として、このW大学ではじめて講義を持ったのは、もう十数年前のことになる。その頃には今よりもっと多くの「障害学生」たちがいた。その最初の日の場面を、今でも鮮明に覚えている。それは、脳性まひをもつAくんとの出会うことだ。

ゼミの蓋あけの日、新顔教員の私は、自己紹介をしたあと、学生たちにひとりずつ話をしてもらった。なぜこのゼミを取ろうと思ったか、そしてこのゼミで何を学びたいと考えているかを。Aくんの番になった。聴きとれない。名前を言っている、とはわかるのだが、脳性まひをもつ人とのつきあいをそれまで持てなかった私には、残念なことに、彼の名前からして聴きとれないのだ。「○○です」「ごめんなさい、もう一度言ってください」何度もそれを繰り返す。聴きとれるまでに何分かかったのだらう。とまどいで汗がにじんでくる。まわりの学生たちはほとんどAくんの友人たちだから、当然彼をよく知っているのだが、代弁したり通訳する人は誰もいない。みな当たり前の顔で黙って待っている。一瞬、(どうして?)と私は思った。どうして誰も助けしてくれないんだろ

う?と。私が「分かって」いなかったのだ、と深く悟るのはあとのことだ。Aくんは私に対して話しているのだから、「通訳」する筋合ではない。それはまさに無礼なことなのだから。

そのAくんと、三カ月後に私は電話で話すことができるようにすらなっている。慣れるとは大きなことだ。というよりも、慣れないこと、つまりつき合うチャンスがないというところがいかに大きな問題であるかに気づく。Aくんの友人である学生たちと同じように、私もいつのまにかAくんと当たり前前に話せるようになっていった。もちろん一度で聴きとれなくて聞き返すことはたびたびある。それでもそんなありようが、Aくんと私との自然なつき合いの姿なのだ。最初に「通訳」などしてもらっていたら、なんと非礼で歪んだ関係が生じていたことだろう。

「障害」とは、個人の問題なのではなく、関係の問題をさすのだとはつきり知ったのは、Aくんを通してである。人の居どころを分け、つき合いを浅くするところに「障害」概念はつくられ、やがて固定される。一方、つき合いを深めるなかで、「障害」イメージはその人個人のイメージとして溶けてゆき、消えてゆく。言語障害の重いAくん、ではなく、ただのAくんになってゆくとき、つき合いなじむ、ということの、力の豊かさと思う。

盲学生のKさんやSさんのことも忘れられない。黒板に板

書をしながら、うっかり「ここ、このところに」とか、「そこに書いてある通り」を連発しようものなら、「指示語を使わないで下さい」という言葉がとんでくる。指示語は、目の見える人による、ひとりよがりの言葉なのだ。また、マイクで口をふさいでしまつては、聾や難聴の人が困る。読唇をしているからだ。目を使わない人、耳を使わない人と同じ場にいっしょに居ると意識し振るまうことで、狭く固められた自分がひらかれ広がってゆくのがうれしい。

ドアを押して出入りするとき、自分だけのことを考えて歩くのではなく、うしろから誰かくるかどうか振り返る習性も、いつのまにか自分のものになった。車椅子や補助杖を使う人が来るかもしれない。

盲学生のひとりSさんは、あるとき私の手をさわって、「こーうやってさわると、どの位の背丈の、どんな感じの人かってわかるんですよ」と言った。触れあうことで、たくさんのメッセージが伝わりあうのだな、とまたひとつ世界が広げられる思いがした。「おはよう」とSさんに手をあずけるのはいい感じだった。

正常とか異常、健常とか障害という、私の中の固定的な枠組をゆるやかに溶かし、自然な世界を広げることの確かさ安らかさを伝えてくれた彼ら彼女たちの姿やことばは、いつもあたたかく、そしてなつかしい。

男性学への契機

魔男の宅急便

体が快わ

樹 泰 橋 諸

学問は、というと大上段になるが、ぼくは学問や研究・発見の意義は、社会発展や進歩のためだけでなく、むしろ、いま・この自明視しているありようを、別の角度から照射し直し相対化し、これまで拘束されていたありようについて覚醒し自己反省しそこから解放される知的営為にあるのではないかと思っている。従ってそこでは、ぼくたちが当然と信じている発展や発達も一元的なものの方・考え方であることに気づかされることがあるだろう。他の多くのものの見方・考え方の枠組があり、それらはみな等価値であると感じづけば、「らしさ」や「能力」や「他の人と違う」ことなどに苦しまなくて済むようになる。

広く人びとに受容されている、当面のものの見方・考え方の枠組みを、パラダイムと呼ぶ。今でこそ明らかにになった

が、ぼくたちが「可愛い」と思い「所有」の対象とし、小さな服を着せて学校に行くべき存在、と思い込んでばからない「子ども」（というイメージ）は、たかだか三〜四百年前に形成されたにすぎない。従って、「母性本能」も同時期に作られたイデオロギー的側面が強い。現在ぼくたちが自明視している子ども観・母性観のパラダイムは、歴史の一断面なのだ。「国際化」と称しつつ今でも多くの日本人は知らないが、欧米圏では虹は六色とされている。地球上の半数以上の国が（法的には）一夫多妻制である。ソ連の「女の仕事」といえば医師とバスの運転手である。このようにパラダイムは其時代（同時代）にみても文化によって異なる。こういった知見により、唯一と思ひ込んで疑わなかった我われの世界観を相対化し、いま・このありようを対象化する契機を与える学問の一つに、女（男）性学はある。女性学は現在人間（MEN）観や歴史（history）が「真理」などではないことを知らしめてくれた。まだまだマイナーではあるけれども。

男性にこそ向けて語られるべき女性学の視座からの男性学について考える時、男たちが自明のものと考えている性差、つまり男女の性差の根拠とされる生物学的決定論とそこから導き出される社会的な性役割、すなわち分業観（「女の仕事」「母性」と階級観（「女は一段低い」）を、どのようにしてつ

きくずすが、大きな課題となる。だが、男たちは、現在手中にしている自身の権益を守るため、社会的な性差が無根拠なこと、前提としている生物学的根拠と社会的役割とのすぐれて文化的・政治的な関係など、自らを解体しかねぬ指摘に対して、素直に耳を傾けようとするだろうか？

「子ども一一〇番」の安達倭雅子さんは、「思春期の性と母性」(『こころの科学』30号)の中で、高校生(女子)からの妊娠の心配を相談してくる電話でのやりとり例について書いている。女子高生は妊娠しているかどうかで電話で判ると思っており(一)、月経の始まった日の記録はとっていないのかとの質問に驚くぐらいだから、「最終月経」という言葉についても知らない。避妊はどうしたのと訊くと、「エーッ、そんなの知らない」という。《——知らないって、自分のことよ。あなたのするあなたの性行為なのよ。／「いやだア、オバサン、イヤラシイ！ あなたの性行為だなんて、私、関係ないよ。彼がしたんだよ、私、なんにもしないよ」》

安達さんもここで「絶句」するわけだが、ぼくもこれを読んで、やり場のない怒りに身が震えた。

安達さんは《これではまるで、自分のからだも自分の性も、自分のものというより、はつきり言って人のもの、人からのお預りものではないか。さもなくばギフトボックスではないか》と嘆く。女性の身体が男性への「ギフトボックス」

になっている^{たと}えで、しかしぼくは怒るべきはこの無知で無邪気な女子高生だけでなく、相手の男の身体感のなさをこそ怒るべきではないかと感じた。相手の男は「する」(一人で行ろ！)側で女は「なんにもしない」側というのに、女性に対してだけ「自分の体でしょ」と訓戒をたれても説得力はないのかもしれない。女性の側が「する」主体にでもならぬ限り自分の身体というリアリティが持てず、「ギフトボックス」で当面あり続けるならば(We 4月号での高校生たちのエピソードなどを読んでいるとその気が強くする)、プレゼント(一)をもらう男性側の身体感(あるいは身体感のなさ)を、しかも男性が強く批判していく必要があるだろう。

だが、同性の悪魔いや魔男であるぼくにも、彼らに届けるべき言葉が見つからない。緊急に宅配しなければならぬのだが、言葉や思いは空しく迷い、いつも宛先人不在、いな不明で戻ってきてしまうのだ。つまりこちら側の住所の書き方が悪いのだ。女性に対してはあらゆる身体的存在そのものが「母たりうるもの」(「母性」)の条件を規範とし、男性に対しては「父たりうるもの」ではなく自身の身体の快感と欲望のコントロールにその規範を置かせるような、男女使い分けの規準(ダブルスタンダード)が、彼らに届かない原因のひとつだろう。既存権益を手離したくない彼らには、だから「男向けの論理」も実は効力を持たないのではないかと思う。

さまざまな人工の衣料に倦んだ私たちの肌が、ふとなつかしむのは木綿の肌ざわり、生きた、綿の実からつむぎだされた繊維だからだろうか。あの素朴な感触。

木綿が日本に普及する歴史は意外に新しく、室町以降

で、それまではフジ、コウゾ、麻などが主に使われていたのが、朝鮮との貿易で綿織物が大量にもたらされるようになったのがきっかけで木綿が広く使われるようになったという。

李進熙氏著『日本文化と朝鮮』（NHKブックス）に引用された文章によると、十五世紀の中頃には一年間に二百隻近い日本の貿易船が幾万斤という銅を積んで朝鮮の港にいき、帰りに数百匹から十数万匹（一匹は三十五尺）の綿織物をもつて帰ってきたという。「こうして大量に輸入された綿織物は、主として上層の公家や武士のあいだに広まり「ヘモンメン」とか「ソウメン」などの名で、高級な衣料として珍重された」

この木綿の原料、綿の種子を朝鮮にもたらし、衣生活上の革命をなしたとげた功労者は、文益漸（モン・イソム）という人である。文益漸は十四世紀、高麗時代末期の人。文官として、当時高麗を支配していた中国の元王朝に派遣された。彼はその地で、インドから中国に渡ってまだ日も浅い綿が栽培されているのを見た。若いころ父に従って農業をやった体験は、彼のその観察を通り一遍のものに終らせはしなかった。

私の朝鮮史

岡 百合子



その頃高麗は、恭愍王（コンミン）という王のもと、元の支配を脱して自立しようとしていた。文益漸はその対立にまきこまれ、心ならずも逆臣の汚名をうけることになる。帰国すれば死罪になるかもしれない危険を冒して、しかし文益漸は祖国高麗に戻った。その荷物の中には、十粒の綿の種をしのばせた筆の軸が一本入っていた。彼は、もただし禁止のこの綿を、祖国で栽培したいという思いにかられたのである。

死罪をまぬがれた文益漸は、故郷、慶尚南道の村に戻り、舅の鄭天益（チン・テングン）とともに十粒の綿の種をまいた。その中の一粒が育ち、それをもとに綿の栽培がはじめられたという。

苦労はつづき、綿花から種をのぞき糸をつむぐ方法を見つけたすのにも数々の工夫を要した。かくして朝鮮に綿織物が普及することになり、その恩恵が日本にも及んだのである。

しかし十九世紀末、日本は大量の綿織物の輸出で朝鮮の市場を独占する。それはあたかも、インド原産の綿の織物を産業革命により逆輸出し、インドの綿工業を潰滅させたイギリスの姿を思わせるものであった。

食べもの文化史

暮らしと食事 その1

石川 尚子

子供が小学校に通っていた十年間、うまい具合に気のあったPTAの仲間と一緒に、毎年一冊ずつ絵本をつくり続けた。私たち自身が常にその知恵に感心しているこの土地の暮らし方を、子供たちに伝えてゆきたいと考えたからである。歴史やいい伝えなどを調べることから始まって、古からの聞き取りや、父母全員へのアンケートへと調査の範囲も広がり、

間らしく食生活を営む上で欠かせないのが、火と水と道具である。とくに火（加熱）は、食品の種類を増大させ、生活を安定させるのに大いに寄与した。いったい加熱調理はどんな形で始まったのだろうか。



資料 唐子小学校 PTA 読書部作成絵本一覧

年度	タイトル
1980年	ふるさとの話 からこ
1981年	ふるさとのおりおり
1982年	からこのくらし
1983年	からこのあそび
1984年	おてつだい
1985年	昔のおやつ
1986年	ことわざと しつけ
1987年	くらしの知恵、物のない時に
1988年	健康法いろいろ
1989年	子供たちへ、親からのメッセージ

家庭科の教師として、はかり知れないほどの教材研究をさせていただいた。それぞれのタイトルは、資料のとおりである。いづれも家庭科とはかわり方が深い、とくに食文化について、折にふれ紹介したいと思う。

前おきが長くなったが、調理について考える時、人

前述した絵本のうち、ふるさとの年中行事を取りあげた『ふるさとのおりおり』を引用してみると「松の内がすぎると子供たちだけの天神講があったんだよ。天神講では、いろんなあそびもしたけど、もちを持って行って、やいて食うのが楽しみだったなあ。もちは川原でやいた。流れ木をひろってきて、たき火にし、その中へ、そこらへんにある石を投げこんでおく。石があつくなったら、その上でもちをやいた」とあるように、素朴な子どもあそびのなかに、はるか大昔の人たちが行ったであろう石焼加熱法が伝えられているのである。暮らしを見直すことで、思いがけなく調理の原点に出会えたということだろうか。

「地域・家族」編集委員会

〈岩崎 美穂〉

私が「地域・家族」と名づけたミニコミを発行し始めてから、早いものでもう十二年もの歳月が経ちました。目的は、今も昔も変わらず、人が自分として自分の足で自分らしく生きるには何をどのようにしたら良いのか、という問いに応えることにあります。当然、私自身の軌跡もそこに表れ、「いい男」幻想の崩壊、離婚、三人の幼い娘と息子と共に始めたシングルマザーの暮らしが通底音をなしています。

私は、ミニコミの題名に「家族」という語を使っていますが、実は、家庭とか家族とかを耳にすると、反射的にイヤだなという感覚を持つ人間です。私が「家族」を問題にしたのは、女は未だ家族に埋め込まれており個人として解放されていないし、男にとり自明な家族こそ女を抑圧している元凶だと考えているからです。共同性とか共同体もきらいです。そこに必ずあるまやかしを、美辞麗句でおおい隠すやり方が性に合わないのです。「いい家族」幻想にも似たようなごまかしがあります。

そんなわけで、この間の特集は、「天皇モンダイ総力特集」「天皇制」も一緒に死んだら!」「天皇制葬送曲よ、高く鳴れ!」「性暴力」ときて、次は「女を喰う生殖技術」です。

連絡先 〒184 東京都小金井市東町4-135-7 第2小金

井ハイメント101

☎0423(85)1773

自己紹介するうけいけい

単身赴任裁判を通じて、企業社会、男女役割分業、家族のあり様を考えるとてもトレンドィな「養労会」

〈大石 喜恵〉

今や単身赴任者は十七万人といわれています。「転勤」はサラリーマンの宿命のように言われ、個人、家族の事情は利益優先の企業論理の前に押しつぶされています。川口晴男さんは転勤先の名古屋と自宅の川崎の間で金、月、来月の生活が続けて五年が経ちました。夫妻の訴え、一、夫婦が共に暮らす権利。二、子供が父と同居し養育を受ける権利。三、妻の働く権利はいずれも当り前のささやかなものです。しかし企業社会の現実はそのすらも許されず、男は過労死に到るまで仕事にかりたてられ、女は男とひとくくりにされ自立の道を奪われ：。「養労会」はあり様を強固にささえている男女の固定的役割分業を変えてゆくこと、個人や家族の暮らし方の自由が企業論理に対し尊重され、優先されること、何よりもそれらの活動等を通じて、裁判の勝利につなげることを目標としています。会員は団体、個人を合せ二八〇を数え、全国、老若、多種多様な職業の人々、女性が多いのが特徴です。毎月好評のニュースと切抜帳を発行、集会、イベントも行います。裁判も重要な争点へと入ってきました。誰もが人間らしく、のびやかに生きるために、「養労会」へどうぞ。五月十九日(土)市ヶ谷YMC Aにて集会。講演、歌、にわか芝居あり。

連絡先 〒211 神奈川県川崎市中原区丸子通り1-1338

朝日多摩川・マシオン204

☎044(422)1490

湯沢静江

指導の工夫 その2

生活指導で世話になった先生の授業を受けようというのには、ずい分辛い決心をしたのだらうと、こちらの方がせつなくなる思いだったが、A君にはどうして「食物」を選択をしたのか聞くこともなしに終った。しかし、三年での彼の学び方は、かつてカンニングをしなくてはならないほどオドオドしたところは微塵もなく、みごとという他はなかった。どちらかというと実習より理論の方が得意らしく、ペーパーテストなどは常に高得点を維持していた。それがまた彼にとつては大きな自信になっていたようだ。私の経験からすると、カンニングをする生徒は、はじめで学習意欲もあり、成績の結果を気にするタイプで、逆に成績は最近でも単位さえ認めてもらえばいいと授業もテストも投げやりに受けている生徒は、カンニングなどしないことが多い。テストの空欄を埋める気もなくなる

と、机の上にガバツと伏せて睡眠をむさぼるだけである。その後A君は調理師の資格をとるための専門学校へ進学したように思うが、このような生徒との出会いは、私自身を変革させていくきっかけになっていた。

既成概念で生徒を見ないこと、その時々のお出あい、人間と人間のふれあいを基調にすること、極力よいところを引き出しながらかつながりを持ち続けること、少しきざだが真そこ生徒にほれ込むことが、授業以前の私どもの姿勢に必要なのではないかと考えるようになっていった。とは言っても、多くの生徒との接触のなかには、おたがいのボタンのかけちがいになることもあるし、波長のあわないこともあったが、そのような時でも、私はつとめて感情で処理しないようにしたつもりである。

生徒と同じ目の高さでつきあいながら、なおかつ目標をひきさげずに引っぱっていくのは至難の業で、とうてい私などの力の及ぶところではないが、授業以前のそんなささやかなこちら側の努力が、授業そのものの不備なところをカバーすることもあったようだ。いわばからめ手の攻め方である。授業としては正攻法ではないが、一たん生徒とのよい関係ができると、不思議にあとはついてくるものである。今の生徒は、先生だから無条件で尊敬するなどということはない。むしろ石を投げたあとの教師の反応を見ながら、彼等の動物的なまでの嗅覚で評価をする。

19歳の日記

金森土岐

「卒業」という名の

卒業という名の岐れ

誰もが人生の分岐点に立ち

誰もが道しるべのない路の前で

悩み、とまどい、立ち止まり、

自分の進むべき道を探し出す

歩み出す

卒業という名の岐れ

岐れは淋しく辛いけれど

卒業して失うものなど

私達には何ひとつないのだ

この三年間の上に立ち

この三年間で見つけたもの、

掴んだもの、感じたもの

皆の心のだ真ん中に

自由の森は存在するのだろう

卒業という名の岐れ

今、私は自分を信じて

自分の足で歩き出そう

自信を持つことは

難しいことではない

ただ信じていればいいのだ

自分の心を信じていればいいのだ

ひとを愛すること

自分を愛すること

胸を張って歩き出すことができる今

誰も彼もがまぶしくて仕方ない

涙と笑顔と優しい心であふれていた

あの卒業式を

私は永遠に忘れない

花束をくれた人

手紙をくれた人

送り出される淋しさを

生まれて初めて味わったけど

孤独感など微塵もない

どんな時でも私は独りじゃない

色んな場所に仲間がいる

私の愛する人がいる

私を愛してくれる人がいる

卒業という名の岐れ

卒業という名の旅立ち

さあ、歩き出そう

自由の森の生徒であったことを

自由の森で生きてきたことを誇りに

胸を張って、堂々と……

大今さんとの出会い (1)

「箕面忠魂碑違憲訴訟を支援する会」の学習会で知り合った人に、大今歩さんと大今紀子さんがいます。『We』誌でも何回か登場したので、知っている人も多いと思いますが、「教え子を妊娠させたい」という理由で、停職処分を受けた府立高校教員の歩さんと妻の紀子さんのことです。(紀子さんの、日米の学校を比較した体験談が、『We』'88年五月号にあります)

池高大今処分と呼ばれる事件は、当時大阪府立池田高校の教員であった大今歩さんが、文化クラブ等(差別問題研究会)を通じて知り合った生徒の三宅紀子さんと、お互いの人格を認め合い、愛しあい、結婚して子供ができたことを、「教師としてあるまじき行為」として停職三カ月の処分にしたものです。二人の結婚は紀子さんの卒業後のことであり、出産もふくめて、両親も、同僚、友人も祝福したことでした。ところが、紀子さんが妊娠したのが在校中であつたことから、教師の非行として、歩さんがその地位を利用してさも女性徒をだましたかのような、デッチあげの攻撃をし

広がる運動

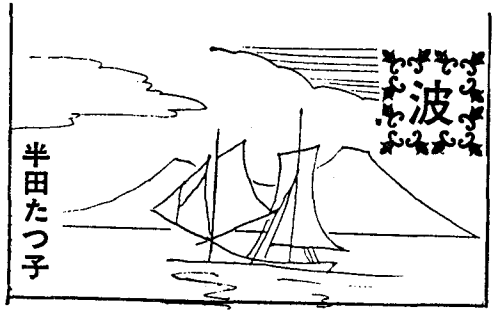
■中村英之 広がる人の輪

たのです。

歩さんを処分した府教委をはじめ、興味本位のマスコミ等、それらの姿勢は、当事者である紀子さんの意志を全く無視したものであり、ただ一組の男女がその立場を越えて対等に向き合おうとする生き方を真つ向から否定したものでした。大今さんらやその友人たちは、不当処分として処分撤回の運動を続け、今に至ります。

ぼくは、最初大今さんらに出会ったとき、そのような運動を知らず、先に人間として大今歩さん、大今紀子さんを知ることとなりました。というのは、彼らはぼくにたいして、自分たちがそんなしんどい運動をしているからぜひ支援をといった押し付けがましさはつゆ見せず、ただたんと、学習会での自分たちの課題を話されていたからでした。学習会の中でもお互いを「歩さん」、「紀子さん」と呼び合い、夫婦で来ているんだという雰囲気は全くなく、ごく自然に「忠魂碑訴訟」への支援から来ているんだという感じを受けたものでしたし、歩さんの戦争を中心とする近・現代史への造詣の深さも、ぼくを感嘆させたのでした。

「家族・家庭」



半田たつ子

美作の国、津山の城址にらんまんの桜、高い石垣の上でお弁当を開いた日、あれから半月の余しか経っていない。急ぎ足の春は、空に突出した赤ん坊のこぶしのような藤のつばみを艶やかな紫の花房にして垂らし、ピンクの濃淡のつじを鮮やかに開花させた。君子蘭、ヒヤシンス、水仙、デイジー、チューリップ、あやめ……夫の丹精になる草花が、小さな庭に今年は一斉に咲き競う。

二か月近く通院・加療中の夫を氣遣いながら、三月末の全国教研に出かけた。三月三十

日夜の電話で、悪化を知り、最後まで参加できないことを皆さんに詫びて帰京した。

教研では、討議の重要な柱に「家族・家庭をどうとらえるか」があった。「欠損家庭」という言葉への異議申し立ても活発だった。

ところが、理念として理解しながら、教師を手こずらせる生徒に「家庭のしつけができていない」「基本的生活習慣がついていない」など、すらすらと言ってしまふ。家庭科は、教師の理念が本物かどうかを試す教科だ。

私も家庭科教師のころ「家庭の機能」を取りあげるのは、苦手だった。教科書の文章は読み上げるのも恥ずかしい紋きり型。むしろ文学作品を教材とするほうが、楽しかった。

特に生まれる、育つ、交わる、病む、老いる、死ぬ……などの問題は、文学の助けも借りなければ、本質に迫れない。

妹が、高校の現場にいた頃、こんなことを話したことがある。「校則違反を重ねる生徒を処分する会議で、ほとんどの教師が『もう面倒みきれない』と退学に決定しかけた。ふつと一人が『でも、この生徒は、何故こうも次々と違反を繰り返すのだろう?』と呟いた。ホント、私たちは誰も彼の気持ちを聞いていない。それなのに、一方的に彼を弾き出

して良いのだろうか? はっとして『カウ

セリングというより、彼の気持ちをじっくりと聴きたい』と謹慎中の彼の訪問を申し出た。

もちろん、彼の心に、家庭の事情が影を落

としてはいる。しかし、家庭だけが原因なのだろうか? 原因など、本人だってよく分かっているのではない。たとえ分かったとしても、簡単に修復できるはずがない。かたくなにカラを閉ざした彼が、ボツリボツリと単語で語り出した時、私は、聴きながら言葉を添え、補うだけの手伝いをした。自己を客観視できた時、彼は目覚ましい変貌を遂げた。たった五回の訪問で。『もう大丈夫、学校にもどれるように、会議で頑張るわ』という私を、玄關に送って、彼は『先生、学校って、勉強を教えるだけのところじゃなかったんだね』と言った。こんなに素晴らしい子を、私たちは放り出そうとしていたんだ!。妹は、彼とのコミュニケーションで、深く深く学んだという。彼の思いを聴かなかったのは、家族も教師も同じだ。『家庭がなっていないから』『あの親にしてこの子あり』と涼しい顔の教師達……。もし、生徒の一人一人に、それほど深い付き合いはできないというなら、せめて、平然と家庭のせいにするこだけはやめよう!

人間は何故、家族と共に暮らすのだろうか。

何故、家族から離れたがるのだろうか。人間は何故、異性を求めるのだろうか。結婚は何故、制度として成立したのだろうか。結婚した人が何故、離婚するのだろうか。愛し、憎み、支え合い、傷付け合い、矛盾をいっばいかかえながら、でも、人と人との間に、自分の位置を安定させたい人間、独りぼっちでは生きられない社会的存在としての人間、それを見つめることなく、家族や家庭が語れるのか？

教研で、私は干刈あがたの『黄色い髪』について語った。学校に行けなくなった夏美に母の史子が「中二の二期のテストは、内申に響くって言うわ。行きなさい」と促す。

「出ていってよう！ あんたが出て行かないなら私が出ていく！」と家を飛出した夏美。一晚、原宿で過ごし、疲れ果ててとうとうとした時「アオ狩りよ！ 逃げて！」と叩き起こされる。夜明けの町を走って千駄ヶ谷の駅にたどりつき、一番電車を待って、自分の家の最寄り駅の切符を買ってしまう。ともかく電車に乗込んで夏美は考える。「私は家には帰れない。何故か。学校には行かないと心に決めた。家は今、学校と同じになってしまった。学校に行けない私が、学校と同じになってし

まった家に帰れるわけがないではないか。でも、疲れてひどく眠い。今、安心して、ぐっすり眠れる場所、それは、とりあえず私の家の、私の部屋のあのベッドの上しかない。こうして夏美は、家に帰って来る……。

十六年前に出た曽野綾子の『虚構の家』。絵に描いたように幸福な家庭の少年が、登校拒否を始め、遂に首をくくる。若い医師が少年の父に言う。「お宅は、しあわせ過ぎたのではないのですか」「問題がないということ、かなり、大きな問題だったかも知れませんがね」。

こんな象徴的な場面や、本質を突く言葉と共に「家庭って何だろう？」と生徒たちと語りあえたら楽しいだろう。生徒たちの発言に、目から鱗の落ちる思いも持つに違いない。様々な試行錯誤を重ねながら、家族が変遷してきたこと、今もなお人間は、納得できる生き方を求めつつけて、新しい家族像を探っていること。伝統的な家族のありように対して、今提起されている疑問、始まっている試みも、知らせたい。

家庭が人間の生活の場としてふさわしいとしたら、何故なのだろう。ある時はひとりぐらしに憧れるのに、共に食べ物を分かち、喜

怒哀楽を共にする相手を求めるのは、何故？
こんなことも話したい。

とつおいつ考えながら帰り着いた東京。既に桜は散りしき、玄関に「十一時半、救急車にて入院」、夫の大きな字が、待っていた。

何人の方が、結婚した長女が近くに住み次女がアメリカから帰っていることを「せめて良かったわねえ」と言う。もちろん私も、たった一人で、この局面に立ち向かうことを想像すると、身が震える。光が、今まで見えなかった家族の新しい側面を照らし出す。苦しみ・悲しみを共にすることによってのみ、人間の絆は強固になるのかもしれない。

テレビ「生と死をみつめる目」で、五木寛之と鎌田東二の対談があった。二十一世紀の展望は、生命観・人間観の変革なしにはできないことが、誰の目にも明らかで、青・壮年は、幼年と老年の持つ力から学ばなければならぬ。誕生したばかりの赤ん坊や遺体に触れる機会をどんどん奪われている現代だからこそ、と深い内容だった。家庭に刻々と生まれる全ドラマを、引き受けて生きる中で培った生命観・人間観こそ、新しい地平を切り拓くということ……これは、生徒へのメッセージというより、私自身へのエールなのだ。

泉

☆☆☆☆☆☆☆☆

この頁はあなたと
私の情報交換の場
小さなスペースで
すが、ご利用くだ
さい。

◆最新スウェーデンレポート／ビデオ「スウ

エーデンの結婚・家族——変わる男女の
絆」

経済的自立をはたした女性・男性も問われ
る家事能力。同棲カップル (SAMBÖ) の増
加。新しい結婚のスタイル。男女が互いの
びやかに生きられる社会の仕組みとは？ い
い男女関係のありようは？

。企画／映像出版研究会 監修／善積京子
撮影／小泉直子

。カラー 五十分 (二部構成) 定価 一万二
千円 (消費税別)

。問合先 ウイメンズブックストア松香堂書
店 (〒602 京都市上京区下立売通西洞院西
入) ☎・FAX 075-411-6905

◆一人芝居「天の魚」

’89年夏季フォーラム熊本で好評を博した砂

田明さんの一人芝居「天の魚」。上演五百回
記念の東京特別鑑賞会へのご案内。

。日時 六月二十三日(土) p.m.六時開場

。場所 銕仙会能楽研修所(地下鉄・表参道
下車・A4出口)

。会費 五千元

なお、ご来会の方に砂田さんの乙女塚勸進
十年の記録を含む「砂田明の水俣報告(5)——
アメドリの還る日」を贈呈。

。問合先 東京不知火座「天の魚」特別鑑賞
会事務局(東京都杉並区高円寺南五—二十
一—五—六〇八 宮本方 ☎03-314-0882)

◆「人間と性」教育研究協議会・夏期セミナ ーのご案内

「性教育の重要性が叫ばれながら、なかなか
実践にふみこめない現状の中で、実践を主体
にすえた当セミナーは、わが国の性教育の前
進に大きな貢献をなすものと自負しておりま
す」(チラシより抜粋)

。日時 七月三十日(月) p.m.一時～八月一日
水 一時

。会場 岐阜市・岐阜市民会館他。
。内容 記念講演—斉藤茂男 パネルディス
カッション「いま、子どもと時代のニーズ

とは何か」—河野美代子、竹内幸延、宮垣
一栄、田中良、河村たか子 司会・山本直
英。理論講座—村瀬幸浩、山本直英。他に
横擬授業、分科会、演劇など。

。費用 参加費七千四百円(会費六千四百円)
宿泊費 一泊二食 一万円

。問合先 〒229 相模原市西大沼一—六—十
八—二〇五 ☎027-51-4635 宮脇美加

◆「ラム福祉・教育振興協会」発足のお知らせ

ラム中は、’87年十月、神戸で始まった新し
いイメージの学校設立運動です。現状にいら
だち、絶望し締めかけていた人々が、ひとま
かせにせず、批判だけにとどまらず、自分た
ちで創造していこうと、設立委員、賛同者を
募っています。

今回、ラム中の建設資金集めを、より一層
豊かにする別組織「ラム福祉・教育振興協会」
を作ります。今、火にかけて沸とうしたら、
平らな場所に置くだけで料理ができる、省エ
ネ鍋「はかせ鍋」の販売をしています。大—
一万八千円、中—一万五千円。協会の発足の
お知らせと共に、「はかせ鍋」の販売にご協
力を。

。問合先 神戸愛隣教会内ちびくろ保育園

(神戸市兵庫区須佐野通一―一七

☎078-661-6151)

◆おーい！ 老い「女性の自立と老人介護」

老人問題Ⅱ女性問題といわれるのはなぜでしょう。その理由を解きほぐし、どういうライフスタイルをつくってゆけばよいのか。また行政にどうサービスを要求したら良いの

か、共に考えましょう。

。お話 「女性の自立と老人介護」 沖藤典子

。日時 五月十九日(土) p.m.一時半〜五時

。場所 阿佐ヶ谷地域区民センター 第4・

5集会室

。会費 五百円(託児所あり・要予約)

。問合先 おーい！ 老い 5・19集会実行

委員会 ☎166 杉並区阿佐谷南2―19―11

―101 ☎03-338-5860)

国』(農文協)と、世評高い話題の書の著者。

子どもの頃は内気で泣き虫。泣かされると血相かえてやってきて、「千枝子を泣かしたのはどなたでございますか」と級友たちを詰問したという姉上が、先頃横浜市長選で革新候補として善戦された、黒川万代さん。

武道も教練もないリベラルな山の手の私立校から広島県の県立の女学校へ。昨日まで当たりまえと思っていた行為を非国民といわれ、好きな読書まで悪いことと言われ、世の中でよいと言われていることが不変のものでないなら、自分がよいと思ったことをやり通そうと心に決める。

原爆投下の日、体調を崩し勤労奉仕を休んだ故に、死を免れる。級友たちの悲惨な死と、

◆北欧社会福祉施設視察ツアー参加者募集

「年を重ねた人々とどんな関係をつくっていくのか、老後をどう生きるのか、国の制度的な保障のあり方など、北欧の人々から学びたいことがたくさんあります」(チラシより)

。日時 八月十六日〜二十五日の十日間

。費用 六十四万八千円(募集 三十五名)

。問合先 ☎861-46 上益城郡甲佐町田口四

三二五 ☎096-234-0721 立山ちん子

生き残ったことへの負い目。が、一方、敗戦によって、ほとぼしりするような解放感があ

った。コース、お芝居、読書、新聞づくり、と、水を得たように活躍。大学は露文学専攻。血のメーデー事件の頃で、キャンパスは騒然としていた。毎日新聞入社。社会部から学芸部へ。労組の婦人部長も勤めたが、夫の転勤で退職。渡米し六年半滞在。帰国後は日本の学校の様子に驚き、PTAの民主化運動を。

ルールモントフの「帆」という詩にひかれる。「狂える船は嵐を乞ふなり。あはれ嵐に安らひありとや」の一節に自分の来しかたを重ね思わず苦笑することもあるという。ゆったりと流れる大河のように、底知れぬパワーを秘めながらゆるぎなく温かいひと。(稲邑)

ひと



関 千恵子 さん



今月の『ひと』は、We夏季フォーラムのシンポジウム『アジア・こども・人権』でコーディネーターをしてくださることになっている。「全国婦人新聞」編集長の関千枝子さん。原爆で亡くなった級友への鎮魂の書『広島第二県女二年西組』(筑摩書房)、豊かな繁栄の陰の福祉の貧困を、母子家庭の実態を追跡する中から明らかにした『この国は恐ろしい

好きです!新男類

———'90年代は女男共生の時代



庫も大阪もなくなってしまう(面々の総結集で、本当に楽しい会になりました。

中村英之さんの司会は絶妙で、その上、三人の方の話もそれぞれに楽しく、時には爆笑が起り、終始、肩の凝らない雰囲気の中に終わりました。この三人の新男類の生き方の話を簡単にまとめてみました。

●佐竹隆幸さん(結婚改姓を考える会)

大学の助手をしているという佐竹さん。別姓結婚(事実婚)に至るまでの過程を、自身の生い立ちから話されました。即ち大商家に生まれた

を経過しているという。

共同生活のあり方も、興味深く聞きました。あくまでも、家制度につながる慣習を断ち切って、平等な共同生活をしようとしても、二人の周囲には、夫の役割、妻の役割を要求する生活があり、理論的に割り切れない。そのうち、佐竹さんの入院生活があり、パートナーの献身的な看護の後、二人の関係は大危機を迎えた。

それは、パートナーに依存する度合が強くなったこと。二人の間には精神的なつながり以外、何のかせもない。完全に、「ギブとテイク」の努力で成り立っているといってもよい。だから互いにいたわり、思いやり、考え合う生活の努力をすることによって真に信頼し、尊敬する関係が生まれて、危機をのり越えたという。

「結婚改姓の会」が掲げる、三つの自立、(生活、社会、精神)のうち、精神的な自立への努力がより重要であると強調された。

●梶田淳平さん(関西育時連)

結婚四年目の若いお父さん。おつれあいと二歳半の女の子と一家全員の参加でした。

家事経験の少ない梶田さんだったが、おつれあいと学生時代知り合って、平等な家庭を

三月二十五日の日曜日、神戸の桜は満開に近く、行楽日和の上天気。

ここ六甲学生青年センターは、異様な(っ)熱気に包まれた午後になりました。

前日から泊りこんで準備をした仲間。当日朝から、集まった関西Weの会(いつの間に兵

ちから話されました。即ち大商家に生まれたが、家族という絆が薄かったこと、高二の時、倒産して、一家が離散したなどの環境から、自立意識(本人は「すれた」と言っていた)が育ったのだらう。大学四年の時、ふられた女友達の友達との共同生活に入って七年

つくることを話し合い結婚生活に入った。

当然のことながら、家事能力の差に気づかされるが、二人の努力の経過が面白く話された。特に梶田さんは技術系の会社員。月二十数時間の残業は当たり前。それを除々に減らしていった。さらに、子どもが生まれるとますます減らさざるを得ない。

「結婚したメリットがない」「女房の尻にしかれてる」等の珍視(?)を受けながらも、へこたれず、茶化した対応で切り抜けていった。が、心の中では、いつか、声をあげる時を待っていた、という。

そのうち、職場の組合大会で、「男にも育児時間を！」の発言をするチャンスが来た。

そのことを、組合の新聞がとり上げたことが契機になって、職場での啓発になったのだろう。周囲の目が変わりつつあるようだ。

二年程前に、関西育時連の旗上げに参加したことが、ある新聞にとり上げられ、更に知れ渡るようになる。近い将来、民間企業でも男の育児時間がとれる礎石の役割をはたしておられると感じました。

●吉田明弘さん(大学・家政学専攻)
チャーリーこと、吉田さんは、We誌の「石けんコーサート通信」でおなじみの人。

昨年、園田学園という女子の中、高校で家庭科の教育実習をした。

このことについては、一月のWe兵庫の会でもとり上げ、報告がなされており、さらに彼の相棒の山本謙吉(ヤマケン)さんが、四月号で「生徒と教師のやりとり」という文を寄せているので、詳しい内容は省略します。

今まさに石けんコーサートの帰りという吉田さんは、ヤマケンのギター伴奏で「二人のくらし」という歌で登場し、楽しませてくれました。

この歌は、「一緒に語ろう、毎日のくらし一緒につくる毎日のくらし」という今日のテーマにぴったりマッチして、私もすぐにこのことばとメロディーを憶えました。

話も面白かったし、なにより、彼の若さと真摯な生き方に拍手を送り、これからも応援していきたいという思いを強くしました。

●ティータイムの後の話し合い

―意識の変革や家事分担について―

。女子に教えるのはやさしいが、成人男子のひな型ができている男子には難しいのではないかという質問に、吉田さんは、明石高校の家庭科選択の男子生徒に投げかけた時の経験では、打てば響くような反応を感じたという。

。男の仕事がフルタイム、女がパートタイムの場合、家事の分担は平等にならないことが多いということに対して、佐竹さんは、意識的に「家事はするんだ」という気持をもつことが必要と強調された。梶田さんのおつれあいが、育児で仕事を辞めて家におられた時も残業時間を減らしていった勇氣に敬服した。

また、参加者の中には、「ゲリラ的に休暇をとって、家事・育児に関わっている」等の発言があつて賛否両論のやりとりがあつた。

その後参加者の中でくらし方・生き方について様々の発言がありました。が、紙面がなくなり、申し訳ありません。

東は東京から、西は広島から、新幹線を使って参加してくださった仲間や、関西一円から馳せ参じてくださった皆さん、ありがとうございます。

「こんな気持のよい会は久しぶりで、会いたいなあとという男の人に何人も会えて、うれしかった」という若い男性の発言が今でも印象に残っています。

その後の交流会も、和室に座りきれない程の盛況で、メンバーの手作りの料理を食べ、時間も忘れるほどでした。後片付けの男性、ごろうさまでした。

(岩瀬志津子)

うお Weに
なんでも言なんでも聞



◆四月号は、読みごたえがありました。圧巻は田中裕一氏の新連載「荒野のバラ」でした。読み始めて、「美しい」としか表現できない文章の流麗さとリズム感に圧倒され、内容がつかめないまま読み進んでしまいました。そして、ため息がでました。感想を書きたいと思っても書けなかったのです。開き直って「恥」をかこうと思い、ペンを執ります。

「情性は感性を奪う」そして「あなたは何をしているのか」、田中さんから突きつけられる言葉の一つ一つが今の私には刃のように突きささります。ありがたいことにみちのくの春は今が盛りで、私は、今年の桜の花をじみじみと眺めながら、田中さんの文章を何度も何度も胸のうちに想いめぐらしています。

四月から出会う学生たち、高校までの「荒野」をなんとかくぐり抜けてきた彼らと、ま

と一緒に「自分探し」の旅に出ます。私の力不足でとてもじゃないけど、「花のカリキュラム」はたてられませんが、彼らもそして私自身も、場所により、時に応じ、私たちの心の在り様によって、様々な彩りを現すに違いありません。そして、その度ごとに、そこからの発見と創造があることでしょう。そうした彼らの語りかけを無心に聴ける私でありたいと思います。

「一生懸命もがけばもがくほど、人を深みに落としこむ学校」、「まるで泥沼のような学校」にあっても、「荒野に立つ足もとから、静かに、誠実に不動の教育を始めよう」と勇気を喚起させる呼び掛けに应えて、誠実に希望を語れる教師でありたいと願います。

Weの読者であることがこんなに幸せだと感じさせてくれる文章との出会いを、執筆者と編集部に感謝します。(福島・西内みなみ)

◆四月号の「波」を読みつつ、私の今居る場で、どうしたいのかと悶悶としています。「家庭科を男女共に学ぶ意義を理解してもらうには『家庭科とは何か』とともに『学校とは何か』を明らかにしなければならぬ」ホントにそうです。我が校は共学校ですけれど「男子学校長の旧態依然たる云々」は

蔓延しています。大学合格者数にふり回されて、学校で何を学ばせたいのかの共通認識を持つこともできていません。

この一年は、三年生の担任で「進路(学)指導」をしつつ、三人もの学校・人間関係を拒否する子をクラスにかかえて、向き合ってきて、やっぱり「学校で何やねん!」と叫びたくなりました。そして家庭科教師でよかった。Weの仲間でよかったとつくづく思いました。

家庭科って今の学校を変えていく大きな力になり得るのです。もっともっと力をつけたい。教科の本身がそのまま生活指導であり、学級運営であるような校内でのあり方をしたい。「学校」の中での家庭科の可能性を確認したい、元氣をつけたいです。

また先日、善積京子さんのビデオを見て、効果的・魅力的な教材開発の必要性を強く感じました。その教材をどう使うか、どんな授業を創るかとセットで、よい教材作りにも組みたいと思っています。話したいこと、聞きたいこと、取組みたいことがいっぱいあります。時間が足りない、ゆとりがない、体力がない、仲間が欲しいと、悶悶としています。

それに、先日官制研で、共学が成立したか

「将来構想委員会」も存続の必要がないのでは……などという発言を聞き、怒り心頭に達し、立候補して委員になりました（今まで抽選とか順番とかで決まっていた）。

ホントに「何いうてるねん!!」です。この状況で多数の家庭科教師とどうつきあっていったらいいのか、他府県ではどうなのか、聞きたいです。

(M・M)

◆四月号について、Weの読者にも、私が以前書いたテーマの真意はなかなか伝わっていない、文章がまずかったからかも知れないがやはりこういう問題をわかってもらうのは、ミニコミでも難しい。ましてやマスコミはもっと難しいな、と思いました。

私は別に、結婚制度を今すぐ廃止しようとか、主張しているのではなく、結婚主義の人が、結婚以外の生き方の人を批判するのに反対しているのです。

例えば28ページ、県立高校K・Kさんの、K子の妊娠の件についても、結婚と中絶の他に「結婚するかどうかは後でゆっくり考えるとして、とりあえず子供は生む」という選択肢は考えられなかったか（非婚で子どもを生むのは、文句なしに絶対悪いというのが、教育現場でも常識なのか）。

都立高校の蔵本さんの文章についても、松田聖子が教材になるのに、なぜ万田久子や沢田亜矢子は教材にならないのか。セックスは必ず男から求められるものか。

避妊を要求できるかばかりでなく、未婚時に妊娠したらどうするか。相手が結婚してくれなくても、ズバリあなたは「未婚の母」になれるのか。結婚を考えない性の相手となる男は、子どもができたら育児にも協力するつもりなのか。などのことも考えさせなければならぬと思います。

(京都・安東尚美)

◆We四月号を読みながら、自分の小・中学時代を思い出しました。

私は中学三年三学期に歩けなくなって、結局三学期は一度も行っていない。小・中学時代の思い出は、同級生と遊んだこと、そして、私をおんぶしてくれた人たちのこと。男子全員が私をおんぶした経験を持っていると思います。女性のカバンを持ってくれました。知識を学んだという記憶はほとんどなく、心の交流を学んでいたと思います。特に、三の三学期は一度も学校に行かなかったので卒業に関してもめたそうです。しかし、担任の教師が卒業証書を渡すべきと言われたそうで、歩けなくなっていた私は、卒業式の日は

学友に連れられて出席しました。

卒業後も、教師は度々拙宅に來られ、数年前に亡くなられました。私はこの教師から、知識を教えられた覚えはありません。そしてまた、この教師も私に対し、勉強を強いたこととはなく、中三の成績表を私は手にした覚えがありませんでした。ただ教師は確かな眼で私を見守っていたことは感じていました。

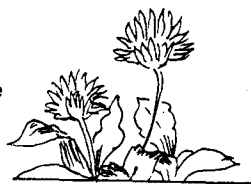
遠い思い出ですが、しかし、今日私が外に出て、臆することなく交流をもてるのは、この教師と同級生との交流から育てられたものと思います。最首悟先生の「学校は子供たちがいて、相互に関係しあって、そういう力が学校を作っている」ことを、この教師は知っていたのではないかと思われまします。二十二年前の昔を思って……。

(岩国・森章二)

◆四月号、目次が一頁になって淋しいですが、新しい連載では、仙田さんの俳句と「荒野のバラ」がよいと思いました。仙田さんの、官能的なのに大らかで少しもいやらしさがなく美しく思いました。「荒野のバラ」は、言われることが一つずつ納得できるものばかりでした。どの頁を見ても、皆さんが一生懸命がんばっていらっしゃるのがわかりました。

(三鷹・中野敬子)

Weの 読者会だより



〈We 福島の会〉

◆はじめておたよりいたします。四月四日、私（飯岡）の家で、西内みなみさんを中心に四名の参加者で読書会が持たれました。福島に移り住んで三年から数カ月の人まで、みな他の都市から越してきたいわゆるよそ者ばかりでした。

Weの成り立ちから現在の状況までを、西内さんからひと通り説明していただき、さてこちらでは何をテーマに進めたらよいだろうというところで、思いつくまま色々なことが出されました。小学校の制服のこと、PTAの在り方、転勤する先生へのお餞別、福島の公立高校は男女別学が多いこと、地域の人がよそ者を見る時、個人ではなく夫の職業を通して価値判断されること等々、以前には考えても見なかったことがこちらではあることが話さ

れました。

それでは福島のよいところは何かと問われますと、素直な子どもたちと恵まれた自然環境（今のところは、と言った方がよいようです。五年後の国体に向けて田んぼや畑や山は、体育館や道路になっていきつつあります）と言えます。

ところで我が家の長男は、中学一年生になりました。「いやだなあ坊主頭は」といいながら髪を切ってきました。学校の事前説明会では、「一応今のところ坊主にお願ひしております」と、決して強制とは言っていないでしたが、周囲には一人も長髪の子はいません。このような状況の中で子どもに「いやなら切らなくてもいいんだよ、おかあさんも応援するから」と言ったところで無理なようでした。

学校へ行くのは本人ですし、周りと合わせることでよいことと、小学校時代から教育されてきてますので、当然の成り行きなんだと思えました。おかしいことはおかしいと言える人に育って欲しいと願っています……。話し合いはつきなかったのですが、夕方になってしまい、続きは次回五月十日、西内さん宅にてです。

人と人との出会いは不思議なものです。私が東久留米に住んでいた時には西内さんと知り合えず、三年後に福島で、しかも小学校のPTAを通してやっと出会えました。とても楽しい人で、会えてよかったと思っています。彼女の人柄と行動力に敬服しています。

（飯岡淑子）

こんなこともありました

「好きです 新男類」の会

関西春のつどいは前夜祭・後夜祭もとびきり楽しかったとのこと。前夜の食べもの持ち込み豪華メニューの一部を次に☆明石の魚棚で朝仕入れた魚を散らしたちらしずし

☆福知山で料理したたけのことふきの炊き合わせと自家製の焼き豚

☆サンドイッチアラカルト

☆かぼちゃパイ風クリーム煮

☆クロワッサン式マヨネーズかりんと

☆キムチ、きんぴら

☆おだんご桜もち

当日夜の交流会、後片付けは「新男類」がてきぱきやっていたとは、さすが！

・Weの会通信・

連絡先 鈴木昭彦

〒146 東京都大田区矢口3-30-1-109

☎03-756-4551 FAX03-756-0014

会計（会費送付先） 芦谷薫

〒182 調布市東つつじヶ丘3-6-17

〒振替／東京2-402519

Weの会はWe誌と読者の方たちをつなぐ会です。毎年12月の総会で活動方針などを決定。年会費1200円で、会員の声・情報をのせた通信をお届けします。

日増しに暖かくなっています（この号が出る頃は初夏だね）。皆さまお元気ですか。

We夏季フォーラム実行委員会の鈴木昭彦さん、根津公子さん、若竹こしら、そして編集部の青木さんのメンバーは、三月二十五日に開かれた「We関西春のつどい」へ参加しました。テーマは「好きです！新男類―90年代は女男共生の時代」。夏のフォーラムの相談も兼ねて、桜満開の神戸へ♡ホントに美しかったです！パネリストは、夫婦別姓・事実婚を実践しておいでな佐竹隆幸さんと、男も育児を！と活動を展開中の関西育時連から梶田淳平さん、家庭科教師を目指すチャーリー吉田こと吉田明弘さんで、三人とも素晴らしい！今、

日	時	内 容
8/3	14:30—17:00	人形劇および語り——木島知草
	18:30—20:30	夕食および交流会
	20:30—21:30	部屋ごとの交流会 スクランブル・トーク 今こそ、新しい家庭科を
8/4	9:00—12:00	分科会（タイトルは仮題） ①夫婦別姓・婚外子差別をめぐって ②女性と政治 ③地元の女性史グループ ④家庭科をめぐって ・家庭科とコンピュータ ・中学校「家庭生活」の提案 ・共学を周囲に理解させるには他 ⑤女の解放・男の解放 ⑥環境（水・ゴミ）問題 ⑦静岡の教育 ⑧外国人労働者の問題 ⑨メディアの中の性差別 他
	13:30—17:00	シンポジウム「アジア・こども・人権」 シンポジスト―最首悟・松井やより コーディネーター 関千恵子
	18:30—	花火大会・コンサート この指とまれ交流会
	9:00—10:00	さよならタイム
	10:00—	分散会 ①天城コース ②柿田川コース ③新しい家庭科と、そのネットワークについて
8/5		

Weの会のパワーにも、（ずっと前からですが）圧倒されどおしでした。忙しいから…という尻込みがいかにナンセンスなものか、実感の一泊二日で、大いにガソリン補給をさせていただいたと思っています。

さて東京にもどって、夏季フォーラムの身も、徐々に詰め段階。細かな段取りを、アセリ始める今日このごろ。関西でい

たあのゲンキの素と、実行委員一人一人の持ち味をうんと磨いて、この夏季フォーラムが、参加者にいつぱいパワーを分けられるように…と、ちよつとプレッシャーかな？ けれど、Weの夏季フォーラムづくりに参加できることは光栄です。四月八日の実行委員会段階で決まったことは左の表のとおりです。多数のご参加を！！

（若竹稜子）

十字路



〔青森〕「核燃」に怒りの

声―六カ所で四千六百人反

核集会（朝日4/9）

上北郡六カ所村で八日、

核燃料サイクル施設の建設

反対を訴える大規模な抗議

集会が開かれた。集まった

市民団体や労働団体の参加

者たちからは、昨年十二月

に建設凍結を掲げた村長が

誕生してからわずか四カ月で、事業者が建設

を再開したことに「住民を無視した」と怒り

の声が上がった。

（里村涼子）

〔福島〕出席督促状送付問題―福島市教育長

が陳謝（福島民報3/13）

福島市教委が登校拒否児宅に配慮を欠いた

出席督促状を送付した問題で筋内洪一郎教育

長は十二日の市三月定例議会本会議で、小林

善明議員（民社）の質問に答えて「出席督

促状の送付は過去三年間に今年度の二件を含

め五件あった。学校教育法の趣旨を十分理解

せず法文そのままの督促状を送付してしまっ

た。慎重さを欠いたと深く反省している」と

述べた。

（西内みなみ）

〔千葉〕産廃物処分場許可で不服の審査請求

（千葉日報4/6）

小櫃川上流の君津市川谷地区に建設された

産業廃棄物処分場に反対し続けている「小櫃

川の水を守る会」の渡辺みつ代表ら二十人は

五日、県が二月六日に同処分場の許可を出し

たことについて、許可の取り消しを求める行

政不服審査請求書を県に提出した。処分場の

下流には、君津郡市などに水を供給する浄水

場があることから、守る会は水源汚染の心配

を訴えていた。

（木田直子）

〔埼玉〕日の丸問題「拘束力持つ新要領に従

う」―富士見市議会で教育長（毎日3/27）

県内の自治体でただ一市、同要領の撤回を

求める意見書を採択した富士見市議会では、

二十六日の一般質問で、共産、社会両党議員

が、議会の意向を尊重して強制しないよう、

指導を求める質問をした。これに対して江田

昭司教育長は「議会を軽視するわけではない

が、法的拘束力を持つ新要領に従う」と議会

と文部省の板ばさみに苦しい答弁を繰り返し

た。

（脇美智子）

〔北海道〕夜間中学札幌に誕生（北海道3/

25）

管理や受験戦争とは無縁の「本当の教育」

を目指して、札幌の市民たちが来月、道内初

の自主夜間中学「札幌遠友塾」を開く。戦争

や貧困で学校にも満足に通えなかった人た

ち、最近増えている登校拒否の子供など幅広

い世代が共に学び、交流する場にする計画。

東京や大阪には公立の夜間中学があるが、民

間の自主運営は全国的にも数が少なく、大き

な期待が寄せられている。

（高橋芳恵）

〔長野〕「キムの十字架」全県で上映（朝日

4/10）

戦時中、長野市の松代大本営の建設工事で

強制労働をさせられた朝鮮人の兄弟の献身的

な愛を描いたアニメ映画「キムの十字架」（山

田典吾監督）の第二回上映実行委員会（塩入

隆委員長）が七日、松本市内であり、県内約

四十地域に地区実行委員会をつくって全県的

な上映運動をしていくことにした。「キムの

十字架」は、長野市の児童文学作家、和田登

さんの原作。朝鮮人の悲しみや愛を通じて、

戦時中に犯した日本人の責任を問う作品。

（宮崎春美）

〔神奈川〕原子炉冷却水漏れ―安全協定締結

へ運動（朝日3/4）

昨年十二月、麻生区王禅寺の武蔵工業大学

原子力研究所の研究用原子炉から冷却水が漏

れた事故で、「武蔵工大原子炉事故を考える

市民連絡会」は三日、市立嵯山小で集会を開き、今後の対応について協議した。その結果、同研究所に隣接する麻生区虹が丘と緑区すすき野の住民を中心に新たに、「虹が丘・すすき野地区武蔵工大原子炉事故を考える会」を発足させ、今後は同会を中心に「川崎市などに同研究所と原子炉安全協定を結ぶよう働きかけて行く」ことになった。(渋谷裕子)

〈愛知〉公害「輸出」現地でチェック (朝日 3/24)

日本の商社が合弁で出資しているフィリピン・レイテ島のパサール銅精錬所の公害を監視するため、名古屋の市民グループが中心になって現地に監視事務所を置くことになった。亜硫酸ガスなどによる周辺住民の健康被害は以前から指摘されていたが、継続的に定点観測することで、フィリピン政府や日本の関係企業への改善要請に役立ててゆく。

(山本直子)

〈大阪〉森林保護へ再生紙―高槻市一日から使用運動 (朝日 3/30)

高槻市は四月一日から庁内で「再生紙使用運動」をスタートさせることにした。コピー用紙、上、中質紙、市刊行物に古紙再生紙を使う方針。森林資源の保護が目的で、一年間で約

千五百本分の樹木を救うことができる、という。府内の自治体では、ほかに府と大阪市が四月から同じ運動に着手する。(大江美香子)

〈鳥取〉性別の壁一段と低く―初の女性課長に期待 (日本海 3/25)

県教委の人事異動で初めての女性課長が誕生した。知事部局の民生部高齢者対策課課長補佐から生涯学習課長に起用された相見寿子さん(55)で、県教委では「女性特有の細やかさと発想を生かしてほしい」と期待している。ことしの人事ではこのほか、女性の管理職として校長三人、教頭二十三人が新規登用された。これで女性管理職は校長九人、教頭四十九人となり、小学校教頭は百六十九校中四分の一強の四十六校を女性で占める。(前田享子)

〈福岡〉小中高生野宿労働者を襲撃 (フクニチ 3/18)

福岡市と北九州市の公園や河川敷などで生活している少なくとも十一人の野宿労働者が、小、中、高校生らにエアガンで撃たれたり石を投げられ襲撃を受けていたことが、野宿労働者の生活支援グループの調べや労働者の証言で明らかになった。(安部宣人)

〈京都〉在宅介護、男性ヘルパーは必要 (毎日 3/30)

「男性障害者の自立に、今の生協には男性ワーカーの不足が大きな問題」と森永ヒ素ミルクの被害者で両手足が不自由な田端秀臣さん(34)が、自ら組合員として登録する京都福祉生協準備会の出版物に寄稿した文の一節。

「同性の方が気兼ねしないし、抱きかかえてもらう時などに不安がないから」と田端さん。今、男性のホームヘルパーを望むのは、障害者の男性だけではない。国保の赤字削減、医療費抑制の号令のもと、診療報酬体系が変わり、具体的な治療を施す必要がないとされる患者の長期入院が困難になったことから、在宅の痴ほう症老人や寝たきり老人が増えている。しかし京都市は、男性ヘルパーの開拓には消極的だ。(塚崎美和子)

〈沖縄〉高校生が反戦ビデオつくる (沖縄タイムス 4/9)

身近な地域の歴史を研究している高校生たちが、米軍基地や沖縄戦をテーマとしたカラービデオ作品を完成させた。この高校生らは県立那覇高校沖縄歴史研究クラブのメンバー十人。作品のタイトルは「戦跡と基地の狭間」と「真実の十分間」で高校生らしい視点で編集されており、平和教育の視聴覚教材としても十分活用できるものである。(大嶺麗子)

★「子どもと家庭」テーマに厚生白書

津島厚相は30日の閣議に、「長寿社会における子ども・家庭・地域」と副題をつけた1989年版厚生白書を報告した。'56年以來33版を重ねる同白書のテーマに、「子どもと家庭」がそろって据えられたのは初めて。白書は、女性の社会参加や晩婚化が進むなかで、21世紀の超高齢化社会を支える子どもの数が減り続け、家庭の状況にもこれまでにない変化が起きていることを重視。これからの福祉政策の新たなテーマとして、働く女性が子どもを健やかに産み育てていけるための支援策や、地域づくり対策の重要性を強調している。(3.30日付朝日)

★離婚原因の母子家庭急増

厚生省が29日発表した'88年度の「全国母子世帯などの調査(全国1800地区より無作為抽出した母子家庭2000世帯、父子家庭約400世帯などを対象に調査、分析)」によると、離婚が原因による母子家庭が62%、約52万9千世帯と、5年前に比べ約50%も急増したことがわかった。「年間約18万件と過去最高の離婚件数を記録した'83年と'84年が今回は含まれているため」と同省では説明している。(3.30日付読売)

★日教組教研一「日の丸」「君が代」で論議白熱

岡山県で開かれた分裂後初の全国教研集会で、29日午後、4月から学校行事で義務化される「日の丸」「君が代」についての集中討議が行なわれ、全国の教師ら約120人が参加、入学式を目前に控えて緊迫する学校現場の様子が次々報告された。しかし、これを定めた新学習指導要領がルールに乗り、スケジュール通りに走り始めているため苦渋の色が濃く、会場では若い教師を中心にこの問題への関心が薄れている点を嘆く声も目立った。(3.30日付読売)

★「日の丸」「君が代」一義務づけで実施校増える

新学習指導要領による「日の丸」「君が

代」義務化の先取り実施で注目された今年の小、中、高校の入学式で、実施状況を公表した26府県、5政令指定都市教育委員会によると、岩手、栃木、富山など10県が完全実施するなど全国的に実施率は大きく上がったと見られる。混乱もほとんどなかったが、地域ぐるみで実施しなかったところなどもあり、教育の現場に深刻な影を落としたケースも。(4.13日付読売)

★脱「偏差値」で手引書作り

文部省がまとめた「進路指導の実態調査」によると、学級担任が進路指導に利用する資料は、中学、高校とも、テストの成績や偏差値といった「学力に関するもの」が全体の9割を占めている反面、「面接・相談」や「適性・趣味」などは4割前後にとどまっている。一方、生徒の側が進路を決める時に最も参考にするのは「家族との話し合い」や「自分の適性」などで、学校の指導が、生徒、親の希望や考え方と必ずしも一致していない実態がある。このため、文部省は、改善策を盛り込んだ教師向けのマニュアル作りをし、父母、生徒、教師の「三者面談」が教師の意向の「押しつけ」になりかちな現状を改めたいとしている。(4.15日付朝日)

★高校教育「ゆとり」に逆行

「ゆとりと充実」を掲げた高校の学習指導要領が全面実施されて9年目になるが、高校教育の現場では、1週間当たりの授業時間数が大幅に膨らんだり、卒業に必要な単位数が増えるなど、文部省のかけ声とは裏腹な実態が生まれていることが、同省が全国の全日制公立高校(3893校)を対象に行った「教育課程編成状況調査」で明らかになった。大学進学率の向上や第2次ベビーブーム世代の登場によって、各校で「受験シフト」が一段と強まっていることが、背景にあるとみられる。

今回の結果について、文部省は「指導要領の趣旨に照らすと、懸念される結果であり、学校側への指導を強めたい」(高等学

校課)としているが、小手先の対応策を疑問視する専門家もいる。また、高校側からは「大学入試のシステムが変わらないと、『ゆとり』の教育も難しい」という声も出ている。(4.12日付朝日)

★死刑存廃、司法面では決着

'67年、警備員ら4人を射殺して殺人、強盗殺人などの罪に問われ、21年に及ぶ長期裁判の中で、死刑→無期懲役→破棄、差し戻し→死刑、と量刑判断が分かれた、元喫茶店員、永山則夫被告に対する差し戻し後の上告審の判決公判が17日、最高裁第三小法廷で開かれ、安岡満彦裁判長は、一審と差し戻し後の控訴審の死刑判決を支持、被告側の上告を棄却した。これにより永山被告の死刑が確定する。第三小法廷は、焦点となった永山被告への死刑の適用について永山被告に対する前回の最高裁判決で示した基準に照らしたうえで、「被告の生育歴や犯行時の年齢(19歳)を考慮しても、その罪は誠に重く、死刑は妥当」と述べた。(4.17日付朝日)

★避妊ワクチン開発

1日付英オプザーバー紙が伝えたところによると、従来の避妊ピルより副作用が少ない上、最高2年まで効果がある避妊ワクチンが英国で開発された。これまでの猿で行なった実験では、100%の効果が示されており、今後人間の卵子による実験をする方針という。この革命的なワクチンは、英医学研究評議会の下部組織である生殖生物学部門に属する科学者たちによって開発された。(4.2日付読売)

★戦闘部隊は男の聖域か

米国では、総兵力の11%を女性が占めるにもかかわらず、海軍、空軍では法律で、陸軍では軍内の規則で女性兵士を戦闘部隊に配属することを禁じている。ところが、昨年末の米軍によるパナマ侵攻の際、憲兵隊の女性兵士が、遭遇したパナマ国軍と戦闘を交え、「米国史上初めて女性兵士が戦

った」と注目を浴びた。同時に、戦闘部隊に女性配属が禁じられている事実が改めて浮き彫りにされ、後進的なのか、女性保護のための正しい処置なのかを巡って議論が沸き起こった。見直しを求める法案も議会に提出されたが、女性兵士側から見直し反対論が出るなど、簡単に結論は出そうもない。(4.3日付読売)

★チェルノブイリ原発事故後遺症

ソ連、チェルノブイリ原発事故による放射能汚染は約4年たった現在もなお深刻で、自国内だけで約220万人が汚染地域に住んでいる、として外国の援助を求めるアピールが同原発北方のソ連白ロシア共和国から出され、国際原子力機関(IAEA、本部ウィーン)は、早ければ4月にも各国専門家で作る特別調査団を現地へ送ることになった。オーストリアの新聞も最近、現地からの報告として6千人ががんで死んだと報道し、IAEAは「死者6千人」はうのみにできないとしても実態を調べる考えだ。同事故の死者がソ連の公式発表の31人を大きく上回る可能性も出てきた。(3.24日付朝日)

★ODA ダムに反対運動——インド

インド西部のナルマダ川に半世紀近くかけて数千のダムやせきを造る巨大プロジェクトの一環として、日本の政府開発援助(ODA)資金も投入して3年前に始まったサルダル・サロバル・ダムの建設が、流域住民らの強硬な反対にあっている。同ダム建設で立ち退きを迫られる住民は約10万人にも及び、その6割近くが少数民族。

3日に現地を調査した鷲見一夫・横浜市立大教授は「建設強行で『開発難民』を生む恐れもある」と指摘し、住民の間からは「日本は援助をやめよ」という声も出ている。現地の反対運動は、昨年9月に流域の町で開かれた6万人集会をきっかけに盛り上がり、今年3月には、ダムサイトから約100キロ上流の橋が1万2千人の座り込みで封鎖された。(4.18日付朝日)

編集後記

◆三年後、中学一年で必修の「家庭生活」をとりあげましたが、難しかったですね。

一見、いろいろな形があつていいが市民権を得つつあるのに、根っこのところでは、旧態依然の家族制度が息づいている、なかなか根強い、というのが実感です。そのへんのところは、一月号「性役割の固定化は揺らいだか」で再度切り込んでみたいと思っています。(青木)

◆葉書や、振替用紙の裏に書いてくださったほんの数行でもうれしいのです。どうぞ小誌へのご意見、ご感想をお寄せください。

◆毎月十五日頃の日、編集部一同、近くの公民館に出向いて、小誌の発送作業をしています。せっせと手を動かし

ながらも話の弾むひととき。ぜひいらしてください。発送日が前後しますので事前に編集部までご連絡を。(稲邑)

◆石川尚子さんの原稿を読んで早速、小三の息子に料理を作らせたり、夕食の後片づけを娘の日課にしたり、自分に都合のいい事はすぐに影響されるけれど、こどもたちにとって、はたしてどの位、我が家は安らぎの場になっているのだろうか。自分が管理されることは嫌いなくせに、気が付くとファシズム体制になっている。またまた考えさせられる号になりそう。(河村)

♥こんにちは、初めまして、このほど、柳田さんより引きつぎ、今月号よりお手伝いさせていただきます。何分、

編集の仕事は初めてですので毎日が勉強と思い、編集部の方々に助けていただきながら楽しくWeに溶け込んでいきたいらと思っています。

明かるいのと、元氣だけが取り柄の二児の母ですが、よろしくおねがいいたします。

(渡辺裕子)

★病状の重い夫を一番喜ばせるのが、娘の子。まやの訪問です。バンザイ、アワワ

ワ：チョチョの三点セット

が訪ねる度に一点ずつふえ、

コンニチワ、イチイナイバ

ア：大人の一声の笑い声が

うれしくて、何度でもくり返

してくれます。幼いものの輝

く生命力が、病人に、いと

き痛みを忘れさせるありがた

くて不思議なシーン★次号は

「環境・資源」を見つめる

です。Weの仲間を一人でも多

くふやして下さい。(半田)

Weバックナンバー (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおさえの上、振替で直接ウイ書房へ)

90/5 生、そして死に迫る教育 (¥567)

90/4 '90年代、学校を変えよう (¥567)

89/2.3 教育の中の性差別 (¥567)

89/12 コミュニケーション—私をひらく (¥567)

88/夏 家庭科の可能性を探る (¥721)

89/4 何をねらうか「生活科」 (¥567)

87/11 「家族」どう変わる、どう変える (¥530)

87/夏 女たちの教育改革提言 (¥700)

85/8.9 法律と私たち (¥530)

85/7 離婚と子どもたち (¥530)

85/6 家族、その人間関係 (¥530)

85/5 結婚の風景 (¥530)

84/12 つき合いを考える (¥530)

84/10 支え合いつつひとり立つ (¥530)

84/6 地域に生きる (¥530)

83/7 コミュニケーション (¥500)

新しい家庭科—

Vol.9 No.3 1990年5月20日発行

定価567円(本体550円+税17円)送料共

年間購読料・定価7107円(本体6900円+税207円)

編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

☎・FAX03(326)1380 郵便振替 東京6-59867

第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292

印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

家庭科 **NETWORKING**

ネットワーキング

あなたも是非お仲間に

「家庭科新時代」がついにそこまで来ているというのに、家庭科の先生の顔色は冴えません。黙って手を束ねていれば、私達が願う家庭科とは全く異なるものが上から降りてきます。現場では、日々新しい問題が生まれ、一校に一人か二人の家庭科の先生は、相談する仲間にも恵まれず、研修の時間もままなりません。いきおい、成果の上がった他の人の実践を真似ることにもなりかねません。

今必要なのは、家庭科を何故男女共に学ぶのか、その理念を再確認し、現在の生徒に噛み合う授業を創る力を育てることです。自分の問題から出発して、解決の道を探る中で仲間を得、連帯感を強めながら力をつけることを願うのが「家庭科Networking」です。会員の投稿中心の会報を年10回発行し、下記のチューターが相談に乗ります。年会費…3500円、入会費…500円、詳しいことは、ウイ書房内事務局にお問い合わせ下さい。(☎03・326・1380 郵便振替 東京3 413347)

〔チューター〕

- | | |
|-------------------------|---------------------|
| 飯野 こう (小学校家庭科) | 田中 恒子 (家庭科教育、住教育) |
| 石川 尚子 (高校家庭科) | 土川 礼子 (中学校技術・家庭) |
| 井田 恵子 (人権、法律問題) | 寺内 定夫 (感性を育てる教育) |
| 一番ヶ瀬康子 (社会福祉、生活問題) | 寺島 紘子 (高校家庭科) |
| 入江 一恵 (高校家庭科) | 西内みなみ (教科教育としての家庭科) |
| 小沢 牧子 (教育の中の心理学) | 福島 澄香 (高校家庭科) |
| 小沢 有作 (民衆の教育史、差別問題) | 福田三津夫 (小学校家庭科) |
| 奥地 圭子 (不登校のこどもの問題) | 朴木佳緒留 (家庭科教育とその歴史) |
| 香川 敦子 (中学校技術・家庭、生物学) | 牧野カツコ (家庭科教育、家族) |
| 加藤 真代 (コンシューマリスト) | 宮崎 礼子 (家庭科教育、経済) |
| 金森トシエ (女性問題、社会一般) | 村瀬 幸浩 (人間と性の教育) |
| 櫛田 真澄 (中学校技術・家庭) | 村田 泰彦 (教育学、家庭科教育) |
| 桑畑美沙子 (地域と結ぶ家庭科) | 森 幸枝 (高校家庭科) |
| 児玉すみ子 (生徒とのコミュニケーション) | 湯川憲比古 (教育行政、情報化社会論) |
| 駒野 陽子 (中学校教育、女性問題) | 湯沢 静江 (高校家庭科) |
| 酒井はるみ (家庭科教育、家族、フェミニズム) | 善積 京子 (結婚、女性学、家族問題) |
| 佐々木 賢 (学校に魅力を失った生徒の問題) | 吉田 紘子 (家庭科教育、衣生活) |
| 庄司 和晃 (民俗学、全面教育学) | 他 (敬称略) |